

平
勢
力
物
語
漢

913.32

1

今泉定介先生講述

現今世に誤謬杜撰の類書多し、
しどふ購讀の諸賢は各々書店
に就き今泉氏講述の伊勢物語
講義と御指名ありん事を

伊勢物語講義

東京

誠之堂發兌

伊勢物語講義

今泉定介

講述の目的

此の書は、古來、大に世に行はれたれば、之を解釋せるものも、甚、れほし。其のねほかたを舉ぐれば

(一)伊勢物語愚見抄(五卷) 一條 兼良 (六)同 拾穗抄(二卷)

北村 季吟

(二)同 宗祇抄(一卷) 宗祇 法師 (七)勢語臆斷 (四卷)

沙門 契沖

(三)同 關疑抄(五卷) 細川 幽齋 (八)伊勢物語童子問(十三卷)

荷田 春滿

(四)同 難義註(一卷) 作者 不詳 (九)同 古意(六卷)

賀茂 眞淵

(五)同 集註(十二卷) 一華堂切臨 (十)同 新釋(六卷)

藤井 高尙

などなり。此の外、なほ多し、中にも新釋は、出版の時代、最、あたらしければ、説も亦新しく、いはゆる、古註をあつめて、大成せるものともいふべし。故に余もおほやう新釋により、またいかかと思ふ、ふしは、他の古註をも取り、鄙見をも加ふべし。但、余の此の書を講ずるは、中等教育の程度を目的とすれば、綴蜜を欲せず、高尙を望まず。唯、簡易にして、讀者の會得しやすからん事を期せり。さて講述の順序は、まづ、語を解し、次に文章の大意を述べ、(語釋のみにて、おのづから、大意の聞てゆる處には、殊更に述べず)歴史に涉れる處には、まゝ、事實をも説明すべし

すべての物語

○伊勢物語講義

世に名高き浦島子の話などは、物語のうちにあるものなり。もと、物語とは、話説の義にして、ふるく日本紀には、談の一字をも訓みたり。されば、物語といふは、平安朝特有のものにはあらねど、或は人生の盛衰を述べ、或は脚色を設けて、人情を寫し、以て消閑の具とするに至りしは、當時をもて始とす。さてすべての物語の文体と、結構とを見るに、おほかたは同じけれども、亦おのゝ異なる所なきにあらず、之を分類せば、左の三種となるべし

(一) 實事を其のまゝに記録せるもの

(二) 虚實相半するもの

(三) 全く虚なるもの

第一に屬せるは、榮花物語の類にて、名は物語といへども、其の實は即記録なり。歴史なり。故に古來これを雜史と稱して、物語と分つ。第二の虚實相半するものは、即、伊勢物語の類にして、大和物語、今昔物語なども亦こゝに屬すべし。第三は、竹取物語、源氏物語の類にして、全く作者の想像により、趣向を構へたる空中の樓閣なるものなり

右に云へる第一類のものは、歴史的の記録にして、第二類と、第三類とは、小説的の記録なり。故に當時の世態人情を知らんとせば、此の第二類と、第三類との物語に據らざるべからず、其の故は、小説は殊に歴史の參考となることも多かれはなり。されば、物語を研究する結果は、たゞに文辭に富むのみならず、併せて當時の歴史を明らむる事を得へし。伊勢物語の如きは、殊に然とす。ただ、其の記事、敗徳亂倫の譏なきにあらざれども、これやがて社會の真相をうつし出だせるものなれば、ひとり此の書を

を責むべきにあらざるなり

さて物語の中にて、ふるきは竹取と伊勢となるべし。此の二書、いづれかさきいづれか後といふこと詳ならず。文の体は、竹取は、詞のつき、てにをはの用方、古文の格に近し。伊勢は詞少く、意を含めて、事もなきさまに書きなしたれど、道勁にして、しかも優美なるは、老練の筆といふべし。此の他住吉、大和、今昔等の物語あれども、まづは源氏物語なるべし。言毎に意を含めて、照應の巧妙なる、文藻の富麗なること、誠に古今に其のたくひを見ざる所なり

此の書の作者および名稱

此の事は、余さきに「伊勢物語は詞花言葉のみを事とせざる説」といふ一篇の文を草して、國文學雜誌第二十四號に掲けたる事ありき。文中おのづから作者及題號の事に涉れり。又、本書の全篇に、多少の關係あり。故に全文をかりて、あらかじめ、讀者に本書の大様を示さんとす

此の物語の詞短くして、趣の長きことは、はやく定家卿も、歌よまん人は、古今和歌集に次ぎて、詠ふべき書なりといはれたり。されば、世人もてよなきものにめではやし、先輩の之を註釋せられしものもいと多し。されど、多くは徒に詞花言葉の雅なるを愛づるにとゞまりて、深意の潜める處、また、その事實の國史を補ふに足るものあるに至りては、之を看破りしものいと希なり。作者もいかに夜の錦の心地しつらん。今その深意のある所と、事實の國史を補ふに足る事とを謂はんには、まづ、この物語の作者、并にその時の勢を論せざるべからず。これ余が説の杜撰ならざることを欲すればなり

さて此の書の作者の事につきては、古來、種々説あれども、まづ、清輔朝臣の袋草紙に、伊勢物語和歌二百五十首、業平朝臣所作也、偏非彼人作歌耳、古今間、歌有興書載歟、又不論自他、隨便同人歌、様書刻之、若是密事令混之故歟、云々と云はれたるをばはじめとして、定家卿は、其の奥書に、只いふかしのみ記して、何人の記とも定められず。平田篤胤氏（古史本辭經）は、もと業平朝臣のれも宗旨ありて、自記せられし歌集にて、在五中将物語といひしものなりしを、後人の忙事をも取りまじへて、かく名つけしものならんと云はれたり。其の他細川幽齋（伊勢物語關疑抄）伴信友（假字本末）富士谷御枝（北邊隨筆）加納諸平（伊勢物語論）野々口隆正（在五中将日記復古解）海量法師の諸氏その説は、同じくして、皆、業平朝臣の自記せるものならんと云へるは、實にさる事なり。さるを春満（伊勢物語童子問）眞淵（伊勢物語古意）の兩翁は、この物語の中には、業平と同時の人、またるれより後なる天曆の比の人の歌さへ入れたり。はた、二條の後の事などあるは、彼の陽成上皇は、天曆のはじめまでおはしまさんに、御母后の密事を、あらはならでも、文につくりいでんことあるべからず。この書を以て、業平の自記とするは、本を極めざるいまだしき謗なりといはれたれど、はやく大鏡にも、二條の后をつれまゐらせて、業平が奈良へ行きかくれしを、堀川大臣國經卿のとりかへしに來り給ふよし見たり。且、時代の差違あるは、作者のあたし事を加へて、あらぬまにかきなしたるにこそあらめ。又、二條の后に通はれたることを、いみじき罪にたれりといへど、其の代のさまをしらぬ惑にて、あらぬ強説なり。實に今の世などにてこそ、さる事あるには、いみじき事なれど、男女の道いたくみだりがはしき當時なるがうへに、入内したまはぬ凡人にてさへおはするほどのこと

なれば、何ばかりの事にかあらん。又かく密事などをほめかし、さたかなる事をも、あらぬまにかきなしたるなどこそ、物語書の體なれ。もしかゝる事だにもせすば、いかなる書をか、物語といはん。但、業平朝臣と二條の后と、密通の事あるによりて、陽成天皇は、實は業平の子なりなどいふ妄説は、年代をも考へざる僻説なること、土肥經平氏が、春湊浪話に、國史は参照して、詳に辨せられたることし。

右の證と論とによりて見たらんに、業平朝臣の自記ならずといふ説は、立つまじけれど、いよく余が説を確にせんために、猶、一二の徵をあげんに、はやく藤原兼範卿の、和歌童蒙抄にも、業平が手づからかみや紙に書ける、伊勢物語の朱雀院の塗籠にありけるには云々と見え、顯昭が古今秘注にも、此の書は古今集より前なるものとしければ、業平朝臣の自記とせしこと著し。されば、信友も、古今集はこの物語をとりて載せられたるなり。そは、其の詞書、集中なべての例に似ず、いたづらなるばかり長くて、皆、此の物語に見えたる詞に、おほかた異ならざるをもて知るべしと云ひ、平田翁は、この物語をもて、平假名文の祖とせられたりき。業平朝臣のみづからかき記したるものとせば、身すかの物語をもて、元慶四年なれば、其の近き世にもせられたりとせんにも、古今集撰はれたる頃よりは、二十餘年前の事なればなり。また、或説に、この物語は、伊勢の御の筆ならんといへり。其の説に云はく、少年十三幼書之、似家集文體、故號伊勢物語、又曰、非彼筆者、何稱伊勢乎と見えたり。されど、此の文體、女のかけるさまならず。男のしかも文に巧なる人のかけるにて、女の体いぞ老いたりと、眞淵翁のいはれたるが如し。且、非彼筆者、何稱伊勢乎といへるは、云ふにもたらぬ事と

もなり、此の物語は、ヒサト僻事物語といふ、なづ／＼なることは、清輔朝臣のはやく云はれたるものを、又、眞字本に、村上天皇第八皇子、六條宮具平親王御撰とあるは、本居宣長翁が、玉勝間に云はれたるが如く、後人のさがしらに、かきいれたるものなるべし。但、眞字本と、假字本との優劣は、強ち本居翁の説にも従ひがたし。うは、藤井高尙の、伊勢物語新釋に云へる如く、互によきあしきとてころ／＼あればなり。

さて粗云へる如く、この物語は、業平朝臣の時勢をうとまじう思ふ頃、來し方の事ども詠める歌など、心やりにみづからかきあかれし記の、笥の底などに残りて、世に傳はりけるを、後に事好める人のあらぬさまに作りなして、初冠より身まがれるまで、業平朝臣の事にて、業平朝臣ならず。隨にそれとわきがたく、書き僻めたるなん作り主の心しらひにて、それやがて袋草紙にいへる、僻事物語の義なりける。されば、孰れを自記のくだり、いづれを加へたる條ども、作者をれきては、當時も猶わきかたかりけん。まして、今の世にして、まさにわきなんや。さるを、野々口隆正の復古解に、中將自記の章を撰み出でたるは、穿ち過ぎたりとやいはん。かく作者は、巧に書きひがめたれば、一わたり見れば、その詞花言葉のみこそ雅なれ。その事實は、いとみだりがはしくて、健なる人のつまはじきは、のがれざるべし。されど、源氏物語の當時のさまを褒貶し、落久保物語の繼母を戒しめしなど、均しく、深き心ありて、かけるものと覺ゆ。うの故は、三代實錄、元慶四年五月二十八日の條に、從四位上行右近衛中將兼美濃權守在原朝臣業平者、故阿保親王之子、正三位行中納言行平之弟也。阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平、中畧業平、体貌閑麗、放縱不拘、畧無才學、

善作和歌云々と見たり。此の無の字は、有の字の誤ならんと或説にいへり。實に畧無とては穩ならぬ心地すれば、有の誤ならん。大日本史の傳には、畧無才學の四字を削られたり。貞觀十四年五月十七日、敕遣正五位下右馬頭在原朝臣業平、向鴻臚館勞問渤海客、是日客徒賜宴と國史に見えたり。此の日の宴には、客人と言談贈和の遊なともありしなるべければ、猶無の字は、有の字の誤とする方よけん。かくはかくしき人がらなるを、大日本史の贊には、雖居歌仙之一而輕薄放蕩名檢掃地としも云はれて、古今集に載せられて、さしも惟喬親王に忠なりしてとは其の傳に載せられざるはいかにや。また、此の物語の深意のある所を知らざる過といひつべきのみ。服部南郭の在五中將の論と云ふに

夫在中將者、談達哉、其文也、不假追琢而巧爲微辭、乃託古昔鄙事自述、諸語自出、割名熾婉、盖亦穢德玩世之徒、豈可引繩墨而論哉、中畧至如其好色牀第不修、世固疾焉、然觀其世宣淫是競、一時貴遊子弟乘塢垣望復關者、握手無罰、目眇不禁、則習尙之使然也、乃病其風俗乎可也、奚獨責在中將爲淫首哉、昔司馬相如、自作傳叙其臨邛之奔、且文辭靡麗、不爲行蔽、古之人乎、亦不足怪已、後世刻剝之流、好揚惡德、令古人無所容足、則莫取諸風雅也、和歌者流、家傳戶誦、而不問其人、可謂厚矣、中畧夫小野王、失志自匿也、紀氏雖微亦傲世、不改其樂也、乃在中將之周旋其際、締交欵曲、終始如一、豈不偉哉云々

と、此の論實に云はれたり

○伊勢物語講義

今此の物語を以て、三代實錄大鏡裏書等の書に照しておもふに、この中將、おほやけの事にあづからしめ給はゞ、いとめでかるべきを、當時文德帝第一の皇子惟喬親王を、儲位に定めたまはんの御心なりしに、外舅良房大臣に憚りたまひて、或は神に祈り、又は秘法を修し給ひしも、御本意を遂げたまはず。遂に樂殿の後(良房の女)の腹に生れたまひし、惟仁親王を太子に立て給へり。この時、惟仁親王生れたまひて、僅に九月なりき。是れ藤氏專權のはじめにして、やがて王室の衰頽をまねく基とは成りにしなり。そもいかなる枉律日のあらふる世なりけん。かゝる未曾有のことさへ出で來にける時なれば、志あらん人は、いかでか憤らざるべき。はた惟喬親王は、第一の皇子におはしまして、帝もかねて、儲君とれもほしたれば、ゆめ違ふまじきを、良房大臣の權威にねされて、お立ちたまはず。御弟の惟仁親王に越えられ給ひければ、惟喬親王は、いかに憤りねはしましけん。封戸をさへ、三度まで辭したまひ、貞觀十四年七月、頼に出家して、沙門となりたまへるさまは、三代實錄に見えたるが如し。此の物語の中に、惟喬親王、小野にすみたまひし時、まゐられたる條に「やゝ久しくさふらひて、古への事なぞ聞えたり」また「なくく來にける」などあるを按ふに、業平朝臣も、この皇子を御位につけ奉らまほしくねしたること明けし。然るに、當時王室といへども勢なく、政をとるものは、藤原氏の一族に外ならず。帝の御志も得とげさせ給はぬ勢なれば、朝臣、深くそのはからひの公平ならぬ事を憤りて、遂に身をはふらかしたるなるべし。是れ一人の力、よく左右し得べき時勢にあらざりしが故なり。然れども、此の事、おほやけにもはゞかりありければ、二條の後の御事によりてのみ、世をうとみしやうに書きまざらしたるは、例の作者の心しらびなりけり。又「昔男ありけり、身はいといや

しながら、母なんみこなりける」と見えたるは、伊豆内親王(桓武天皇の皇女)の御子にて、阿保親王は御父なればなり。是れはたいかなる官位をも給はるべきに、さもあらぬは。時勢にあはざるがゆゑなりと、憤られしことを推して知るべし。又「れにはや、女をば一口にくひてけり」などいへるは、かくばかり契りしなからひなるを、御兄達やがて昭宣公國經卿などの、いときびしく制し玉へるを喻へたるものにて、やがて、當時藤原氏の威權のきびかりしことを、おもしろくほめかしたるものとぞ聞こえし。

又、末段に至りて、「むかし男いかなりける事をおもひけるにかよめる」

おもふこといはずたゞにやみぬべき、われとひとしき人しなれば

と云はれたるは、實に此の書の骨髓一首の歌にあらはれつといふべし。凡、其の器ありて時にあはぬ人は、我有二寶劍といひ、白玉はよししらずとも、われしゝらばなどよみて、和漢ともに、慷慨悲憤の情は異ならぬものなりけり。彼れにては、演義小説と云ひ、こゝには物語といふ。うれ作り出づる人は、身の幸なきをなげき、世を憤るあまりに、昔の全盛なりし世をしのび、今の世の中、咲く花のにはおが如く、榮ゆるを見ては、やうくうつろひなんことを思ひ、或は時めく人をあざみななどして、寓言にかけるもの多し。この書も、唯、當時の聞をはゞかりて、あらぬさまにかきひがめてこそあれ。藤原氏の專權を、痛く惡みてものせるものなれば、終に我にひとしき人しなればと云ふやうに、誇りかに歎きせられしこそ、後の世までも、必やうとはなりつらめ。實にその世のさま、今より思ひやるだにうれたし

また、今きたる狩衣も、紫にすりたれば、やがて、若紫のすり衣とつゝけたるのみにて、上の句は、全く序なり。しのぶのみだれとは、信夫摺は、其の模様のみだれてあるものゆゑに、我が心のかぎりなく、思ひ亂れたるに掛けていへるなり。○おひつぎては、追續なり。すぐにといふが如し。今の語に、唯今まゐらんとし意を、追付まゐらんとし意も、こゝと同じかるべし。○ついで云々、ついでに、順序の意なり。をりからの順序が、風流でおもしろき事なりと、女の方にも思ひしならんとなり。こゝにて、業平朝臣の狩りに行きし物語は終れり。以下の文は、作者がいふ意なり。物語文の上にては、これを草紙地といふ。然るに、舊註には、次の源融公の歌を引きたるを、女の返歌のこゝろにしたるは非なり。

(大意) 男、その頃、賞賛せる摺狩衣を着てありしが、姉妹の女を見て、愛憐の情たへ難く、狩衣の裾を切りて、歌をかきつけて贈りしが、其の歌は、おのが今きたる摺衣によそへて、心の亂れたる事をあらはしつる、即妙の歌なりしかば、折につけて、女も風流にれもしろき事と、思ひけんとなり。べちのくのしのぶもちずりたれゆゑに、みだれうめにしわれならなくにといふ歌のこゝろはへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなんまける。

(語釋) みちのくの云々、此の歌は、古今集戀の部にでて、源融公(河原左大臣)の歌なり。さて上の歌に、しのぶのみだれといへるは、信夫摺のみだれといふ心なるよしを知らさんとて、此のうたを引き出でたるなり。大意は、上は序にて、信夫もちずりの如く、我が心の亂れしは、誰ゆゑに亂れそめしならん。我が心から亂れしにはあらず。君ゆゑであるといひて、戀人に贈りし歌なり。但

古今集には、「みたれうめにし」を、「みだれんとおもふ」とあり。○かくいちはやきは、かやうに、こざかしきなり。いちはやきは、もと、逸速の意にて、おだやかならず荒ぶる意なれど、轉りては、ねだやかならず、こざかしきことにも用ふ。○みやびは、風流の義なり。○なんしける、なんは、やなど、同じ係辭けるは、結詞なり。

(大意) きのお今日初冠したる、わかきをこの事なれば、今の世の人ならば、よろづつゝましくて歌よみかくることもせせむを、昔人は、わかくても、かくこざかしき風流をしけりといふ意にて、はじめに初冠して、狩にいきけりといへるに照し合はせて、見ん人の心うるやうにたくみにおもしろく、書きたるなり。

(二段) 昔をどとありけり。ならのみやこははなれ、此のみやこは、人の家まださだまらざりける時に、西のみやこに、女ありけり。

(語釋) ならのみやこは、前にいへり。○此のみやことは、平安城の事にて、すなはち、今の西京なり。抑桓武天皇の延暦三年に、奈良の京を離れて、山城の長岡に都をうつされ、同じく十三年に、又、平安城にうつされたるなれば、こゝは、長岡の京をいふとも思はるれど、長岡には、僅に十年の間なれば、なほ、平安城といふ方よろしかるべし。○人の家まださだまらざりける時に云々、まだは、いまだなり。さていまだ家々もといふのは、ざるをいふは、都うつされて後、ほゞ無きを知らせたるなり。かく、わざと、此の京のはじめをいへるは、業平朝臣の歌を、全くあげたれど、其の人ならぬまに、時代をたがへて、かきなしたるなり。此の物語の心づかひ、皆、しかり。平安城の始は、業平朝臣のう

まれざる三十年前の事なり○西のみやて、皇城の大門を朱雀門といふ。此の朱雀門より、羅城門までの道を、朱雀大道といふ。この大道より、東の方を、東の京といひ、(左京、また、洛陽といふ)西の方を、西の京といふ。(右京、また、長安といふ)

(大意) 昔男ありき。此の頃は、奈良の京は、舊都となり、新都の平安城も、極めてはじめつ方なれば、いまだ、皇都市區のわりかたもどのはず、人家も、おほからぬ時なりしが、西の京に、また一人の女ありけりとなり。さて其の男は、暗に業平朝臣を指せるなり

其の女、世の人にはまされりけり。かたちよりは、心なんまさりたりける。

(語釋) 世の人にまされりとは、容貌と心となり。氏姓の尊くまさる義といへるは、わろし○心なんまさりたりけるは、姿も心も、世の人には立ちまさりたるが、殊に心だてよろしく、情ふかく、物のあはれを知る女なりとなり。なんは、指し示す意の係詞にて、ぞといふに似て、平穩なり。けるのるはなんの結詞

(大意) こゝは、女の様子の大体をまづいひて、次につばらかに解く文の體なり。古文には、此の體おほし。今人の文にも、「何處ろくに遊びぬ」などまづいひて、あとに、其のくはしき様子をしるすは、やがて此の體なり

ひとりのみにあらざりけらし。

(語釋) のみは、一ありて、二なき意をあらはす詞。こゝに、一人ばかりにもあらずとなり○けらしは「けるらし」の約にて、推し測る意の助動詞。今言に「サウナ」など譯すべし

(大意) こゝは、此の物語つくりぬしの心にて、推し測りていふ言にて、彼の女は、外にもまた、思ふ人のあるさうなどの意をあらはせるなり

うれを、かのみめ男、うちものがたらひて

(語釋) それをとは、彼の女を指す○まめ男、まめとは、信實また忠誠などの文字をよめり。こゝもそれらの字の義にて、心のあだくしからぬ男をいふ。好色人の心の、あだくしき男は、かへりて女を思ふもせちならず。信實なる人ぞ、心づくしなる戀はするものなり。まして「世の人に心も貌もまさりたる女」なれば、まめ男の、深く心をとめたるやうに、書きなしたるなり。眞淵翁などの説に、こゝのみめ男といふは、あだくしき男の事を、反對に信實人と云へるならんと解かれたれど、わろし○うち物かたらひて、うちは添へていふ語にて、意味なし。物かたらふとは、何事にまれ、談話することをいふ

かへりきて、いかゞおもひけん。時はやよひのついたり、雨うぼふるにやりける

(語釋) かへりきては、まめ男が、彼の女の家より歸り來てなり○いかがおもひけんは、作者の詞にて、信實男の心中を、想像せる詞なり○やよひは、陰曆三月をいふ。やよひは彌生の義にて、草木のいよく生ひ茂れる月なればいふとぞ○ついたりたちは、「月立」の意にて、いつにても、翌月に入れるをいふ。されば、必しも朔日(月の第一の日)の事のみならず。其の月の初旬などいふ義に廣くいふ。こゝも然り。古註に、二月晦日の夜あひて、朔日の朝歌をつかはせるにやといへるは、穿ち過ぎてわろし。かへりきてといへばとて、曉にかへりて、其の日の事とせずとも、よろしからん○

そぼふるは、じよぼくふる義なり。春雨のさまをいふ○やりけるは、歌をなり

(大意) 大体、信實男は、心の中には、たとひいかほを戀ひしく思ひたりとも、詞に出だしては、とやかくいはぬものなるに「おきもせず」の歌をよみてやりしは、彼の女のひとりのみにもあらぬやうに見ゆれば、彼是と思ひみだれての、しわざならんと、記者の推測なり

おきもせずねもせでよるをあかしては、

春のものとてながめくらしつ

(語釋) おきもせず、ねもせでとは、物思ひ亂れて、終夜ねられぬをいふ。かゝる折のつねとて、おきてもをられぬが故に、あしてつくく物おもふさまなり○春のものとては、春のつねとての意○ながめは、今は唯眺望する意にのみいへど、古言の意は、默然として、物おもひする事をいふ。それに、こゝは、長雨をかけたり○つは、ぬといふに粗おなじく、其の事のしはて、止まる意を示す詞なりと知るべし○此の歌、古今集、戀の部にあり。さて其の詞がきに「やよひのついたちばかり、しのびに人に物らいひて後に、雨のそぼふりけるに、よみてつかはしける」とあり。此の詞がきによりても、歌の意は、こゝと異ならず。たゞ、わざとはしがきをたがへて、もとのよみ人ならぬさまに紛らしたるは、例の作者の心なり。さて此の歌、かへり來て、すぐといふよりは、二三日のちに贈れりといふ方よろし、うの故は、ながめとは、前にもいへる如く、默然として、物おもふさまなればなり。直に其の日おくれりとは、此の歌の詞にもかなはず

(大意) この歌の一首の意は、夜をほしれきるとも、ぬるともなく、思ひあかし、もし、明けなば、ま

ぎれて思ひ慰みやせんと、曉をまちしに、又をりから打ちくもりたる空のけしきに、春雨さへ、しよくふれば、いと物おもひ加はりて、いかにともせんかたなし。されど、かくはれくしからぬは、春のならひじやと、ながめくらしつとなり

(三段) むかし男ありけり。けさうしける女のもとに、ひじきもいふものをやるどて。

(語釋) けさうは、懸想の字音なり。戀のおもひをかくることをいふ。こゝは、男の心を懸けたる女をいふ○ひじきもは、和名抄に、鹿尾菜を比須木毛と訓めり。海藻の名なり。これは、海中の石上に生ずるものにて、長さ二三寸ばかり、鼠尾の如くにして、蒼黒なり。衰れば黒くして、味、淡泊なるものなり。今ひじきといふ。男より、今、この物を女の許へおくるどてなり

おもひあらばむぐらの宿にねもしなん、

ひじきものには袖をしつゝも

(語釋) おもひあらばは、我を思ふ心あらばなり。さてこゝを、藤井高尙の新釋には、おもひなくばの誤なりとて、改めたり。さて我がかく苦しく君を思ふおもひなくばとの意に解したり。其の説あしからねど、諸本共におもひなくとある本なければ、しばらく、舊説による○むぐらは、葎にて草名なり。荒野れよび人家の庭前などにも生ずる草なり。莖細くして長く延び、葉と共に毛あり。葉はあかねに似て小さく、七八葉車輪の如く、一處に着きて、八九層をなすものなり。むぐらのやどとは、草のあれはてたる家の義○ねもしなんは「寢モシヤウ」なり○ひじきものとは、引き敷き物と

いふ意にて、前の鹿尾菜^{ヒメギ}を含めたるなり。○袖をしつゝもは敷き物には、袖をしなからもの意なり
(大意) 此の歌のすべての意は、金銀珠玉を以て、飾れる家も、何かせん。妹とし居らば、八重むぐら茂れるいふせき小屋に、敷物なく、袖をかたしくとも、厭はじとの意なり。高尙は、初の句をおもひなくばと改めて、さて一首の意は、「けさうしても、女のつれなく、とやかく物おもひするにうんじて、つらく思ふには、此のくるしきれもひのなくば、君がかくつれなくて、獨袖をかたしきつゝ、いふせきむぐらの宿にねても、堪へられなを、くるしきおもひのあるゆゑに、ひとりねの堪へがたきといふ意なり云々」と説きたり。其の方こそ、明らかなり。たゞ私に改めたるなれば、たしかにそれと定めがたし。いづれにても見ん人のとるにまかす

「三條の後の、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞうどにて、れはしける時のことなり」。

(語釋) 二條の後は、藤原長良公の第二女、御名を高子と申せり。貞觀八年十二月、清和天皇の女御となり給ひぬ。陽成天皇、貞保親王、敦子内親王などの御母に涉らせ給ふ○まだみかどにもつかうまつりたまはで、いまだ、女御ともなり給はで、家にあられるをりの事よとなり○たゞうどは、凡人の音便にて、いまだ無位無官におはせる時をいふ、○此の二條の后云々は、後人の側へ書きそへたるが、のちに、本文に混じたるなるべし。男女の間の、いたく亂れたる事なれば、あながちこの事のみ責むべきにあらぬは、いふも更なれど、かく二條の后云々と、きはやかに御名を出だしたるは、この物語のすべての文体にも叶はねばなり。暗に、業平朝臣なる事をしらせながらも、皆、むかし男ありけり」とやうに、おぼめかして、かけるものをや。其の外、時代をたがへ、官位を改め、事實か、またはあらぬ事か、殆、知りがたきまでに、書きひがめたるぞ、記者の心にはありける

(四段) むかしひんがしの五條におほきさいの宮おはしましける西のたいに住む人ありけり

(語釋) ひんがしの五條は、東の五條にて、地名○おほきさいとは、^{オホキサイ}大后の意。いはきの音便なり。これは、五條皇太后順子の御事なり。五條の後は、藤原冬嗣公の御女、仁明天皇の御后なり。文徳天皇には御母。清和天皇には御祖母に涉らせ給へり○おはしましけるは、御座けるにて、そこに御すまひ遊ばされきとなり○西のたいに住む人ありけり。西の對とは、皇太后のおはします御殿の、西むかひにある局やうの所をいふ。そこに住む人を。たれともいはぬこそ、此の物がたりのふりなれ。さるを、こゝは、二條の後の御幼少の頃、こゝにおはせるを指せりといふ説あれど、いかゞ

るれをほいにあらで、ゆきとふらふ人、こゝろざしふかゝりけるを、む月のとるかばかりに、ほかにかくれにけり。

(語釋) それをは、夫をにて、前を承けたる代名詞。こゝは、西の對に住む婦人を指せり○ほいは、本意の字音なり。良き事にも、惡しき事にも、己がしかせんと思ひ込みたることを、本意とはいふ。さもあらぬを本意にはあらでといふなり。始より、此の女をと思ひ込みたるにはあらで、何となく、事の序に行きかよひそめて、懇にたづねとひなとするより、かたらひつきて、志の深くなれるを、ほいにはあらで云々といへるなり○ゆきとふらふは、往き訪ふにて、懇に尋ね訪ふことをいふ○人

は、男を指せり。こゝろざしふかりけるをは、男の志、親切なりしとなり○む月は陰曆の正月をいふ。名義は、諸説あり。一説には、睦月^{ムツキ}にて、正月は、殊に人々の親睦する月なればいふと。又、一説には、生月^{ウツキ}の約にて、春陽發生の意なりと。また、一説には、元月^{モトツキ}の約にて、一年の月のはじめなればいふと。いづれかよからん。看ん人の撰にまかす○とをかばかりは、十日計なり。ばかりは、頃^{マタ}の意なり○ほかにかくれにけりは、女がなり。志ふかく、親切に思ふ男をすて、隠れたるは、密事のあらはれん事をはかりてなるべし

(文意) 彼の西の對に住める婦人の許へはじめは、わさく通ふにはあらで、事の序に行き通ひたりしが、互に知り合ふほど親しくなるが人情なり。まして、男女の間は、互に親密になりやすきものなれば、此の男も、次第々々に、志ふかく、何事にも、すべて懇切に心を盡くし居たり。さるを、如何なる事情かありけん。正月十日頃に、其の婦人は、男に一言のこと傳もなく、又、一封の書をも贈らずして、外へ移りて、姿をかくしきとなり。さばかり思ふ男をすて、隠れたるは、心あさき女のやうなれども、さにはあらず。心ある男が、かく思ひしめたる女なれば、さる薄情のものにあらじ、然るに、姿をかくしたるは、よほど憚るべき事のありしがゆゑなりとなり

ありどころは聞けど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、なほ、うしと思ひつゝなんありける。

(語釋) ありどころは、在處にて、隠れたる婦人のありかなり○人のいきかよふべき所にもあらざりければ、他人の往き通ふべき所にあらざとなり。其の故は、此の女、然るべきゆかりある人の家

なごに、隠れたるなるべければ、男は殊に憚りて、往くこと能はぬなり○なほは、今言に「ヤツハリ」又「其ノ上」など譯す。こゝは「ヤツバリ」の意なり。始、行方もしらず、隠れたる時、いどうしと思ひつるが、在處の知れたれば、喜ぶべきに、他人の往き通ふべき所にあらざれば、ヤツバリ憂しとおもひてなり○うしは、憂の義、思ふまゝならで、心の苦しむをいふ、今言に「ツラシ」などいふに當たるべし○思ひつつは、思ひながらなり○なんは、係詞にて、るが結詞なる事、既に前にいへり。此の思ひつゝなんありけるといふ詞にて、憂しとおもひながら、月日經たることを含めたるなり

(文意) 女のゆくへ知られずして、憂しと思ひをりしに、あり所を聞きては、よろこぶべきを、さても通はれねば、やはうしと思ひきとなり

又のどしのむ月に、梅の花さかりに、こゝろを思ひ出で、かの西のたいに、いきて、たちて見、おて見、みれど、こゝろに似るべくもあらず。

(語釋) 又のどしのむ月は、さきの西の對にて、女に睦^{ムツ}びし次の年の正月なり○梅の花は、其の男の家なる庭の梅の花なり○こゝろは、去年をいふ。名義は、或説に、昨日^{キノ}をきうといふに通せりと、又一説に、去歳の字音なるべしといふ、いづれかよからん。定めがたし○西のたいは、西の對にて、前の婦人の住みたる所なり○いきては、往きてなり○たちて見、おて見は、立ちつ居つして、見るをいふ。思ひあまりて、心配のさまなり○みれどは、見れどもなり。あまりくときやうなれど、古文には、かゝる例多きことなり。下文にも「と見から見みれど」などもあり。同じさまなり。語勢これがために強し。味ふべし○似るべくもあらずは、如何に見ても、去年の梅花に似たりとは、思はれず

となり

(文意) 女に親しみし次の年正月、梅花の盛なる頃、せめて彼の女のありし所だに見んと思ひたちて、西の對に往きて、立ちつ居つ思ひあまりて見れども、去年の梅花の如くならず。是いかなる譯かといふに、梅花の去年に異なるにはあらざるべく、我が親しみし女のあらぬが爲なるべしとの意を含めたるなり。さて梅の花のさかりとしも、此にいへるは、歌に「春や昔の春ならぬ」とある、春の文字のためにおける伏線の文なり

うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたふくまでふせりて、こぞを戀ひてよめる。

(語釋) うちなきては、打ち歎きてなり。打ちは、例の添詞にて、意味なし○あばらなるいたじきあばらは荒れ顔れたるをいふ。いたしきは、板敷なり。床の疊なくして、板のみ敷きたる所をいふ。さてこゝは、荒れ顔れて、住む人の無き所なるをあらはせるなり○月のかたふくは、月の西に傾き落つるまでなり○ふせりては、臥してなり○去年を戀ひては、去年親しみし人を戀ひ慕ひて、せめてもの心やりに、歌を詠みきとなり

(文意) 同じ梅の花ながら、去年のやうに思はれぬは、我が思ふ人のあらぬがためなりと、いろいろに思ひ亂れて、はては、打ちなきぬ。さて住む人もなく、荒れ顔れて、戸障もなき西の對に臥しながら、月の落つるまで眺めやりて、遂に一首の歌を詠みぬとなり

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

(語釋) や春やのやの字は、「やは」といふ意味にて、打ち返し詞なり。上の句は、月やむかしの月ならぬ、春やむかしの春ならぬ、月も春も皆むかしのまゝなりとなり○むかしとは、思ふ人に逢ひたりし時を指す○本の身とは、思ふ人に逢ひ見たる時の身といふことなり。さて身にしてといふは、「身ナガラ」の義にて、かく終めたる所に、昔のやうにもあらぬことといふ意、おのづから含まりたるなり。「にして」といふ語の勢、上の句に、月も春も、昔のまゝなるにといふと應じて、しか聞てゆるなり。味あべし

(大意) 此の一首の意は、月やはむかしの月にあらぬ、月もむかしのまゝの月なり。春やはむかしの春にあらざる、春もむかしのまゝの春なり。然るに、たゞ、我が身ひとつのみは、本のむかしのまゝの身ながら、昔のやうにもあらぬ事となり。さて歌は、をさなく詠めとは、古人の教なり。この歌など、まことに幼きまにて、れほかたの人情にて考ふる時は、いはゆる馬鹿々々しきほどなるべし。されど、實際に、悲しくも、苦しくもある時は、かゝる事にまで、思ひ感ふが、人情の常なり。うたはさる思の切なる場合に、あふるゝものなれば、かくをさなきが、却りて、あはれに、身にしむ心地するものなり。さる理を知らずして、論理的にこどわりめきたる事をのみ詠まんとするがゆゑに、今人の歌は、なかくに見應なきが多きやかし

とよみて、夜のほのくどあくるに、なくなく、かへりけり。

(語釋) ほのくどは、夜の明けかゝる頃なり。仄に物が見ゆるほゑになるをいふ○なくなく、泣

きつ泣きつの義、泣きながらなり

(文意) むかしのなごりを慕ひて、かへりかねたるに、夜が明けては、さすがに、人目をはゞかる事なれば、泣きながらかへりけりとなり。あはれなるさま、想ふべし

(五段) むかし男あり。東の五條わたりに、いとしのびていきけり。みろかなる所なれば、門よりもえいらで、わらはべのふみあけたる、ついひちのくづれよりかよひけり。

(語釋) 東の五條は、前に解せり。〇わたりは、あたりといふに同じ。近邊の意なり、こゝも、女は何人ともわからぬさまに書きひがめたるなり。〇いとは「甚く」「最も」「極めて」などの意なり。〇しのびては、隠れてなり。「世をしのぶ」また「人目をしのぶ」などいふこれなり。〇いきけりは、行きけりなり。〇みろかなる所とは、密かに通ふ所といふ意なり。今言に「表はれぬ所」などいふに同じ語なり。〇門よりもえいらでは、人の通行する門口より入る事はせずとなり。隠れて通ふなればなり。〇わらはべのふみあけたるとは、童子等の遊戯して、踏み穿けたるなり。〇ついひちは、築土の音便なり。又、中略して、ツイぢともいふ。土墻のことなり。さてむかしのついひちは、近世の土堀の如く、かたく築きかため、瓦などおきたるものならねば、崩れ易きなり。大鏡などに、ついぢの上へ、などしこの種を蒔きて、さかりに咲き満ちたる事などあれば、上まで、たゞ、土を築きたるのみなりしなり。

(文意) 昔、一人の男ありしが、此の男、東の五條近邊に、人しれず通ひけり。固より表むきに往く

べき處ならねば、門よりは入らずて、土堀の自然にくづれたる所を、童子等が遊ぶとて、たびく踏み越ゆるゆゑに、いとくづれて、道のあきたるをたよりに、此の男かよひきとなり

人しげくもあらねど、たびかさなりければ、

(語釋) 人しげくもあらねどは、内の人も、又、出入の人も、ねほからねどなり。〇たびかさなりければは、男の通ふ度、しばくになりければなり

(文意) 土堀のくづれたに修覆せぬのみか、童子等の踏みあくるほど衰へたる家なれば、人目まれなるはいふまでもなければ、しかし、通ふこと度々になりければとなり

あるじ、聞きつけて、其のかよひちに、夜ごとに、人をすゑて、まもらせければ、彼のをどこ、いけどもえあはで、かへりけり。さてよめる

(語釋) あるじは、主人なり。原語は「有主」の義ならんといふ。〇かよひちは、彼の男の通ふついひちの崩れたる處をいふ。〇人をすゑては、人を置きてなり。〇いけどもは、往けどもなり。さてこのいけどもは、いけどもいけどもの意にて、毎夜の義を含めたる、一種の格と知るべし。〇えあはでは彼の女に逢ふことできずして、歸りきとなり

(文意) 今は主人の耳に入りて、夜ごとに、番人を置けば、男は例の如く往きたるも、まもら人あれば、あやしと思ひてかへり、又いけどもいけども、毎夜人をおきて守らせければ、いつもえ逢はで、かへりぬどの意なり

人しれぬわがかよひちの關守は

よひく／＼ごとくうちもねな／＼

(語釋) 人しれぬは「人にしられぬ」といふべきを約めたるなり。文章には、文字の制限なきがゆゑに、かかる詞を用ふべからざれど、歌詞には、まゝある事なり。古今集に「人しれぬおもひをつねにするがなる、ふじの山こころわが身なりけれ」などあるも、こゝと同じく「人しれぬ」の意なり。○關守は、關所を守る役人をいふことなれど、こゝは、土牆を守るものに、うつしていへるなり。○よひくは、宵々なり。每宵をいふ。よひは、夜のいまだ深けぬをいふ詞なり。○うちは、例の添詞。○ねな／＼は、寝よかしとの意。なんは、ねがふ義なり。

(大意) 一首の意は、人にしられぬ、我が通ひぢなれば、關守のねなば、外に咎むべき人なし。此の關守は、每宵うちも寝よかし。さらば、通ひてあはんものをとなり。此の歌も、をさなきは、心のせちなることをあらはして、なか／＼にあはれふかし。

どよみけるを聞きて、いといたうゑんじけり。あるじ、ゆるしてけり。

(語釋) いたうは、痛くの音便なり。今言に「ヒドク」また「キツウ」などいふに當たる。○ゑんじは、怨の字音なり。やはり、うらむをいふ。男が「人しれぬ」の歌を詠みたる事を、娘が聞きて、父のなさけなき事を怨みたるなり。○あるじ、ゆるしてけりは、娘のゑんずるに困りて、あるじも心ぐるしくおもひしかば、土牆の番人をやめて、通ふ事をゆるしけりとなり。

(文意) うちもねな／＼のわび歌を、人づてなごに、娘の聞きて、あはれにいとほしく思ふあまりに、關守のことを、なさけなしとうち怨じたりしかば、あるじもゆるしたるなり。主ハも娘も、情ふ

かきさまに作りなしたしたるは、此の物語の骨髓なり

二條の后にしのびて、まわりけるを、世のきこえありければ、せうとたちの、まもらせたまひけるとぞ。

(語釋) 二條の后は、前に云へり。○世のきこえは、世の中への外聞なり。○せうとは、兄人の音便なり。兄をいふ。二條の后の御兄たちならば、照宣公、國經卿なり。さて前にもいへるが如く、此の二條の后云々の文は、後人の書きうへたるものなり。或は、業平朝臣が、二條の后のいまだ入内し給はぬ前に通ひけるを、かく書き僻めたるものなるかも計り難し。されど、其の名を公然出だして、かゝんことは、此の作者の本意にあらぬこと、前々よりいへるが如し。

(六段) むかし男ありけり。女のいあふまじかりけるを、年をへて、よばひはたりけるを、からうじて、女こゝろあはせて、ぬすみ出でて、いどくらきにおてゆきけり。

(語釋) 女のえあふまじかりけるとは、女の方に、ゆゑありて、此の男には、さらに逢ひがたきよしなり。○年をへては、年を歴てにて、幾年にもわたりてなり。○よばひは、萬葉集に、結婚とかき、靈異記には、伉儷の字を訓めり。言の意は、呼より出でたらん。今世の語に、婦をよふといふも、是なり。さるを、男女の情を通せんために、夜に隠れて、這ひわたる意にいふ事となれるは、其のわざの似つかはしきが故なり。又、此の夜延の意より轉りて、すべて、戀する人の、女のもとに往くをいふ。こゝも然り。○けるをのをは、今言に、がといふ義に心得べし。○からうじては、辛の字の義なり、今言に

「ヤツト」と譯す○女の心あはせてとは、始より、女も此の男をきらひて、逢はぬにはあらず。逢ひがたき事情ありて、逢はざりしが、年を歴て、通ふことの、あはれに絆されて、女も今は心を合はせたるさまなり○ゐてゆくとは率て往くなり。今言に、つれてゆくといふに同じ。暗夜は、人目を忍ぶに便宜なれば、夜にまぎれてつれて、往きぬとなり

(文意) 事情ありて、逢ひがたき女のありしが、男はようながら、女のもとに年へて絶えず通ひて、其の召しつかふ人などによりて、とかくいひ入れき。然るに、女も此の男をきらふにはあらず。たゞ、深きゆゑありて、逢ひ難ければ、つれなく答へて、過ぎぬれど、年へていふが、いとほしくて、今は身をすてて、あひなんと女も心を定め、かくては、逢ひがたし。共に外へゆかんとて、しのび出づるかまへして、ぬすみ出でられたりとなり

あくた川といふ河をいきければ、草のうへにおきたりける露を、かれは、なにうどなん男にとひけるを、ゆくさきは、いとどほく、夜も更けにければ、

(語釋) あくた川は、芥川なり。延喜式に、攝津の國、島下郡に、阿久刀神社あり。此の處の河なるべし○河をいくとは、河に沿ひて行くをいふ○草のうへにおきたりける露とは、水のほとりは、草の露も殊におかければ、似つかはしきなり○かれはなにうとは、彼は何うにて、其の深き露の、やみ夜の星の光に、きら／＼と映するを、「白玉かなに予」と男に問ひたりとなり。さるを、下の歌に「白玉か」とある故に、詞を省きて、おのづからしか聞てゆるは、文の妙なり。すべて、古代には、歌にいへると、同じやうなる事をば、はしがきにはかゝざりき。又、眞淵翁は、いかなる人か露を知らざらんといはれたれど、いかゞ。こゝは、フト見たるまゝに、怪しみたる情にて、これぞ古文の常なる。

櫻の花を雪か雲かと思ふも、亦、これと同じ。いかでか、こゝのみを疑ふべき○男にとひけるをの下に二句ばかり脱ちたるならん。かくては、文章とゝのはずと、上田秋成の、よしやあしやといふ書にいへれど、いかゞ。こゝは、男も答へんとは思ひければ、行くさきは、いと遠く、夜もふけにければ、いろいろ心にこたへもせずといふ意を含めたる文なり。此の物語は、詞少く、意を含めたれば、かゝる例はおほきずかし。又、うのうへ「神なり雨ふれば、れにある所とも知らず、あばらなる倉のありけるに」云々とつゝ、文勢なり。くりかへし見て、其の文脈をさとるべし

(文意) 芥川といふ河につきて往きしが、こゝは、水邊の事とて、川岸の草における露も、こゝのほか多く、星の光にさへ相映じて、きら／＼と見えき。女は、フト其の露を見たるに、「白玉か」とおもはるゝほどなりしかば、男に問ひしかど、男は、往くさきまだ遠く、殊に夜もふけわたりて、さきをいうがるゝゆゑ、答もせざりきとなり

おにあるところとも知らずで、かみさへいといみじうなり、雨もいたうふりければ、

(語釋) 鬼ある所とも知らず、「あばらなる倉のありけるに」と、つゝ、文勢なり。次の詞も同じく、あばらなるといふ所へかゝれり○かみは、鳴神なり。雷をいふ○いみじうは、すべて、甚すぐれたるをいふ詞なり。こゝは「キビシウ」また「ハナハダ」などの義なり○いたうは、痛くの音便なり。「ヒドク」の意なり。さて當時の書には、鬼の出でたる事、しば／＼しるせり。三代實錄には、仁和

三年八月十七日の夜、武徳殿の東の松原に、鬼の出で、女を食ひし事見え、其のほか、百鬼夜行などの事、諸書に見えたり。眞淵翁は、こゝも狐狸などのしわざなるべしといはれき。されど、前の作者の傳の處にもいへるが如く、實は業平朝臣が、かくまで、苦心して、かつは、深くかたらひける、高子を、御兄たち、即、昭宣公、國經卿などが、なさけなくも、制し止めて、取りかへしたるを、例の作者が、書き僻めて、虚か實か、わからぬやうに作りなしたるにてもあらんか

(文意) 夜もやうやう深けわたるに、鳴神さへ甚きびしく、雨も篠をつくが如く、男はともかくも、女へ所詮ゆくべくもあらざりしかば、鬼ある所どもしらで、里はなれたるさびしきところなれどもやどりぬとなり

あばらなる倉のありけるに、女をばおくにおしいれて、男は、弓、やなぐひをおひて、戸口に、はや夜もあけななと思ひつゝ、おたりけるに、

(語釋) あばらなる倉とは、戸などもなく、荒れ頽れたる倉をいふ。古の郷には、公の稻を納め置く倉、必ありき。それが稻を出だしはて、内むなしく荒れ頽れてありしなるべし。徳川時代までも、諸國の村里に、年貢米を秋の末より冬にかけて納むる倉あり。それを郷倉といひき。こゝも此の郷倉の類なるべし。○女をばおくにれし入れて云々、此の「れし入れて」などの詞にても、荒れ頽れて戸なども無きさまなる事を知らるべく、又、ほどなく鬼に喰はるべき女なれば、ものおそろしく覺ゐて、くらき倉の中には入りかねたるさまをも知らるべし。○やなぐひは、胡録、また、弓筋の字を訓む。言意は、矢之杙の轉ならん。矢を盛りて負ふ具なり。箠に似て、輕粗なり。十矢を挿す。其のか

たちへ、細く高く、筒の如きを壺胡録と唱へ、平たきを平胡録といふ。さて大寶の律令のさためにては、私に兵器を貯ふる事ハ、違令なりしが、此の制やうやく衰へて、此の物語のなれる比には、豪族諸國に勢をなし、盜人も多かりしかば、都の内にてすら、遠く行くにも、夜行などするにも、たゞ人さへ弓筋を負ひたるなり、此のこと、今昔物語などに多く見えたり。殊にこゝは、女を偷てみ、行くさまなれば、男も弓矢刀など帶びたるは、時世のありさまに適へるのみならず。こゝの文勢にも適へりといふべし

(文意) 何處の村里にても、郷倉は火をさけて、殊に里はなれたる、河邊などの、いとさびしき處にあるがつねなるに、其の郷倉の稻を出だして、守人もなく、戸なども荒れくづれたるを幸に見つけて、女は恐ろしかるを、無理に奥へおし入れて、我は戸口に用意しつゝ居て、夜の明くるを待ちきとなり

はや夜もあけななと思ひつゝ、おたりけるに、鬼はや、女をばひと口にくひてけり。あなやといひけれど、神のなるさわざにえきかざりけり。

(語釋) はや夜もあけななは、早く夜も明けよかしなり。なんは願の辭なり。○鬼はやは、鬼がモハヤの意なり。此のはやも、早く、疾く、の義なること言ふも更なり。鬼の事は、前にいへり。さてかく鬼一口にくひたりといひて、つぎにあなやといひけれど、あるは、異様なるが如くなれど、然らず。これはまづひとわたり云ひ終りて、たちかへりて、事のよしをこまかにいふ文法なり。かゝる類、文章にはいとれほし。○あなやは、あなもやも歎息の辭なり。今言に「アリアア」と叫ぶに同じ。○

神のなるさわざは、雷鳴の音の烈しきにまぎれてなり○えきかざりけりは、たゞに聞かざりけりと
いふとは異なり。奥なる女をおぼつかなく思ひて、氣はつけたれどもその意を含めたるなり

(文意) さらぬだに、物さびしく里ばなれたる郷倉なるに、夜さへ深け、雷さへいたく響きわたり
しかば、男は弓やなぐひ負ひて、たけき装はしたれども、尙、心には恐ろしく、うとましく思ひて、は
やく夜も明けよかしと思ひつゝ居たるに、鬼は、はやく、女をば、一口に食ひて、形だになし。女は
定めし「アリヤア」と大聲を揚げて、叫びしなるべけれど、神鳴の烈しき音にて、氣は始終つけ居り
しが、其の聲だに聞えず。まことに口をしきことなりきとなり

やうやう夜もあけゆくに見れば、おてこし女なし。あしずりをして、なけどもか
ひなし。

(語釋) やうやうは、次第次第に、又、ダンダンになど譯す、こゝは「ソロソロ」などいふ方、最、よく
あたるべし○おてこしは、率て來したり。引きつれて來たる女はなしとなし○足ずりは、左右の足
をすりて、泣くをいふ。すべて心の切なる時のわざにて、今の世にも、いふ詞なり。殊に小兒などは、
つねにこのわざをするなり。

(文意) 今まで辛苦したるかひもなく、武装して守れるせんもなく、夜あけて見れば、女の形だに
なし。口をしき遣らんかたなく、立ちをどり、足ずりして泣きさけびしかども、今更せんかたな
しとの意なり

「白玉かなにぞと人のとひし時

露とこたへてけなましものを

(語釋) 白玉かなにぞと人のとひし時は、前の草上の露を電の光に見て「かれはなにぞ」と問ひ
し時なり○けなましものをは、消えなんものをなり。けは消えの約言なり。露なりと答へて、我が
身もろのはかなき露と共に消え失せなば、かゝるうき目は見ざりしものをと、くやみたるさまなり
(文意) この一首の意は、白玉か何ぞと人の問ひし時、いそがしくて、なにとも答もせざりしを、今
思へばいとくやし。其のをり、露なりと答へて、其の露のはかなく消ゆるやうに、命きえなましもの
を、ながらへをりて、今かく悲しきめを見ることよとなり。思ふ人のなくなりたるかなしみには、
かくはかなき事をもいひ出づるは、人情のつねなるべし、またろのまゝにうつせるは、例の歌の得
色なりと知るべし

「これは、二條の後のいとこの女御ニヨウグサの御許に、つかうまつるやうにて、おたまへり
けるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて、おひて出でたりけるを
御せうと、ほり河の太政大臣、國經の大納言、まだ下ゲ藤フジにて、内へまおり給ふ道に
いみじうなく人の在りけるを聞きつけて、とゞめて、どりかへして、おはしける。
それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいとわかうて、後のたゞにおはしけるを
りのこととかや」

(語釋) いとこの女御とは、文德天皇の女御、明子、のちに染殿后と申せる方なり。女御とは、中宮

につぎたる女官をいふ。今の權典侍の如きもの○つかうまつるは、仕へ奉るなり○めでたきは、よろしき意なり。こゝは、容貌の美麗なるをいふ○ぬすみておひては、偷みて負ひてなり○御せうとは、御兄人の言便なること、前にいへり○堀河の太政大臣は、藤原基經公なり○下薦とは、奉公の年牒少くて、まだ賤官なるをいふ。今の世に、賤しく召し使はるゝものをいふも、是よりうつりて、下郎などの意となれるなるべし○いみじうは、甚しくなり。ヒドク泣く人のあるを聞きつけて、止めて取り返したりとなり○いとわかうては、甚若くてなり○后のたゞにれはしけるとは、二條の後のいまだ、后に立ち給はず、たゞ人にて、おはせる中の事となり○さて此の條は、後人の書き加へたるものなる事、前にもいへるが如し。何となれば、此の文には、業平朝臣の歌を多くあげて、其の人の事を作れりとは聞てゆれど、時世官位をも、その人ならずかへて、業平ならぬさまに書きたがへ、其の外にも、古人の名をあらはには擧げぬが例なればなり。かく心してかける記者の、天皇の御女の密事をあらはし、其の御兄弟たちの名をさへ擧げて、耻づかしめ給ふべきにあらず。これ本文の意にたがひたれば、同じ人の筆ならぬこと、更に論なし。藤井高尙の新釋には、此の條を刪りて載せず。又今昔物語に、昔、業平之妻被^レ喰^レ鬼事之語を題して、此の本文の如く、鬼にくはれし事をのみ書きたり。それらより思ひつきて、後人のかき加へたるにやあらん

(七段)むかし、男ありけり。みやこにありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいとしろくたつを見て

(語釋) みやこにありわびては、都に有り侘びてなり。わぶは、志を失ひて、思ひ煩らふさまを

いふ。こゝも、暗に業平朝臣をいふなるべし。前の傳の處にいへるが如く、業平朝臣は、惟喬親王を立て奉らんと、終始力をつくし、かど、遂に藤原氏の權威におされて、其の事さへとげ得ざりしかは、それらの事實を暗に指せるにもあるべし○あづまは、東國をすべていふ。正しくは、あづまの國といふべき事なり。されど、省きて、あづまのみもふるくよりいひき。此の名は、日本武尊が、碓日嶺にて、東南を望みて、彼の橘姫の事をねぼし出で、「吾妻はや」と歎き給ひしにこれり。此の後、山東諸國を吾妻國といふと、日本紀にもしるせり。さて業平朝臣の東降のことは、古今集にも見えて、たしかなる事實とは知られたり○海づらは、海邊をいふ。つらは、すべて物の上の平らかなる部分をいふ詞なり。山づら、河づら、池のつらなど皆同じ、人の面をつらといふも、此の語なるべし。さて伊勢尾張の間の海邊とは、今の桑名と、宮の驛との間の入海のはてに、道ありて、此の比は、往來せるなるべし。又次ぎの歌は、後撰集に「あづまへまかりけるに、過ぎぬるかた戀ひしくおぼえけるほとに、河をわたりけるに、浪のたちけるを見て」業平とあり。それをこゝには、例の書きひがめて、かくは作りなしたるなり○浪のいとしろくたつを見ては、磯邊をゆくに、浪の打ちよせて、高きたちあがるが、いと白くあがるをいふ

(文意) こゝは聞こえたるが如く、昔、男ありしが、其の男、都にては時をうしなひて、万事意の如くならず。よりにて、東國へゆきける道すがら、伊勢と、尾張との間の海邊をゆくに、浪のしろく立つを見て、旅中の感情を歌にあらはせりとなり

とゞくしく過ぎにしかたの戀ひしきに

うらやましくもかへる浪かな

(語釋) いとしくとは、事のひとつなるうへに、又、事のひとつ添ふ意にいふ詞なり。こゝはさらでも旅は過ぎにしかたの戀ひしきに、うらやましくも、浪のかへるを見て、又戀ひしさをひとつ添へたりとなり○後撰集には、二の句「過ぎぬるかた」とあり。いづれにてもあるべし○かへる浪とは磯邊に打ちよせたる浪の、引きてかへるといふ

(大意) もとやり、旅は過ぎにし方の戀ひしく覺ゆるものなるに、磯邊にたつ浪のかへるを見て、又一層都の戀ひしさを増しぬとなり

(八段)むかし、男ありけり。其の男、身はやうなきものに思ひなして、みやこにはをらし、すむべきところもどめんとてゆきけり。

(語釋) やうなきハ、無益の意とも、無用の意ともいふべし。みづから、世に益なきものに思ひなしてなり。こゝらも前の傳に論じたるが如く、業平朝臣の、到底わが志の行はるべからざる世なることを憤りて、みづから、身をおもひすてたるをいふにもあるべし。こゝの文意は、聞てえたるが如し。但、こゝハ、諸本異同あれど、今は、高尙が新釋に改めたるに依りぬ

しなのゝ國、あさまのだけけ、けふりのたつを見て

(語釋) 信濃の國、淺間の嶽に、煙のたつを見てなり。さて尾張三河の北は、信濃にとなりて、木曾の三坂のほとりは見ゆる事もあるを、京人は、淺間も、其のあたりに思ひて、こゝに書きたりともいふべけれど、なほ考ふるに、此の東降の條々は、各、ことなるを、類を以て、書きつらねたりと見ゆれば、必しも、前文につゝけずして、こゝは淺間の嶽の見ゆるほどの所にてよめりと見るべし

しなのなるあさまが、たけれたつ煙

をち方ひとの見やはどがめぬ

(語釋) しなのなるは、信濃にあるなり○をちかた人とは、遠方の道ゆく旅人なり。遠近を「をちこち」などいふも、こゝのをちと同じ。さてこゝの遠方人とは、みづからのうへをいふなり。をちかたといふゆゑは、高山のだけの煙は、遠くより見ゆるものにて、見どがむるは、其の見つけをむる時の事なればなり○見やはどがめぬとは、打ちかへして、強く聞こゆる詞なれば、とがめまいか、いたくどがむとなり

(大意) おもひもかけず。高山の峯より、煙のたてば、あれはいかにと、遠方人の見どがめまいモノカ、大に見どがむといふ意なり

もとより、友とする人ひとりふたりして、もろともにいきけり

(語釋) もとよりは、はじめよりの義なり。旅の友は、途中よりつれてゆくこともあれば、はじめよりとこどわれるなり○いきけりは、行きけりなり。其のほかは、聞てえたるが如し

(文意) 都よりのつれ一兩人にて、同行したりとなり

みち知れる人もなくて、まどひいきけり。

(語釋) 道の案内を知れる人もなければ、處々にて、道に迷ひながら、往ききとなり。高尙の説に「かくいへるよしは、信濃の國のあたりにゆきては、又、三河の國に至り、八ッ橋にて、かきつばたの

咲きたるに、富士の山を見るは、五月のつてもりなるは、都人のあづまのかたの道しらで、まどひありきたるゆゑなりと、ことわりけけるに「ありける」といへり。少し穿ち過ぎたる説なれども、おもしろくて捨てがたし。但、この説に従はゞ、この東降の條々は、各ことなるを書きつらねたるにはあらで、文脈相通せるものと見るべし。それも、あしからず見ん人よきを撰びてよ

みかはの國、やつはしといふところにていたりぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもでにながれわかれて、木やつわたせるによりてなん、やつはしとはいへる。

(語釋) やつ橋とは、大なる澤の水、左右にわかれて、數々の小川に流れたるを、田つくらん人の通はんために、木をはしにかけたるが、其のわたりに八ッありけるゆゑに、おのづから、所の名ともなりけるなるべし。〇くもでは、川の蜘蛛の手の如く、いく節にもわかれ流るゝをいふ。〇さて古今集には、「三河の國八ッ橋といふ所にいたりて」とのみなるを、こゝには、其の橋の八つある形をよく云ひしらせたるなり。文意は明らけし

その澤のほとりの木かげにおりおて、かれいひくひけり。

(語釋) こゝに澤とあるによりて、前の蜘蛛手に流るゝ小川は、澤より落ち来る水なる事しられたり。〇木かげにありおては、木影に下り居てなり。此の時、かきつばたの盛なれば、陰曆三月の末か、四月の上旬なるべく、さては、日影さすところは、やゝあつければ、涼しき陰によりて、馬より下り居たるなるべし。もしさらでも、水を飲み、かれいひを食ふに便宜なれば、木影により居たるなるべし。

し〇かれいひは、乾飯^{カレイヒ}なり。和名抄に、餉をカレイヒと訓めり。イを省きたるなり。餅飯^{モチイヒ}を、モチヒともいふに同じ例なり。カレイヒハ、今の糰^{オシロイ}なり。古代には、宿かす人なくて、旅人は、野にも山にも夜をあかししたりしなり。さる比には、飯をくはす人もなければ、乾飯を袋に入れて、携へありきしなり。さてかく旅人の不便なりしは、通用の貨幣なきがゆゑなり。その比は、米、或は布を以て、交易の媒介物としたりしなり。されば、是は奈良朝以前の風俗にて、其の以後は、錢を通貨と定めたれば、旅人も必しも食物を持ちありきゝとは見えず。續日本紀、和銅五年(元明天皇の朝)の條に、令行旅人必齎錢爲資因息重擔之勞、亦知用錢之便といふこと見たり。息重擔之勞とは、かれいふを持ちありく事の勞をやめて、錢もて飯を買ふやうの事なり。さて後は、やうく錢を用ふる事となりぬれば、平安の京になりては、かれいひを旅に持ちありくやうの事はなければ、昔より言ひ馴れたるまゝに、なほこゝも、乾飯とはいへるなり。されば、こゝは今の世の如く、辨當などに入れたる飯を食ひたるなるべし。但、下賤のものは、中世以後にも、干飯を食せるよし、榮花物語などに見えたれども、こゝは、いやしからぬ人のさまに書きたれば、なほ、まことのほしいひにはあらずと心得べきなり

うの澤に、かきつばたといふおもしろく咲きたり。うれを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめど、いひければ、よめる

から衣きつゝなれにじつましあれば

はるくきぬるたびをしづれもふ

(語釋) かきつばたは、燕子花なり。杜若の文字をも用ふるは、「ヤブメウガ」の誤用字なりといふ。燕子花は、はなあやめに似て、やゝ肥大なり。花色、紫なるを常とすれども、淺紅、白等の種々あり。夏の初をさかりとす。其の燕子花を見て、ある人がかきつばたといふ五文字を、句の上でとに置きて、旅中の心を詠めといひければ、よめりとなり。文意は明らかなり。○歌の一首の意は、都になれにし妻あれば、はるくきぬる旅を、かなしく思ふといふことなり。○から衣きつゝなれにしとは、萬葉に、奈良の里を、から衣きならの里といひかけし如く、なれにし妻あればといふに、から衣着つゝなれにしといひかけたるなり。「きつゝ」は、着つゝと、來つゝと掛けたり。「つま」は、妻と褌とかけたり。「きぬる」は、來ぬると着ぬると掛けたり。つまし旅をしのは、二つともに助辭なり。「なるゝ」「つま」「はる」などは、皆衣の縁語を以ていへるなり。五句のかしらごとによる字をおきて、かくなだらかによむは、まことに巧なりといふべし。

とよめりければ、みな人かれいひのうへに、涙おとして、ほどびにけり。

(語釋) かれいひは、前に委しくいへり。○ほどびは、太びの轉が。潤ひてふくるゝをいふ。史記に、膠液船解などあり。但、このかれいひは、眞の乾飯にはあらぬを、涙のかゝりて脹るゝといふは、いかゞとて、彼是とき曲けたる説もあれど、わるし。あまりに拘り過ぎたりといふべし。眞の猶ならずも、かれいひといふより、涙かゝりて、潤ひふくれたりとやうに書くは、文章なり。こ

れをあながち、事實にあはずなど説きなすは、物語書よまん眼なきなり

(文意) 誰も京の戀ひしきに、此の歌を聞きて、更に堪へやらず、うしろに、涙を催しきとなり。道しれる人もなくて、旅中のかなしさ、さもと想ひやゐる

ゆきく／＼するがの國にいたりぬ。うつ山にいたりて、わがいらんとする道は、いとく／＼ほそきに、つたかつらはまげりて、ものこゝろほそく、すゞろなるめを見ることとおもふに、

(語釋) ゆきく／＼ては、往き往きてなり。たゞ、ゆきを重ねたるのみにて、他意あるにあらず。○うつ山は、駿河の國、有渡郡に、和名抄に、内屋の里と見ゆたる處なり。○わがいらんとする道とは、我がわけいらんとする有渡の山の道をいふ。○いとく／＼は、最暗くの音便なり。○つたかつらは、蔦薔なり。樹または岩などに延ぶ蔓草なり。道の暗く細き上に、蔓草さへ延び茂れりとなり。○ものこゝろほそく、ものは添へたる詞なれど、たのづから意を強くするなり。「ものごなし」「ものさびし」などいふ皆同じ。○すゞろは、そゞろともいふ。漫の字、また、不覺の字、また、坐の字などを訓むこゝは、不覺の意にて、おもひかけぬからきめ見る意に解して足れり。高尙の新釋に、古意の説も、臆斷の説もわろしとて、すゞろなるめは「さはあるまじきめを見るといふ事なり」と解せり。さては、すゞろといふ語意、解せりとも覺ゆす。故に余はかへりて、古意の説によれり。おほかた、すゞろといふ語は、此に掲けたる如く、漫の字、不覺の字、または「故なく」などの義に解せば、誤なかるべし。

(文意) 木の茂りたるさま、道に蔓草などの茂れるは、人の往來のまれなるがゆゑなり。都にをりなば、かゝる心ばそきめをも見ざるべきに、道しらぬあづまの方に來たれるゆゑに、我が身に思ひかけぬ、心ばそきめを見ることよと、心のうちに都いでしをくやしうおもひつるなり、能く味ひて其の意をささるべし

すぎやうざあひたり。かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば、みし人なりけり。京にその人のもとにて、文かきてつく

(語釋) すぎやうざは、修行者なり。修はシュなるを、約めてスと云ひ、者はシヤなればサとなるなり。此の山中にて、修行者に遇ひたるなり。修行者とは、佛法修行のものなり。山伏などの類なり。さて修行者のことをいへるは、「夢にも人の」といふ歌をかゝんためなり。又修行者のかゝる道には、いかでかといひ、詞つきの謹しみ、かしてまりたるさまなるを思ふに、此の行く人は、身分の輕からぬ人にて、都にあるべく、所さだめありきなど、すさまじき人なることを知るべし。さては、すゞろなるめを見ることと思ひしも、道理なり。又、かゝる山路にて、修行者にあひたりといひて、いよく、深山なることを知らせたり。文いと巧にて、一種の畫幅を見る心地せらる〇見れば、みし人なりは、道ゆく人が、修行者を見れば、かねて見しれる人なりきとなり〇ろの人とは、切に思ふ人をさせるなり〇つくは、今いふことづくるなり。旅中の辛酸なる事を、いたく心に感じ、都を戀ひしく思ひ出でたる折なるに、都にて知れる修行者に遇ひたれば、一層おかく戀ひしくて、文かきて事づてたりとなり。文意はおのづから明らかなるべし

するがなるうつ山のうつゝにも

夢にも人のあはぬなりけり

(語釋) するがなるは、駿河にあるなり。ニアをつめてナとなるなり〇うつ山のハ、今、越ゆる山をたゞちに序にけれなるなり〇一首の意は、かゝる道なれば、したひ來まで、うつゝにあひたまはぬは、ことわりなれど、それがしを思ひ給はゞ、遙かなる道にても、心はかよふものなれば、夢には遇ひ給ふべき事なるに、更に此方を思ひ給はぬゆゑに、夢にも君のあはぬなりけり。つれなしと恨みをいひやりたるなり。すべて、人を夢に見れば、其の人の思ふ心の通ひ來て、見ゆるよしに昔よりいふ事なり。古今集、戀の歌に、「夢にだにあふことかたくなりゆくは、我やいをねぬ人やはする」とあるを見るべし。人が念るれば、心の通ひてぬゆゑに、此方の夢に見えざるよしなり。されば、「人のあはぬなりけり」と。此方のどかにして、恨みをいひやるなり。さて此の歌は、古今六帖に「音にきくうつ山のうつゝにも、夢にも見ぬに人の戀ひしき」とある歌を、一二の句は、まうけて、たゞ序にいひたるを、此の文には、うつ山の山路の有様を、詞に書きて、さて其の所にてよめる歌としたれば、上は今越ゆる山のありさまをいひて、即、序として、下の意をいひくだせる體とはなりぬ。この解は新釋によれり

ふじの山を見れば、さつきのつむもりに、雪、いとしろふふれり

(語釋) ふじの山は、駿河の富士山なり〇さつきのつむもりは、五月の下旬の意なり。つこもりは、月隱にて、必しも晦のことならぬよしは、前にいへり〇此の處、新釋の辨、まことによし。其の

大要には、さて歌には「かのこまだらに」とよめるに、はしの詞には、雪いとしろしといへるを、昔より人の不審に思ふ事なり。今、これを説き明らめん。むかしは、歌にこまかによめるをば、はしの詞には、れほらかにかけり。三代集の歌の詞書など、皆、さやうなり。こゝも歌に、「かのこまだらに」と、こまかにいへるゆゑに、はしの詞に、しろふとれほらかにいへり。歌を合はせ見てしろふとはあれど、くはしくは、かのこまだらなりと知られて、おもしろきなり。又、いといふ詞は、五月のつこもりにといふ詞にかけて、甚しくいへるなり。「つこもり」には、「つこもりなるに」の意なり。たとへば、俗語に、寒中にマツバタカにてといふが如し。此の「寒中」にも「寒中なるに」といふ意にて、寒中にはだかはめづらしければ、寒中といふ語にかけて、裸を眞はだかど、眞を加へて甚しくいふこと同じことなり。さて又三河にて、かきつばたの花盛りとあれば、三月の下旬に、四月の中旬までなるべきに、五月の下旬に、富士の山本なるは、道しれる人もなくて、まどひありき、こゝかしこに、住み所を求めて、とゞこほりたるがゆゑなるべし云々と、なほ日員のあまりにかかりたることは、古意に、委しく辨あり

時しらぬ山はふじのねいつとてか

かのこまだらに雪のふるらん

(語釋) 時しらぬは、冬は雪ふり、夏は降らぬが、當然のことなるに、其の時をしらぬといふ義なり。五月の下旬に、なほ、雪あれば、かくいふなり○ふじのねは、富士の峯の意なり○かのこまだらは、もと、鹿の子の毛の斑なるをいふ。それよりうつりては、すべて、むらく白きをいふことゝなる

れるなり。さてマダラといふ語は、曼陀羅にて、梵語なり。雑色の義なりといふ。されば、其のまとは、梵語なれど、ふるくより國語のやうに用ひ來たれるなり。かゝる例、古來おほし。例へば、テラ(寺)はもと朝鮮語なれど、おほかたは、固有の國語と思ふべし、これらも同じ例なり○一首の意は、時しらぬ山といふは、富士の峰のことよ。此の五月下旬を、何時とおもひてか、かやうに、雪のふるならんといふこゝろなり

其の山は、こゝれたとへば、ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして、なりは、しほじりのやうになんありける。

(語釋) こゝにたとへばとは、都にたとへばの意なり。「其の山は」と書き出でせるは、記者の詞にて、其の記者は、京人なり○はたちはかりは、二十ばかりなり○ほとして、今言に「グラキニテ」なを譯すべし。高きしてなといふ意味なり。かさねあげは、高さをいふ詞なればなり。古意には、比叡山に似て、大なるよしに説かれたれど、いかゞ。さらば、はたちばかり、あはせたらんほどしてなとあるべきなり○なりは、形の義なり○しほじりは、諸説あれど、天野信景(尾張人)が鹽尻といふ書に、「歌人しほじりを秘とす。我海濱に遊びて、鹽竈を見しに、海民鹽をやくに、鹽邊に砂をあつめて、堆をなし、畦をなす、潮水來たりて、砂畦をひたす、所によりては、潮を汲みて、ひたすなり。日々にかくして、後に砂を積み、山の様を作りて、日にさらす、是をしほじりといへり。實に富士の形に似たり。歌客京に居て、海邊のことにくどく、時さうて、知れる人なくなれるなり、云々としるせり。本居宣長翁、この説を評して、此にいへるやう、少し違へるにやとおぼしけれど、しほじりと

いふ物は、これなり。おのれも、鹽やく漬を所々見しに、砂を積みあげて、塚の如くしたる物、いへつともなくありて、まことに、富士の山をたといふべき形したるものなり。古意には、眞字本に、「なりは」を鳴者とかけるを取りて、彼の山の鳴澤の鳴る音として、しほじりを、難波の川尻のことなりと云はれたれど、いとく信じがたし。川尻なくば、川じりとこそいふべけれ。いかでか、しほじりとはいはん。されば、川尻をしかいへる例もなく、こはりもたかへることなり。其の上、川尻は、さしもれどろくしく、鳴る物にはあらざるをや云々といはれたり。又、橘守部は、昔、京の河原院にて、潮を汲ましめ給ひし事は、いとも名高かりつれば、當時、京の人、しほじりの形をあまねく見しりつらん。故に比叡の山と、六條河原の河原院のしほじりとをとり合はせて、こゝにいはゞとはかけるなりけり。古今集雜に、河原の左大臣の君の、身まかりて後、彼の家にどまりてありたるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるを見てよめり。貫之「君まさでけふりたえにししほがまの、浦さびしくも見えわたるか那」とあり。さて顯昭の説に、池を掘り、水をたへて、潮を毎日三十石づゝくみて、海漁の魚具等をすましめたり。陸奥の鹽竈の浦をうつして、海人のしほやく屋に、烟をたゝせて、もてあそばれたるなりとあり。猶、この事、菅家文章、本朝文粹、源順、河原院賦などにも委しく見えたり云々といへり。以上の諸説によらば、しほじりといふもの形も明らかに、また此の條の文意も、おのづから、明らかなるべし

猶、ゆきくゝて、むざしの國と、しもつふとの國との中に、いと大なる河あり。うれをすみだ川といふ。

(語釋)

むざしの國は、武藏の國なり。しもつふとは、下總シモツツなりの大なる川と書けること。尤、お

もしろし。其の故は、此の川を渡りては、いよく、京は遠くなるべしと思へる意を含めたるなり。

京の人のかゝる東國に来て、なほ、此の川をわたりて、知らぬ方へゆかんとする心、おもひやるべし

○すみだ川のあり處につきて、又、諸説あり。まづ、古意にすみだ川は、已に古今集にしかあれば、

武藏と下總との間なりとのみ、我も人もおもへり。然るに、更科の日記に、下つふとの國と、むざし

の境にて、おとぬ川といふ、かみみの瀬まつぎとの津にとまりて、(中略)野山芦荻をわくるより外

なくて、むざしと相摸の中に居て、あすた川といふ。在五中將のいざこととはんとよみけるわたり

なり。中將の集には、角田川とあり。舟にてはたりぬれば、相摸の國になりぬ云々といへり。これ

によりて思ふに、もとは、相摸の國と、武藏とのあはひなる、あすた川を云ひつらんを、後人、古今集

の詞書によりて、むざしと、下總のあはひとは、改めつるにや。此の文にむざしとしもつふとの云

々とあらんには、いかで、更科日記にしか書かん。此の歴る所々のついでに依るにも、むざしには

年歴たるやうに書けるにも、日記の如くならんと覺ゆといへり。右の古意の説を、齋藤彦麻呂が片

席に駁して、此の川の名、他國の名所を江戸へ附會したるなりといふは、大なる僻説なり。萬葉集

にある角田川は、紀伊の國なり。六帖にあるすみだ川は、出羽の國なり。古今集と、伊勢物語なる

は、武藏の國と、下總の國との界なり。すみだ川に限らず、國々に同じ地名あまたあれば、とかく

ふべきにあらず。更科日記に、さだかならぬ記しふりなるは、委しく知らずして、書きたるゆゑな

り。さてこの武藏と、下總との堺なる川を、隅田川とも、須田川ともいふは、もとすみだなるを、音

便にて、スندگانといひ、又、零きて、スダといへるにて、同じ所なり。たとへば、やむことなきを、音便にて、やんことなきと云ひ、又、零きて、やんことなきといふなどと同じ意なり云々といへり。彦磨呂の説よろし

その河のほとりにもれぬて思ひやれば、かぎりなくとほくもきにけるかなど、わびあへるに、

(語釋) 河のほとりにむれぬて云々、長途のならひ、友だちもあそびにはなれて、往くものなれど、川のほとりなどにては、わたし船に同じく乗らんとて、まちはあはせて、一むれになるを、むれぬてとはいひしなるべし。むれぬては、群居^{ぐんこ}の義なり。能く心をつけてかける文なり○思ひやるとは、都のかたをなり。道をゆくほどは、まぎれて忘るれど、しばし休みては、つくづく故郷のとおもひ出づるなり○わびあへるとは、かぎりなく遠く來て、もの心ぼそく、故郷の戀ひしくてもせんかたなき事など、いろ／＼の悲しきすぢをいひあへるよしなり。さてかく人々口々に、かなし、つらしなどわびさといふ間に、時うつりて、わたし守がまちかねたるさまなり。極めてたまかなるところにまで、意を用ゐて、かける文なることよく味ふべし

わたし守はや船にのれ、日もくれなんといふに、のりてわたらん

(語釋) わたし守とは、渡を守る人をいふ。それよりうつりて、船頭をいふ。こゝは其のうつりたる方なり。さて船頭が、此の人々に向ひて、いへるなれば、「船にのり給へ日もくれ侍りなん」などいひしなるべし。それを、こゝは、記者みづから道ゆく人の如くに記したれば船頭の語をかへ

て、書きたるなり。上なる修行者の詞は、いひたるまゝに、かしてまゐるさまにかきて、此の都人は、貴人なることを知せ、こゝなるは、船頭の詞を、貴人みづから書くよしになして、記したり。自他自在にして、語明らかなるは、筆の妙といふべし

みな人もわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、しろき鳥の、はしどあしどかき、鴨のおほきさなる、水のうへにあそびつゝ、いをくふ。

(語釋) 新釋に、いはく、渡邊重豊いふ。「京におもふ人なきにしもあらず」とかけるこゝろは、此の段のはしめにいへる如く、「身をやうなきものに思ひなして、都にはをらじ、すむべき所もどめん」とて、ゆきける身なれば、京にほだしなどはなきさまに見ゆれど、京にねる人なきにしもあらずといふ意なりといへり。實にさやうなるべし。此の重豊といふ人は、みちの口の酒折の宮のみや人にて、はやうより、いにしへ書をひとり能くよみけるを、近き年比は高尚に従ひて、もの學ぶ人になり云々」と、此の説まことによし○はしどあしどは、嘴と足となり○鴨は、夏秋、田または澤などに居る鳥なり。形、水鶏に似て小さく、背長く、頭より翼まで、茶色なり。背は灰黒にして、小き白斑あり。胸と腹としろし。これ鴨の通常なれど、色も形も多少かはれるもあり○いをくふは、魚を食ふなり。ウチは、古くイナともいひき。此の物語は、いつても、いをどのみかけり。當時のこ

とばを、そのまゝに、記せるにやあらん

やことりといふをきゝて、

(語釋) これなんといふ詞に、目をつくべし。わたし守が、たゞに都鳥とは答へずして、これなんといへるは、都の人々なれば、都鳥は知りておはせんものを、御存知なきにやといふ意、おのづから含まりたるなり。さて都鳥の事は、説きありて、一定せず。今、その大要を擧げんに、拾穂抄(北村季吟)古意(加茂真淵)臆斷(僧契沖)などには、皆、都鳥を鷗と定めたり。又、武藏志料にも、都鳥は、古、さまぐの説あれども、白鷗なること疑なし。京都の人は、海に遠くして、正しく此の鳥をば見ずして、只、物にあると、人傳にのみ聞けば、それかといふ人あれども、此の白鷗、まことに足と嘴とは赤くして、體は白く、いつくしき鳥なれば、鄙のさかひにめづらしければ何人か都鳥とは名つけしなるべし云々とあり。高田與清の説に、都鳥の説あまたあれど、鷗といふが、千古不易の確論なるべし。ろは鷗にも種類おほくて、形もやゝ別あり。小野蘭山が、本草啓蒙(四十三)に、鷗を筑前にては子コドリ、筑後にては子コサキ、上總にてはウミ子コ、武藏の本牧にてはハマ子コとよぶ由いへり。これ鳴く聲の猫に似たるがゆゑなり。源氏、若菜の下に「猫ねうく」といとうらたげになければ」とあり。今、打ち聞くには、「にやうく」となくが如し。鷗もミヤく」となく聲の、子ウく」ともニヤウく」とも通ひて聞えて、猫の聲にいと近ければ、某猫といふ名をもよびしなり。さて都鳥のミヤは、聲によりておほせ、コドリはヨブコトリミサゴトリなどの小鳥に同じく、大鳥に對へし稱なり云々とあり。又鷗にあらずといふ説は、藤井高尚の新釋に、今は都鳥といへば、鷗の事と定まりたる如くなれど、今も國によりて、都鳥といふは、鷗とは異なる鳥をいふよし、都鳥考

序に、佐渡にて、土人の都鳥といふは、鷗にあらゆよし、鴨齋のいへる。又、衣川長秋(宣長翁人)といふ人は、出雲の大社にまうせし道の記、田養の日記といふに、日野川にて、さつをの射とりたりとて、都鳥をもて歸れり。古今集に、白き鳥の嘴と足とあかき、河のほとりにあろびけり」とあり。今見るに、白き鳥とあれども、かしらと、羽のうへとは黒くて、羽の裏、背腹眞白なり。白きといはれしは、漕子の舟にたどるきなどして、飛びしとき、羽の裏、背腹の白きを見て、いはれしなるべし。嘴は紅、足は濃紫の色なり。(中略)皆と足とつけながら、故郷の人に示さんとして、皮をはがせておきつ。味も小鴨の如しといへり。是等によりて思へば、都鳥は、一むきに鷗とも定めがたし云々とあり。これらはいづれとも定めがたき事なれば、見ん人、よきを撰ぶべし

名にしおはゞいざこととはん都どり

わがおもふ人はありやなしやと

(語釋) 名にしおは、其の物を名にれひてあるをいふ。名高き意に用ふるは、俗なり。此の鳥の名に負ひたる如くならば、都の事をも知りなん。いざや、我がおぼつかなく思ふ消息を問はんとの意なり○いざこととはんは、いざものいはんにて、俗語にいざものまをさうなといひかくるに同じ此の詞は、高尚の説に、わかれもふ人はありやなしやといふなれば、尋ね問ふ意は、したにあれども、詞のれもてに問はんといへるにはあらず。さるを近代の人は、皆問ふ事と心得て、歌によめるも、あまた聞てえ、師(宣長翁)古今集遠鏡にも、ドレヤモノトハウと譯されたれど、それはあやまりなり。古の歌文には、問ふをこととふといへる事は、ひとつもあることなし。ようせすば、問ふことに

思ひあやゆりぬべし云々といへり。此の説よろし○ありやなしやは、いきて世にありや、なしやの意なり。かぎりもなく遠きあづまの國に下りて、何事も心ぼうく、なにつけても、故郷をおもひ出づるをりなるに、都鳥といふ名なれば、殊に都のことを思ひれてして、我がおもふ人の、安否を尋ね問ひたしとの意なり。人情さもあるべし

(大意) 都といふを名に負ひたる鳥ならば、定めて、都の事を知るならん。いざものいはんといひかけて、さてそのものいふは、我が思ふ人は、無事なるか、否かといふことなりと、末にことわりたる歌なり。都鳥は、必しも、都の事を知れりとはあらねど、かくはかなくいふは、例の古歌のつねにて、未だ人情にも近く覺ゆるなり

とよめりければ、船こづりて、なきにけり。

(語釋) こづりては、皆なり。擧の字をよむ。そこにある船中の人、皆、ことごとくの義なり。其の他は、語釋も、文意も明らかなるべし

(九段)むかし男、むごしの國までまどひありきけり。さて其の國にある女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人にと心つたりける。父はなほ人にて、はゝなん藤原なりける。さてなんある人にとおもひける。

(語釋) むごしは、武藏なり○よばひは、よびを延べたる言にて、を呼ぶ義なり。それなり

りて、男が女の許に通ふ意に用ひたること、前に委しくいへり○こと人とは、異人にて、此の都人ならぬ他人をいふ○あはせんは、メアヒセンなり。嫁せしめんと意なり○あてなる人とは、上品なる人の意なり。あては、上品、また、貴人などいふ言の古言なり○心つたりけるとは、此の都人へ心をつけて、娘を此の人に嫁せしめんと思ひきとなり○なほ人とは、なみくの人にて、種姓たふとからぬをいふ○藤原なりける、當時藤原氏の專權なる世なりしかは、極めて貴姓なるよしにいへるなり。されば、母は都の人の上品なるにとおもふよしなり○さてなんは、うれでなんの意にて、そのゆゑに、うれがためになどの義なり○あてなる人とは、此の都人をさせるなり

(文意) 例の男、處々さまよひて、つひに武藏の國まで行きぬ。其の國にて久しく滞在せしかば、ある女の許へ通ひぬ。しかるに、其の女の父の意中には、住所も定めず、まどひありく人なるを厭ひて、田舎人はかへりて、田舎人こそ婿にもよけれとて、合はせざりけり。されど、その母は、上品なるを好む性質にて、其の土地の田舎人よりは、此の都人にと心をつけたりき。其のゆゑは、父は氏姓たふとからぬ人なれど、母はよしある藤原の氏人なりしかば、これのつから、其の意もかはりて、かくありしなるべしとなり

此のむてがねによみて、おこせたりける。すむどころなん、いるまの郡、みよし
の、里なりける。

(語釋) むてがねとは、かねて婿に取らんと思ふ人をいふ。坊がね、后がねなどいふも、是に同じ。拾穗抄、臆斷などに、かねは埴の器量なりといへるは、いとつたなし○れてせは、送り來たすなり。

其の女の母が詠みて、此の都人の處へ送りこせるなり○すむ所なん云々、前には、たゞ、武藏の國とのみあげたるを、歌にみよし野のといはんために、かくことわりたるなり○いるまは、人間の郡なり。萬葉には、イリマとあれど、和名抄には、イルマとよめり

みよしの、田のもの雁もひたぶるに

君がかたにぞよるとなくなる

(語釋) 田のものは、田^タ面^モにて、田の上をいふ○ひたぶるは、ひたすらといふも同じく、一向になり。

其の方にのみ向くをいふ○下の句は、君が方にぞよるといふことゝ、に、鳴くなるといふ義なり

(大意) 一首のこゝろは、田の面の雁も、一向に君が方に心をよせて鳴くが、我もそれと同じ意なりといへるなり。則、かりを借りて、我が心と、娘の心とのよれるをあらさせるなり。ものてにをはは。母がみづからの事をこめたるなり

むこがねかへし

(語釋) むこがねは、則、都人なり○かへしは、返歌なり

わがかたによると鳴くなるみよしの、

田の面のかりをいつかわすれん

(語釋) いつかわすれん、わするゝことはあらじといふ義なり。母が娘を雁になづらへて、いひよこしたるゆゑ、かへしにも、娘を雁に見なして、ゆく末かけて、わすれぬよしをいひやりたるなり。此の歌は、おほかた、前の歌にて、語釋は明らかなり

(大意) 一首のこゝろは、我が方によるといふことゝ、に鳴くは、田の面の雁なれば、われもかたへ思ひかはして、何時までも忘れじとなり

となん、ひとの國にてもかゝることば、たにすぞありける

(語釋) ひとの國とは、他人の國の意にて、都よりほかの他國をいふ○かゝることとは、女へ歌を贈答せるなどの、好色がましきことをいふ○たえずありけるとは、京にて、放縱なりしが、辛苦してあづまの國にさまひたれど、なほ、好色の事は、やまざりきとなり

(文意) 都にてはさらなり。他國へさまよふ間にも、かく女に歌を贈るやうの好色めきたることば、絶えずありきとなり。下の條々に、其の絶えざりしを明らかなり

。(十段)むかし男あづまへ行きけるに、友だちに、道よりいひをこせける。
わするなよほどは雲おになりぬとも

空ゆく月のめぐりあふまで

(語釋) わするよは、忘るゝこと勿れの意なり○ほどとは、道のほどにて、里程をいふ○雲おになりぬともとは、遠くなりぬとも意なり。其のゆゑは、遠く隔ちたる處を見れば、雲は下に居る如く見ゆるものなればなり。其の空ゆく雲の下に居る如く見ゆるまでに、遠くへだつとも義なり○空ゆく月の云々は、月は大空をめぐりては、又同じ所へめぐり出づるものなれば、空ゆく月の如く、同じ都にめぐりあふまでといふ意なり。此の歌は、一首の意も、おのづから、明らけし。さて拾遺集に、橘の直幹が、人の娘にしひて、物いひ侍りける比、とほき所にまかり侍るとて、此の女の

もとに、いひつかはしけるとありて、此の歌は、直幹の歌なるを、こゝには、はしがきをかへて、一段とはしたるなり。これ例の作者の、あらぬさまに書きひがめんとせる一端といふべし

(十一段)むかし男ありけり、人のむすめをぬすみて、むざし野へおてゆくほどに、ぬす人なりければ、國の守にからめられにけり。

(語釋) むざしのは、武藏野なり○おてゆくは、率て往くにて、つれてゆくなり○國のかみとは、國守をいふ。國守は、其の國、萬般の事を掌り、非違をも檢察すべきものなれば、人衆を出だして、追ひてからめたるなり。こゝは、まづ、男のうへを一わたりいひをはりて、更に其のくはしきさまをかける文法なり。既に前にもこの例あり。今人もはじめて、某處に遊び、ぬなどいひて、更に後に、その遊びたるさまをかくことあり。同じ文法なり

(文意) 例の男、他人の娘を盗み出で、里遠く人なきところをしのびはしらんとて、武藏野へつれゆきしが、國守にもれて、つひにからめられきとなり

女をば、草むらの中にかくしおきて、にげにけり。

(語釋) これは、女の上をいはんために、たちかへりて、男のいまだからめられぬはじめよりいふなり。さてにげたれど、はやくからめられけりとは、上文にて、れのづから、明らかなり

みちくる人、この野は、ぬす人なりとて、火つけんとすれば、女わびて、

(語釋) 道くる人は、道のある處を追ひくる人なり、○あなりは、あるなりの意○此の處の解、新釋の說よろし。其の大意にいはいはく、ぬす人なりといふは、こゝに於て、ぬす人の處を、

らめられたるは知らずして、此の野にかくれてありと思ひてその詞なり。さるを、古意に、心得かねて、大様をいへるものなりといはれしは、違へり。そも、國の守の、人衆あまた出だして、ぬす人を追ふには、手わけといふこととして、此方、彼方の道をおひゆくべければ、この草むらの中に女をかくしおきて、逃げたる男の、彼方の道にて、からめられたるなり。さるからに、此の道を追ひくる人は、からめられたる事を知らず、尋ねてもぬすびとの見えねば、草むらの中にかくれてぞあらん、草をやきなば、あらはれつべし。出でなば、からめんとて、火をつけんとするなり云々と○女わびてとは、かくれしのびはてんとれもひつれども、火をつけて、草をやかれては、かくれておられねば、せんかたつきてといふ意なり。さて歌をうたへるなり。わびとは、思ひ煩ふことなるよし、前に委しくいへり、前に引ける新釋の說にて、文意も、明瞭なるべし

むざし野はけふはなやきうわか草の

つまもこもれりわれもこもれり

(語釋) なやきうは、^{ナヤキウ}莫燒にて、燒くこと勿れの意なり○わか草は、つまの枕詞なり○つまもこもれり云々は、夫も我も草むらの中にかくれこもりをれば、今日は燒くこと勿れとあつらへいふ言なり。さて男は遁げたれど、女の心にては、男も此の近邊に隠れをらんと思ひてなり。さてつまは、今、男より女をのみいふ言となれど、古は、夫婦、互に通はしいひたること、更に論なし。又、此の歌のはじめ、五文字は、春日野はとありて、古今集にては、野邊の歌なるを、むざし野とかへたるは、例の記者の巧なるなり。この一首の意も、おのづらか明らけし

とよむを聞きて、女をばとりて、

(語釋) とよむを聞きては、右のむざし野の歌を女の詠せるを、追手の人が聞きてなり。古は歌をよみては、聲あげて謠ひしものゆゑに、人の聞くなり○とりては、捕へてなり

どもにゐていにけり

(語釋) 此の處、語を省きて、簡潔にかきなせり。「男は見えず、哥よむを聞きて、女をば捕へたる所へ、他所にて、男をからめたる人も來あひて、さてこゝより、男女共につれていにき」といふこゝろなり。能く文意を味ひて、此の意をささるべし

(十二段)むかし、むざしなる男、京なる女のもとに、きてゆればはづかし。きてえねばくるしとかきて、

(語釋) 女のもとに云々は、男より、京なる女のもとへ遣はしたる文の中の、主なる詞をとり出で、いふか書けるなり○聞てゆればはづかしとは、あづまにて、又、女を得たる事をほのめかして、いひまぎらはしたる詞なり○聞てえねばくるしとは、京の女とは、はじめより打ちつけて、かたらひける中なれば、はづかしとて、秘しおかんは、心のへたてあるやうにて、くるしといふ意なり。此の文段、まことに、おもしろきかきさまなり

うはがきに、むざしあぶみとかきて、おこせてのち、おとせすなりにたれば、みやこより女

(語釋) うはがき、^{ヤハガキ}上書なり。封表になり○むざしあぶみとは、武藏よりと書くべきを、をなれをのみかけてれもふといふ心をこめて、むざし鎧と、おもしろくかけるなり。武藏鎧とは、昔、この國より出だせる鎧、名物なりしなるべし。此の國には、むかし、高麗人を多くおかれしなれば、さるものらが作り初めたる高麗やうの鎧をば、後までも出だせるか、一つの名稱となりしなるべし○おもせすなりにければとは、京と田舎との文のかよひ、昔は今の世のやうにたやすからねば、おもひながら、久しく音信することを得ざりしなるべし

むざしあぶみさすがにかけたたのむには

とはぬもつらしとふもうるよし

(語釋) さすがは、シカシナガラの意なること、前に委しくいへり○かけてたのむとは、鎧は馬の左右の腹にかくるものゆゑに、かけてたのむといはん料の冠詞なり。さすがにといふ詞を、中に隔てたるは、一つの格にて、例おほし○うるよしは、厭ふ意なり。今言もほゞ同じ

(大意) 一首のこゝろは、都とあづまを隔たりて、久しくわかれ居り、又、他の女と契り給ふやうすなれど、以前またなく睦みあひしことを思へば、さすがに掛けて頼みにするには、絶えて音信したまはぬもつらし。又、とひ給ふにつけては、他の女にかよひ給ふよしを聞けば、その事のいとはれもするよといふ意なり。彼の男より、聞てゆればはづかし、きてえねばくるしといひやりつる心をうけて、恨みもはてず頼みもやらぬさまの答なり

とあるを見てなん、たへがたきこゝちしける。

(語釋) 男、京の女よりの文の中に、此の歌のあるを見て、さぞ女の心ぼろくおもふらんと、思ひやられて、悲しさの堪へがたき心持すとなり
とへばいふとはねばうらむむごしあふみ

かゝるをりにや人はしぬらん

(語釋) といへばいふは、問へばうるさしといふなり○とはねばうらむは、つしと恨むなり○むさしあふみ、こゝは、何も意あるにあらず○かゝるをりにやは、カヤウナル時にや、人は死ぬならんとなり

(大意) とひて隔なく、心をうちあくれば、うるさしといひ、又、とはねば、つらしと恨む、ほかにいかんともせんすへなし。人の死ぬるといふは、かゝる時にやあらんといふ意なり

十三段)むかし、男、みちの國にすゞろにゆきいたりにけり。そとなる女、京の人はめづらかにやをほにけん。せちにれもへる心なんありける。さてかの女、

(語釋) みちの國は、陸奥の國にて、ふるくは、ミチノオクノクニといひしを、此の頃は、省きてかくもいひきと見ゆ○すゞろに云くは、何故ともなく、覺えず往き到りけりとなり。すゞろの語釋は前に委しくいへり○そとなる女は、陸奥の女なり○せちには、切になり。心に深くなり。此の外は、語釋も、文意も聞てえたるか如し

なか／＼にこひにしなずは桑子にぞ

なるべかりける玉のをばかり

(語釋) なか／＼は、例の却りての意なり○しなずは、死なんよりはの意なり○桑子は、蠶をいふ。蠶は、雌雄まゆの中にこもるものなれば、それを羨みて、いへるなり○玉の緒ばかり、玉の緒は、魂の緒の義なり。緒とは、絶ゆるに寄せたる言なるべし。さて玉のをばかりとやうにいふ時は、暫しの間なといはんが如し。玉のをは、命をいふ言なるに、玉のをの短きといふが常なれば、それより轉りて、暫時といふ意にも用ひたるものなるべし。さてかひては、命みじかくても、雌雄ちぎり深く、一つまゆの中にこもるものなれば、羨みたるなり。此の歌は、萬葉集に「なか／＼に人とあらずば桑子にぞ、ならましものを玉のをばかり」とあるを、少しかへて、例の作者の構へたるなり

(大意) 一首の意は、れほかた聞てゐたるが如く、なまじひに、戀に死なんよりは、イツソさひにかなるべかりける。たとひ、命はしばしの間より生きざるものにもせよと、深く男に逢ひがたきを歎きたるなり

歌さへぞ、ひなびたりける。

(語釋) 人からは、もとより、歌までが、ひなびたりとなり。さへの詞に心つくべし○ひなびは、鄙の風をなすをいふ。田舎めくなどいはんが如し

さすがにあればやおもひけん、いきてねにけり。夜ふかく出でにければ、女、

(語釋) さすがは、前にいへるが如く、シカシナガラ意にて、歌までが田舎マイデは居るけれども、シカシナガラなり○あはれとやれもけん云々は、男の心を、作者がいふなり○いきてねにけ

りは、女の許に往きて、相率ゐて寝たりとなり

夜もあけばきつにはめなんくだかけの

まだきに鳴きてせなをやりつる

(語釋) きつといふに諸説あり。一説には、狐キツなるべしといふ。狐をキツとのみいへるは、萬葉にも見たり。子は、むじなのナと同じく添へたる言ならんといふ。さて狐は、雞を好むものにて、田舎などにては、狐に雞をとらるゝと常おほければ、かくよめるなりといひ、又、一説には、出羽の秋田のあたりにては、木もてつくれる、大なる箱を、家々にすゑおきて、水を蓄ふる器とせり。其の器の名を、きつといふ。其の土地の老人のものがたりに、此のきつ、昔は、おしなべて、家ごとにありしものなりといへり。近き比は、大かた、瓶を用ふることとなりて、きつをすゑおく家は、少く、其の名を知るものも多からず。これ古き東語にて、こゝは、きつといふ器の水中へ、うちはめんといへるなるべし。今も雞の霄鳴するを惡みて、しかさせじとするには、雞の腹を水にひたし冷せば、其の事やむといふ云々。この兩説のよしあしは、後にいふべし○はめ、前のきつの解釋によりて、此の語も解を異にせざるを得ず。もし、狐の説によらば、はめは食くにて、食くしめんの義なり。又、きつは水器といふ程によらば、はめなんは、水に没る事なり。今も水中へ物を没るゝを、はめ、はむるなといふこれなり○くだかけは、腐クダ雞なるべし。くだは、惡みていふ詞、かけは、庭鳥の古名なり。庭鳥は、カケロと鳴くより、古くはカケといひき。霄なきして、男をかへしたるがゆゑに、腐雞と惡みていへるなり。時鳥を醜シ時鳥シなといふと同に義なり○まだきは、日本紀に、豫の字を訓めぬ。何に

まれ、其の時よりさきにするをいふのせなは、夫なり。女より男をいふ詞なり。東國にては、今も若き男をせなといふがつねなり○やりつるは、かへしやりつるの意なり

(大意) きつを狐の事に見れば、一首の意は、夜もあけば、狐にはましめなん、わろき雞の、いつも鳴く時よりは、はやく鳴きて、夫をかへしやりつる事よとの意なり。又、きつを、水器とする方ならば、夜あけなば、水器に打ち没ムなん、腐雞よ、汝が霄鳴せしゆゑに、曉あけとれもひて、夫をかへしやりつるがくやしき悲しとなり。されば此の後、霄鳴きせらんやうに、水器に没ムなんとの義なり。この兩説、いづれにてもよろしけれど、若し秋田あたりの方言に、水槽をきつといふ事、信ならば、其の説れもしろし。いかにいふに、此の歌の初句、夜も明けばとあるには、水槽の方、打ち合ひて聞こゆ。さるは、狐は夜をのみ専として、「夜ヨのどの」などの方言もあるに、夜の明けたらば、狐に食ませんといふはいかゞなるいひざまなり。よくよく夜もあけばといふ、初句を味ひて、その意をささるべし。又、ある人は、きつは、木槽キツの中略せるにはあらぬかといへり。これも、一つの参考とすべし、もしきつといふ方言ありとせば木槽の説も或は然らんと

といへるに、男みやこへなんいぬるとて、

(語釋) といへると書けるは、といひて、女は、おかく思ひ入れたるにといふ義なり。さるに、男は心とまらねば、ふりすて、京へ往くとしてなり。此の外は、文意、明らけし

くり原のあねはの松の人ならば

都のつとにいざといはまじを

(語釋) くり原のあねはは、陸奥の國、栗原郡、栗原の郷なる、姉波といふ地名なり○つとは、萬葉に、夢の字を訓せり。山づと、濱づと、旅づとなどいふ如く、其の所につけたる物を、何にても包みて持ち來たる故の名なるを、轉りては、單に土産といふ意に用ふ。こゝも然り○いざは、人を誘ふをいふ。今もイザイザなど、人をさうふ時にいふは、此の詞なり。こゝは、いざ／＼とさうひて、都へつれゆかんものをの意なり

(大意) 陸奥の國、栗原の郷なる姉波といふ所に、名高き松あり。此の松が、もし、人ならば、都人に見せたきものなれば、都への土産にいざといひて、誘ひゆかましを、人ならぬゆゑに、それもできずといふが、歌のおもてにて、したには、此の女の、人らしくは、都へつれゆかんものを、あまりに、田舎ものなれば、うれも得せぬとの意を含めたるなり

といへりければ、よころこびて思ひけり、／＼とぞ、いひをりける

(語釋) いへりければ、上のあねはの松の歌を、男のいへりければなり○よころこびては、女がなり○思ひけり、思ひけりとは、此の男、我を思ひけり。思ひけりといひぐさにいひ居りきとなり。歌のしたの意を知らずして、たゞ、表面のこゝろにのみ思ひなして、我を誘ひて、都へつれゆかん心構なりと女の喜びしさまなり

(文意) かく歌の深意をも汲み得ずして、得意に、よころこびぬる田舎の女のさまを、こゝにあらはせるは、次段の用意ある女のさまを、いざ／＼とおもしろく見せんがためなり

(十四段) むかし、みちの國にて、なでふこをなき人の、むすめにかよひけるは、

(語釋) なでふこをなき人とは、今言に、ナンデモナキ人といはんが如し。兩親も、由緒ある人にもあらぬに、其の娘のここの外に、すぐれたるをいはんためなり

あやしうさやうにて、あるべき女にはあらず見えければ、

(語釋) あやしうは、奇しくの音便なり。上の段の女とは、甚、異にて、これは用意ある女なれば、由緒もなき女としては、あやしく思はるとなり○さやうにては、其のヤウニテの意なり。即、由緒もなき女のやうには見ねばなり。さて其の女の心のおくの、知りがたければ、こゝろみんとて、歌をよみてをくれるよしなり

志のふ山志のびてかよふ道もがな

人のこゝろのおくも見るべく

(語釋) しのふ山は、和名抄に、陸奥の國、信夫とある處の山なり。今は、岩代の國、信夫に屬せり。こゝは、名所を、しのびの序におきたるのみなり○しのびてかよふとは、女の許に通ふなれば、人目をかくれて通ふをいふ○道もがなは、道もあれかしと願ふ意なり○人の心は、女のこゝろをいふ。この歌は、道おくかよふなど、山の縁語を以てしたてたるなり

大意 一首のこゝろは、人の心に忍びて通ふ道もあれかし。さらば、わけ入りて、おくを見るべくといへるなり。深き用意ある人は、心の奥の知りがたきものなればなり。さてこの歌の深意は、つひに我によらんのした心ありや、なしや。其の心の奥を知りたしとなり。女かぎりなくめでたしとおもへど、さるさがなきにびす所にて、いかゞはせん。

(語釋) めでは、愛の字の意味なり。今はめでたしといへば、單に祝ふべき義にいへど、古くは、廣くほめたる意に用ひたり。こゝは、今言に、結構など譯すべきか○さるは、然るの意にて、前の「なでふことなき人のむすめ」とあるを承けたるなり○さがなきは、古く、不善、また、不祥、または、不良などの文字を訓せり。こゝは、よからぬ田舎やせなどいふほどの事に心得べし○えびすは、蝦夷にて、昔は、陸奥、出羽などはすべてえびすといへり○いかゞはせんは、都のよき人の蝦夷所に住みつくべきにあらず。さる所に生ひたちし身の、ともに都にのぼらんは、耻づかしくて、せんかたなく思ふよしなり。すべて、この女は、用意ふかきさまなり

(文意) 此の女は、彼の京人をいそめたしと思ひぬ。されば、心の奥をもあらはさんとは覺ゆれど、猶、わがあづまえびすの、田舎びたる心をあらはしては、いかゞはせん。いはでやみなんものとなり。京人をやさしくまされりとして、いよく、用意せるさまなり。上の段の愚かなる女は、用意もなく、ひなびたる歌をも、多くよみて、笑へることをも悦べるに、此の段には、かくよしある女をいひて、歌の答をもわざとつゝしみてせざるさまに書きなしたり。二條を對にしたる文のさま、妙といふべし、これこの書の得色なる所なり

(十五段)むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代の帝につかうまつりて、時にあひけれど、のちは、世かはり、時うつりにければ、

(語釋) 紀の有常、三代實錄に、元慶元年正月廿三日、從四位下周防權守紀有常卒。左京人、正四位名虎之子也。性清警有儀、皇少年(十九歲)奉侍仁明天皇、承和、中權拜左兵衛大尉云々、貞觀九年、

爲下野權守、秩滿爲信濃守、十五年授正五位下、十七年爲雅樂頭、十八年至從四位下、爲周防權守、卒時年六十三とあり○三代の帝とは、仁明、文德、清和の三天皇をいふ。有常は、十九歳ばかりより、仁明天皇に仕へ奉り、さて妹の腹に、文德の一の皇子、惟喬親王うまれ給へば、時にあひけるなるべし。然るを、文德位につかせ給ひて、其の年の冬、染殿の後の御腹に、惟仁(清和天皇)親王生れ給ひて、やがて太子に立ち給ひしかば、其の後は、有常はさせる榮も聞こえずして、清和天皇の貞觀十五年になりて、官位昇れり。仍りておもふに、右の貞觀の中間より前、嘉祥の末の間、時にあはぬやうにてありしを、いとく衰へたるやうに、こゝに記せるは、例の物語なればなるべし○時にあひては、三代の中に、はじめの御代をさせるなり。一説に、三代の間は、全く時にあひて、其の後に時を失なひしならんといへるは、國史を参照せぬ誤なり。又「つかうまつりて」と句を切りて、時にあひけれど、のちは云々をつづけて讀むべし。然らざれば、三代時にあひたるやうに聞きまがふ愛あるべし○世かはり云々は、長恨歌傳の時移事去、樂盡悲來とある文によりて、かけるなるべし

よのつねの人のこどもあらず。

(語釋) よのつねは、尋常の意なり○ことは、如しの義なれば、世のつねの人よりも、おそろへたりとの意なり

人がらは、心うつくしう、あてはかなることをこのみで、こと人にも似ず。よのわたらひ心もなく、まづしくても、なほ、むかしよかりし時のこゝろながらに、世

の常のこと知らず。

(語釋) 人からは、人品をいふ○心うつくしうは、心のきたなからぬをいふ。前に引ける三代實錄に此の人をほめて、清警にして儀望ありといふを、うつしひろめたる文なり○あてはかなることば、上品めきたることをいふ○こゝ人にも似ず、他の貧しき人にも似ずなり。他人は、貧しくなれば、權門に媚びて、昇進せん事を望むはつねなるを、有常は、まづしけれども、しかせぬとなり。これやがて、清警の性質なるがゆゑなり○よのはたらひ心なしとは、世を渡るために、物を得んと望む心もなしとなり○むかしよかりし時の云々、はじめ時を得て榮えたりし事は、前にいへるが如し○こゝろがらとは、心のまゝにといふに同じ○世のつねことも知らずは、朝夕のつばらぬ家事をも知らずとなり、すべて、貧しきにつけては、種々に心をめぐらして、妻子をも養はんとするが、世人のつねなるを、さるわざをも知らず。昔の時にあひし世どかはらぬとなり

(文意) 有常の清貧に安んずるさまを、こゝにあげたるは、つぎにかゝる人につきそひ居りては、ゆく末おぼつかなしとて、妻の出家せん事をあらはさんがためなり

とし比あひなれたるめ、やうくこゝはなれて、つひに、尾になりて、あねのさきだちて、尾になりけるがもとへゆく。

(語釋) とし比あひなれたるめとは、年來、親しみたる妻の義なり○やうくは、次第次第になり○こゝとはなれば、床離にて、夫婦、寢所を異にする意なり、そとより轉りて、すべて夫婦の間の、うとくなる事をいふ。次第次第に、疎遠にならて、終に尾にならざるなり

の事もありつらんを、省きたる文體なり○あねのさきだちて云々、此の妻の姉は、前に尾になりたるがありしかば、其の許へゆきぬとなり。

(文意) 有常は、清貧に安んじて、意どせざる人がらなるを、妻は之に反して、かれこれ貧をいとおさまの性質なれば、其の心合ひがたく、又、親しむことも六かしく、つひに尾になりぬるよしなり。されば、此の妻、心からすゝみて出家せるにはあらで、年老いたる身なれば、別人に嫁することもおかたく、姉の尾になりてあるをたよりに、かしらおろして、ろこへゆききとなり

男、まこと、むつまじき事ころなかりけれ。今はどていくを、いとあはれとはおもひけれど、貧しければ、ずるはさもなかりけり。

(語釋) 今はどては、今はかぎりとしてなり○いくは、往くなり○するわざ云々、妻と別かるゝに、ものれくるは、昔は定まれるわざと見えたり。されば、それをするわざといへり。贈るべきものもといはずして、「するわざ」といへるに心をつくべし

(文意) 女のかたより心へだつれば、實にむつまじからねど、今はかぎりとして、出でゆくには、相馴れし年月の事ども、おもひ出でられて、いとあはれとは覺ゆれど、貧しき身なれば、世の普通に、妻に與ふるわざだに、心にまかせずとなり

思ひわびて、ねんぢろにあひかたらひける友だちのものとに、かうく、今はどてまかるを、何事もいささかなる事もえせで、つかはすこととかきて、おくに

(語釋) 思ひわびてとは、何に思ひても、せん方なくてといふ意なり○ねんぢろは、ねむぢろの音

便にて、懇切の意なり○あひかたらひは、相語らひにて、互に心の中を知り合へる友をいふ○かうくは、今言にカヤウくなどいふに同じ。さて「かうく」より「つかはす事」といふまでは、友だちのもとへ行く、書面の詞なり。新釋に、此の文のはじめには、尾になりたるゆゑとも書きてあるべきを、其の詞をかきつらねては、さきにいへると同じやうの事、かさなりて、うるさければ、記者の心して、はぶきて。かうくといふ詞にかへたるなり。されば、かうくは、文の詞なれども、もとよりのにはあらず。まかるをとは、出で、ゆくを、かしてまうていふ文詞なり云々といへり。此の説、まことに、よろし○つかはすは、妻を姉のもとへつかはすなり。さて此の友だちは、彼のむかしの手を折りてへにける年をかづふれば

十といひつゝよつはへにけり

(語釋) 手を折りては、指を折りてなり○へにける年は、經過せる年なり○十といひつゝ云々は、四十年を経たりとなり。これを十四年の意に解せるは誤なり

(文意) 指を折りて、夫妻の中の經たる年を數ふれば、四十年になれりとなり。さてかく年經し事なれば、今はとて、出で行くに、いさゝかなる物をも與へぬが、まことに、本意なきを、あはれとおぼせといふ意を、言外に含めたるなり

この友だち、これを見て、いとあはれとおもひて、よるのものまで、おくりてよめる

(語釋) いとあはれと思ひては、友だちが、この歌を見て、まことに、不憫とおもひてなり○よるのものは、被^{フキ}にて、今の夜具などをいふ。さてよるのものまでといひて、晝の衣服は、不足なく贈りたる事を知らせたるなり

(文意) 此の友だちは、なさけ深き人なるさまにかけたるなり
年だにも十とて四つは經にけるを

いくたび君をたのみきぬらん

(語釋) 十とては、十といひての畧言なり○たのみきぬらんは、頼みにしきぬらんの意なり。四年の間には、幾度か君をたのみにしきぬらんとなり

(大意) 一首のころは、年だにも、十といひて四つは經にけるを、まして、其の間の月日は、かぎりもなく多きことなり。其の長日月の間には、種々の出來事もありて、細君が、いくたびか、君を頼みにしてきぬらんとなり。それを思へば、君が今わかるゝに臨みて、物おくりたきよしおぼす道理に、あはれと思はるれば、此の物ども、いさゝかながら、進上すとの意を、言外に含めたるなり
かくいひやりたりければ、よろこびにそへて

(語釋) たちかへり贈物のよろこびいひやるに、歌をやることなり

(文意) 友だちが、かく贈物にうへて、歌をやりければ、有常が、そのよろこびの禮に、又うたをやることの意なり

これやこのあまの羽衣うべしこそ

君がみけしにたてまつりけれ

(語釋) これやのやは、疑の辭。このは彼のにて、古言なり。これや彼の聞き傳ふる、天の羽衣ならんとなり。○あまの羽衣は、神の服、また、天人の服などといふ。こゝは、るれに擬へて、ほめていへるなり。○うべしこそは、諸こそにて、しは例の助辭なり。ウベハ、肯意にいふ語にて、實にしかあるべしなどいふほどの詞なり。○みけしは、御衣の意にて、古言なり。又ミツともいふ。○たてまつりければ、衣服なども、むかしは、貴人には、下より調じて、奉りしものなれば、かくいへるなり。さて昔は男女の常に着る衣は、かよはしても着たりしがゆゑに、今友だちの衣を、有常の妻にもおくれるなり。殊に、にはかの事ゆゑ、我が料にしたてたる衣を、とりあへず、おくりたるさまなり。

(大意) 一首の意は、これや彼のきゝ傳へてのみありて、我等が、いまだ、見たることもなき、天の羽衣ならん。うつくしさいはんかたなく、此の世の物とも見えず。かくよき衣なれば、世にすぐれ給へる、君が御衣に奉りしは、まことに然ることなるべし。それをわれらにたまふは、甚過分なりと、いたく、先方をほめて、喜の情を述べたるなり

よろこびにたへかねて、また

語釋) 聞こえたるが如し

秋やくる露やまがふとおもふまで

あるは涙のふるにずありける

(語釋)

秋や露やのやは、共に例の疑の辭なり。秋はものかなしきものなれば、其秋の來て、露やま

がふと思ふほどに、喜の涙が多くにたつる事よとなり。○まがふは、分けがたく、混ずることをいふ。されば、こゝは涙があまり多くにたつて、露かとおもふままでの意なり。さて一二の句は、秋の來てつゆかどまがふとの意なり

(大意) 一首の意は、心をかなしふる秋の來て、袖をしぼるか、露のおきまがふかと思ふばかり、我が袖のぬるゝは、よろこびに堪へずして、おつる涙にてありけりとなり

○(十六段)むかし、年ころおとづれざりける人の、さくらのさかりに、見に來たりければ、あるじ

(語釋) 新釋に、年ころは、月ころの書きあやまりなるべし。年比にては、歌に年にまれなるといへるにかなはずといへり。此の説よし。○おとづれざりけるは、音信せずありけるなり。此の外は、語釋も、文意も聞こえたるが如し

あだなりと名にこそたてれ櫻花

年にまれなる人もまちけり

(語釋) あだとは、かりうめなる事、また、移り易きことをいふ詞なり。○年にまれなる人とは、一年のうちに、稀れに來る人の意なり。○此の歌は古今集、春の上に「櫻の花さかりに、久しくとはざりける人の來たりける時に、よみける。讀み人しらす」とあり。るれを、こゝには、例の一つの物語に作れるなり

(大意) 一首の意は、櫻の花は、あだなる移りやすきものと、何人もいへど、あだにはあらずして、

一年の中に、まれに來る人をもまちて、散らでありといへるなり。さて今は、かく稀れに來る人こそ櫻の花よりも、かへりてあだなれど、怨みたるころを裏にもたせたるなりかへし

けふこそはあすは雪とぞふりなまし

消えずはありとも花と見えしや

(語釋) けふこそは、今日來すばなり○ふりなましは、あるならん意なり○消えずはありともは、雪の如く散れる花が、たとひ消えずのころにありともなり○花と見えしやは、花と見えはせじのころなり○さてこの歌は、古今集に、業平朝臣の歌とあり○さて互にまけじとあらそふは、贈答のうたのつねなり

(大意) 一首の意は、今日來たればこそ、花とは見れ。明日は、雪と降るべし。其の雪消えずはありとも、花と見えしや。花と見えはせじとなり。さてそれがしを、花よりもあだなりといはるれども、そなたこそ、今日こそは、明日は心かはるべければ、うの人とも見れしといふころを、例の裏に含めたる歌なり

(十七段) 昔、なま心ある女ありたり。男ちかうありけり。女うたよむ人なりければ、ころみんとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもとへやる

(語釋) なま心あるとは、心ある人のやうにて、そのはぬをいふ。今の世に、ナマイキなといふナマこれなり○ちかうは、近くの言便なり○うつろへるは、移るをいふなり。菊の花のうつろへるをいふ○此の段は、貫之集に、ちかうなりなる所に、方たがへにある女の、わたれるを聞きて、あるほかに、事にあれて、見きくに、歌よむべき人なりと聞きて、これがよむまは、いかゞころみんとおもへども、いとも心にしあらねば、深くも思はず、すゝみていのはぬほかに、彼もころみんと思ひければ、萩の葉のふみちたるにつけて、歌をよみてなん、わかせたる「秋はぎのした葉につけて目にちかく、よそなる人の心をみし」貫之「世のなかの人に心をめしかば、草葉に色も見えしとぞおもふ」とありて、此のつぎに、十首まで贈答のうたあり。これを思ひて作れる物語なるべしと、古意にいへり。げにしかるべし

くれなゐに匂ふはいづら白雪の

枝もどを、にふるかとも見ゆ

(語釋) にほふは、色のうつくしく見ゆるをいふ、香をいふにはあらず。月のにほひ、水のにほひなどいふ皆同じ○いづらは、いづくぞといふ意なり○とを、は、轉じてたわゝともいふ。撓むばかりの義なり○うつろへる白きくは、あかき色のまじるものなれば、ろれによそへて、これもおこゝろをいへる歌なり

(大意) 一首のころは、白菊の花もうつろひては、紅ににほふといふ事なるが、それはいづくぞ、たゞ、白雪の枝もたわむほかにあるかと思えて、紅のにほへる色は見えぬとあり。さて色このむ心と聞くに、其の色ある心は、いづくぞ、さるけしき見えずといふころを、裏にふくめたるなり。かくいひやるは、かへしに、いかゞいふとて、其の心を見んとてのしわざなり

男、しらずよみに、よみける

(語釋) しらずよみとは、まことに、知らぬにはあらず、女の下の情をわざと知らぬかほに、かへし
せるをいふ

くれなねにほふがうへの白雪は

をりける人の袖かどう見る

(語釋) うへは、うのうへの意なり○をりける人とは、白菊を折りける人なり○此の歌は、おくれ
る歌の意を知らずよみに詠めるなれば、さらに返歌のやうにはなきなり

(大意) 一首のころは、うつろへる白菊にて、紅にほへる色のあるがうへに、白雪もふりたる
やうなれば、折りける君が衣のかさねの袖口かどう見るぞなり

(十八段)むかし男、みやづかへしたる女のかたに、ごだちなりける人を、あひし
りて、ほどもなく、かれにけり。おなじ所なれば、女のめには、見ゆるものから男
は、あるものにもおもひたらねば、女

(語釋) むかし男云々、これ貴人の北の方附の宮仕を、男のしたるなり。それゆゑに同じ所なれば
とはいへり○ごだちは、御達などの文字をあてゝ、もとは、貴女をいふことなれど、うつりては、貴
女に仕ふる女房をいふ事となれり。こゝも然り。又上田秋成の説に、ある人、御達の説は、わるし。
古本に、兒達と書けるは、コナチと讀むべき證なりといへるはよるし。古意には、男女をこナチと書

ある事、その一二をあげん、男子には、いざ子とて、はやく日本へつゝならの都をねるはた、お子とて女を
いふは、「阿倍の市路にあひし子らはも」このをかに榮つます子など、猶おほし。さて國史には、赤
猪子、大葉子、又皇女の御名のみならず、仕ふる女房達にも、杉子、俊子などいふ多し。ひとり、伊勢
は、亭子院(宇多天皇)の皇子を生み給へば、大和物語に、伊勢の御やすむ所とも書けるにつきて、伊
勢の御と稱すること、人、皆おもへど、これも、出羽の子、若狹の子等の例にて、はじめ帝のめされ
ざりしよりの名ならんには、伊勢の子とよびしなるべし。かゝれば、すべて童名といふものにて、今
なほ昔にかはらぬ事を承る。貴女を稱して御といふは、うしろ見はかゞしき御宮づかへの人の上
にてこそあらめ、云々とあり。これも一説とすべし○ほどもなくは、幾程もなく、暫時の意なり○か
れにけりは、女にあふことのなくなるをいふ○ものからは、ものながらの義なり○男はあるものに
も云々は、男の方にては、一向惚れたるが如く、氣にぞめざりきとなり。思ひたらねばは、思ひてあ
らねばなり○さて此の一段は、古今集に「なりひらの朝臣、紀の有常がむすめに住みけるを、うらむ
る事ありて、しばしの間、晝は來て、夕さは歸りのみしければ、よみてつかはしたるとあるを例の
かきひがめて、一條の物語としたるものなるべし

天雲のよそにも人のなりゆくか

とすがにめには見ゆるものから

(語釋) 天雲は、遠く他所に見ゆるものなれば、よろこば言の枕詞なるを、下までたとへにいひ
つゝけたるなり○とすがは、例のシカシナガラ義なり○ものからは、ものながらの義なること、

前の歌に解せるが如し

(大意) 一首のこゝろは、天雲のやうによろ外にも、人のなりゆくことかな、さらば、かくれて見えぬやうにもなるべきを、さすがに、目には見ゆるものながらの意なり。されば、眼には、ちかく見る人の、心うとくなりたるをいへるなり

とよめりければ、男、かへし

ゆきかへりそらにのみしてふることは

わが居る山の風はやみなり

(語釋)

ふるは、經るなり○風とは、他の男をいふたとへ言なり○はやみは、はやさにの意なり。下の句の裏のこゝろは、我がものなる女のもとなれば、立ち寄らんとおもへど、えよらぬは、又、他に

かよふ人のあまたあるゆゑなりといふ意なり○古今集には、この歌は、業平朝臣とあり

(大意) 女の歌に、男を雲にたとへたれば、すなはち、雲になりて、行きかへり、空にのみしてあり

ふる事は、我が居るべき山の風のはげしきゆゑなりといふ意なり

(語釋)

此の女は、他にも多くの男ありし女なりきとなり。こゝは、記者のことばなり

(十九段) 男、やまとにある女を見て、よばひてあひにけり。さてほろて、宮づか

へする人なりければ、かへり來る道に、やまの風は、かへり來る道に、やまの風は、かへり來る道に、

おもしろきを折りて、女のもとに、みちよりいひやる

(語釋)

やまととは、奈良の京あたりをさしていふなり。此の物語は、平安朝のはじめのほどにあ

りつる事をかけるよしなれば、其の心ばへにて、見るべし。平安朝のはじめの人は、久しく佳み馴れし、奈良の都には、親族、または、朋友なともありて、かしてへは、をりくに行きかよふ事たえざりしなるべし。されば、かゝる事もありけるなり○よばひは、女の許に通ふをいふ。委しくは、前にいへり○やよひばかりとは、三月比といふに同じ○かへては、和名抄に、雞冠木、和名、加倍天乃木とあるこれなり。葉のかたち、蛙の手に似たるゆゑの名にて、かへるての畧言なり○もみち、こゝは、芽の紅なるをいふ○いとおもしきとは、かへての木は、いろくありて、芽の色も厚薄、種々あれば、其のうちにすぐれたるをいふなり

(文意)

平安の都なる男、奈良の邊の女に通ひけり、さて月日經たりしが、男は仕官の身なれば、いつまでもかくてあるべきにあらずとて、女に別かれて、歸る道に、三月比なりしかば、かへての芽が紅に出で、誠に見事なりき。かゝるものを見るにつけても、女の事を思ひ出でられければ、折りて女の許へ、道よりおくとて、歌をうへたりとなり

君がためたをれる枝は春ながら

かくこそ秋のもみぢしにけれ

(語釋)

たをれるは、手折れるなり○かくこゝろは、かやうにこゝろなり○此の歌の意は、新釋に、君にわが心ざしの深きにかなひて、春ながらも秋の如く、色おかく染めたりといふ意なるべし。舊註と

もに、秋といふ言になづみて、女の心のうつろふ事に、心得たるは、いかゞ、さては、かへりの歌め
づらしげなし。又、女の心を疑ふべきよしも、上の詞に見えずといへり。此の説、まことによし

とてやりたりければ、返事は、京につきてなん、もてきたりける

(語釋) 返事は、京につきてもてきたるは、やまとを遠く離れてやりたる使なるよしをしらせたる
文なり。されば、京ちかき所のかへてのもみちゆゑに、大やうに、君が里にはといへるなり。此の外
の詞は、聞てえたるが如し

いつのまにうつろふ色のつきぬらん

君が里には春なかるらし

(語釋) 新釋に、此の歌は、心ざしのおかきを、かへての若葉の色ときによろへて、いひおこせたる
を、聞きしらぬ顔して、かくこそそのたまひおこせたるは、御心のうつろひかはれるよしにやあら
ん。こゝもとにては、さやうの心とは見えざりき。いつのまに、うつろふ色のつきぬらん、あやし
ま。君が里には、春といふことなく、秋なるゆゑにこそといへるなりと、あるにて、語釋も、大意も、
おほかた、聞てゆべし

(二十段)むかし、男、女いとかしく思ひかはして、こと心なかりけり、さるを、い
かゞありけん。いさ、かなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出で、いなん
とおもひ、かゝる歌をなんよみて、ものにかきつけける

りとなり。いかゞありけんは、如何なるゆゑかありけんの義なり。さてこれは、記者の疑へるよし
の詞なり。すべて、男女の中らひのあしくなるは、他心あるより起るがづねなればなり。○世の中
とは、とりもなほさず、男女の中をいふ。うしは、憂の義なり。○ものに書きつけるとは、出で、行き
しあとにて、夫の見よかしとて、壁、または、障子などに、歌をかきけるなり。さるは、恨をのこした
る歌なればなりかし

いでていなば心かろしといひやせん

世のありさまを人はしらずて

(語釋) いで、いなばは、出で、行かばにて、今、夫の家を出で、行かばなり。○心かろしといひや
せんは、他人が、我を輕卒なりといふかもしれずとなり。○世のありさまとは、夫婦の中のありさま
の義なり

(大意) 夫婦の中の有様の、堪へ難き事のあるをば、他人は知らずして、出で、行くを、輕卒なりと
おほかたいおべし。まことに、くちをしきかきりなり。これみな、夫の我にしむけ給へるわざよと、
怨をのこせるなり

とよみ置きて、出で、いにけり。此の男、かくかきおきたるを見て、けしう心おか
るべき事もおぼえぬを、なに、よりにてならん

(語釋) けしうは、怪しうといふに同じ。○心おかるべき事は、今言にもかくいふ。氣ヅマリ、又、心
配なる事ありとも、男は心づかぬに、女はひが心より、はらだちて出で、いにきとなり。さて男の心

づかぬに、女の出で、行きしなれば、上の「いさ」かなる事につけて「といふ文も、ますく能く聞こゆるなり。かゝる處は、ことに、此の物語文に注意すべし

いどいたううちなきて、いづかたにもどめゆかんと、門に出で、とみかう見、みけれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへりいりて

(語釋) 留守の中に、女の出で、行きしがゆゑに、男はいかゞはせんとまどへるよしなり○とみかうみは、とかうみめぐらすなり。左右、東西を見廻らすことにて、至極當惑のさまなり○いづこをはかりとも云々は、何處ならんとも、測り知られぬ意なり。今言に、心當がないなどいふに同じ。されば、尋ぬるによしなくて、行く事をやめて、家に入りたるよしなり

おもふかひなき世なりけりとし月を

あだにちぎりて我やすまひし

(語釋) あだは、眞實^{まこと}やかなる事の反對にて、うつりやすきをいふ○我やすまひしは、われやはすみしの義なり。我のやは、例の意の反對になる辭なり

(大意) 一首のころは、あまたの年月を、あだに契りて、我やすまし。いとまめやかに、ちぎりとこそありつるに、かく出で、いぬるは、おもふかひもなき、夫婦の中なりけりとなり

といひて、ながめをり

(語釋) ながめは、今は、たゞ、眺望の意にのみ用ふれども、古くは、ものおもふさまなり。こゝは、一首の歌をよみて、いまだ荒外ならぬかゆゑ、ながめをりといふ。こゝ

り。さて又よみ出でたるよしなり

人はいざおもひやすらん玉かつら

おもかげにのみいで、見えつゝ

(語釋) 人はいざ云々、人は女を指せり○玉かつらは、玉蔓にて、女のかしらにかくるものなれば、こゝは女の上のひの事にいへり○見えつゝは、隠られぬといふころを、つゝといふ語にいひのこしたるなり

(大意) 一首のころは、女は此方を思ひやすらん、いざ知らず。我は、女のようにひの傍にのみ出で、見えつゝ、隠られずとなり

此の女、いとひさしくありて、ねんじわびてにやありけん、いひおこせける

(語釋) ねんじわびては、今言に、こゝへ兼ねてなどいふに同じ。女、はじめ腹たちたる時には、少しの事に家出せるが、心、をさまりては、やうやう、悔ゆる心ものこりて、夫のよびかへせかしと、心まちにまてとも云々といふ義に心得べし

今はとてわするゝ草の種をだに

人のこゝろにまかせずもがな

(語釋) わするゝ草は、隠るゝといふ事を、隠草にしたてゝ、おもしろくいへるなり○だには、今言に、なりともといふ義なり○がなは、例の願の詞なり

(大意) 一首のころは、かくわかれては、もとの如く、共に住む事はならずとも、せめて、君の隠

れたまはぬやうになりとも、したきものよとなり

かへし

わすれ草うゝとだにきくものならば

おもひけりとはちりもしまし

(語釋) この解は、新釋の説よろし。解釋に、いはく、一首の意、そなたには、うれがしが心に、陰れ草の種をまかせずもがなといはるれど、それはたがへり。わすれ草をうゝるは、あしき事ならず。それがしは、あはれずとも、せめてうなたの心に、わすれ草を植うといふことなりとも聞かまほし。さやうに聞くものならば、そなたにも、うれがしをおもひけりと、しりもしなましといふ意なり。しかいふゆゑは、萱草念憂(文選養生論の語)といふ事のありて、それを心にうゝるは、古歌に、我が下ひもにつけたれどといひけんやうに、思を念れんとするわざなればなり。かやうに見れば、だにといふてにをはもとき得られ、又、聞くものならばといふは、聞かまほしく思ひてといふ詞なるにも、能く叶へり。ざるを、古註ともに、説きひがめたるにならひて、古意、臆断にも、我がわすれ草をうゝと、うなたに聞かば、れもひけりとしれといふ意にとけるは、自他のたがひにて、いみじきひが言なり。しれといふ意を、知りもしなましといふべきかは云々

又々ありしよりけに、いひかはして男、

(語釋) けには、すみてよむべし。まゝうての意なり。こゝは、女はあやまりありしゆゑに、男の心をとり、男もあやまる事なり。けに、女はあやまりありしゆゑに、男の心をとり、男もあやまる事なり。

心をとりがゆゑに、ありしに勝りて、直にうはを續ひて、いひかはすよしなり。思ひかはすを、あはすして、いひかはすといへるに心すべし。さていまだ、女の男の家にかへらざるさまなり

わするらんとおもふ心のうたがひに

ありしよりけにものづかなしき

(語釋) ありしよりけには、別かれてありし時よりも、まゝうての意なり

(大意) 一首のこゝろは、いさゝかなる事につけても、出で、いにし人なれば、又やわするならんと思ふ心のうたがひに、行末たのみがたければ、わかれてありし時よりも、まゝうてものかなしく思ふとなり

かへし

中をらにたちねる雲のあともなく

身のはかなくもなりぬべきかな

(語釋) 中空とは、いづれの山にもかゝる所なく、たゞよふ雲をいふ○たちねるは、たちつゝつしてたゞよふさまをいふ○身のはかなくなるとは、死ぬることをいふ

(大意) 一首の意は、夫の疑ひていへるを承けて、此方には、君をのみ頼みと思ふに、さやうに疑ひて、隔て給ひては、君が家にもかへられず、中空にたゞよふ雲の、嶺かゝる處なく、あどなく消ゆるやうに、我もよりかゝる方なくて、命消えぬべしとなり

とはいひけれど、おのが世になりにければ、うどくなりけり

(語釋) とはいひけれどは、かく夫に疑はるゝは悲しきよしにはいひけれとなり○おのが世とは、夫の家に歸りて、もとの如く、妻となり、一家の事を、わがおもふまゝに取り行ふをいふ。さて別れてある時は、夫を戀ひしく思ひしかど、もとの如く、夫婦となりては、又、急に腹たつくせのいで、中の疎くなれるよしなり

(廿一段)むかしはかなくてたえにける中、なほやわすれざりけん。女のもとより
(語釋) はかなくてたえけるとは、何といふ^{キツ}碇としたるゆゑはなけれど、互に恨の積りて、中の絶えたるをいふ。一説に、はかくしくあふ事もなくたえたるなりといふはいかゞ。はかなくは、たしかならず、また、きとせぬなどいふ意なり

うきながら人をばえしもわすれねば

かつ恨みつゝなほぞこひしき

(語釋) うきながらは、憂^{ウキ}ながらなり○人をばえしもわすれねばは、人は男をさすしもは例の助辭にて、念るゝ事を得ざればの義なり○かつは、ものゝ二つに渉る所にいふ詞なり、こゝは、恨めしきと、戀ひしきとの、ふたつにわたれり

(大意) 一首のこゝろは、つれなくて中たえ給ふは、うき事ながら、君の事を、此方には念るゝことを得ねば、恨みつゝ、やはり戀ひしくもありとなり

どいへりければ、さればよとおもひて男

(語釋) 何といふゆゑなく、互にうらみの重りて、絶えたる中なれば、男も女も、ふつからの罪を思

はず、人のどがに思ひなして、女はうきながらといふ歌よみかけ、男は女のかたよりをけり戀ひしといひおこせたるを、さればよ、女のひがこゝろえなれば、まけて従ひたるなりと思ふ意なり

あひは見で心ひとつをかばしまの

水のながれてたえじどおおもふ

(語釋) あひは見では、逢ひ見る事はせずとなり○さればよと思ひて、しばしこりさせんの心にて、かへしにかゝる歌をばよみて、やりたるなり

(大意) 一首の意は、はじめの如く、逢ひ見ては、又よしなき事に恨みられて、中たゆる事もあらん、されば、今度は、逢ひ見ることはせずて、互に思ふ心ばかりをして、ありなん、しかせば、恨みらるゝ事なくて、たとへば、中島ある河水の如く、一たびはわかれしかども、かく心のひとつにあひていひかはすこと、行末ながく絶えじと思ふ、うらみられしにこりたれば、逢ひ見る事は、いなといひやりたるなり

とばいひけれど、その夜、いきてねにけり。いにしへ、ゆくさきの事どもなどいひて

(語釋) こりさせんとて、逢ひ見る事はせずといひやりたれど、固より深く恨むる事のある中にもあらねば、其の夜ゆきて、ねにけるなり。はじめに「はかなくて絶えにける中」とあるを思ひ合はすべきなり

秋の夜の千夜をひとよになすらへて

八千夜しねばやあく時のあらん

(語釋) なずらへては、かりになしてといふ意なり。まことに、八千夜を一夜になさるゝものにはあらざればなり。○しは例の助辭なり。○ねばやのやはかに代へて、あらんの下に置きて心得べし。やのてにをはの一格なり

(大意) 秋の夜は長きものなれど、その秋の長夜の千夜を、假りに一夜になして、八千夜ねば、あく時のあらんかといふ意なり。つまり、長き夜も、相率ゐてゐる時は足れりとせずとの義なりかへし

秋の夜の千夜をひとよになせりとも

詞のこりて鳥やなきなん

(語釋) 千夜をひとよになせりともは、前の千夜を一夜になずらへてあるを承けたるなり。○此の歌は、語釋も、大意も、聞こえるが如し

いにしへよりもあはれにてなんかよひける

(語釋) 一度絶えたる中なれども、女のこりて、昔よりも殊に男によくつとめたるがゆゑなるべし。このあはれは、男の女をめづる意なり

(廿二段)むかし、おなかわたらひまける人の子ども、

(語釋) おなかは、田舎にて、都に遠ざかりたる處をいふ。○わたらは、古く活の字を訓める義にて、生活の事なり。田舎に往來して、産業を營ひてゐる。○子どもは、男、女、をいふ。○

さてこゝに、親のおなかわたらひする事をかけるは、女のおやなくなりてといふ所にかけ、ゆゑあることなり。此の物語は、すべて、かゝる處に注意して見るべし

井のもとにいで、あそびけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはして、ありけれど、男は此の女をこゝろえめとおもひ、女も此の男をこそとおもひつゝ、おやのあはすることも聞かでなんありける

(語釋) 井のもとに云々、男も女もをさなければ、もろ共に、井のもとにいで、遊びけりとなり。さて井の本は、古書に據るに、多く樹木を植るがつねなりしかば、遊ぶにたよりよかりしなり。○あそびけるを、今言にがといふてゐるなり。○はぢかはしては、男も女も、互に耻ぢ合ひてなり。幼年の時、親しく遊びたれど、さすがに、成長しては、互に遊ぶことを耻ぢらひて、見ぬやうになりければ、といふ意なり。○男は、此の女を云々は、久しく相見ねども、おさなき時に遊び馴れて、思ひかはしたる心のかはらぬをいふ。○親の合はすることは、女の親は、他の男に合はせんといふなり。さて親とは、母おやをいふなるべし。かゝる事は、母のとりはかるものなればなり

さてこのとなりの男のもとより、かくなん

(語釋) 隣の男の許より、左の歌を女へ贈れりとなり

つゝ、おつゝ井筒にかけしまるがたけ

おひにけらしなあひ見ざるまに

(語釋) つゝ、おつゝ井筒には、筒井筒にて、筒井は、筒の如くに、丸く掘りたる井をいふ。板にて四

方をかまへたるを、板井などいふと同じく、一種の井の形なり。さてつゝゐつゝ井筒とは、ことさらに、同じ言を繰りかへしたる者にて、『月夜よし夜よし』「わするなよなよ」などいふに同じ。古歌の一格なり。實はつゝゐつゝ、つゝゐつゝとかへしていふべきを、後のたびは、つゝといふ詞を省きて、五七の調に合はしたるなり。昔は謠方より、かく調のためにかへしたる例おほし〇かけしは、かけ橋などのかけにて、此方より、彼方へわたすをいふ語なり。こゝは、互に童の時、井筒に丈をくらべたる事をいふ〇まろは、意義つまびらかならざれど、これのれといふ義に、古來用ひ來たれるは、更に論なし〇たけは、身の丈なり〇れひにけらしな云々は、成長して、たけも高くなりけらしな、久しく相見ざるまにといふ意なり。けらしと、いさゝか疑ひいふは、我がたけは、みづからの目には見えぬがゆゑなり。さてかくいひやるは、おとなになりたれば、今は夫婦の契約をせんといふことを、例の裏に含めたるなり。

女かへし

くらべこしふりわけがみもかた過ぎぬ

君ならずしてたれかなづべき

(語釋) くらべてし云々、まだ童の時、誰が髪長きかなど、くらぶるは、わらはべの常ある事なるべし。○ふりわけがみは、振分髪にて、髪をゆはずに、放ちて後に垂れたるをいふ。當時、すべての女のしける「すべらかし」といふも、うしろにたれたれども、それは、本を結ひて垂るゝなり。童女の振分髪は、もとをゆはず、放ちたるをいふ。下て、垂るゝゆゑに、髪を二つに分かるゝと、振分髪とはいふ。

なり。萬葉集などに、童女波奈理といふも、此の振分髪のことなるべしのかた過ぎぬは、肩過ぎぬにて、髪カミの長くなりたるをいひて、成長せるよしを示したるなり。○君ならずして云々、既にかく髪も長く、年も成長して、おとなになりぬれど、此の髪は、君ならずして、誰れか撫で愛する人のあるべきとなり。さて一首の意は、わらはどち、いづれか長きとくらべ來し、振分髪も肩を過ぎて、垂るゝほどになりぬ。君ならずして、誰れか撫でうつくしむ人あらんとなり。男の贈れると、物は異にて、意は同じく、互にみづからの事をいひて、末に情をいへり

かくいひくゝて、つひに、ほいの如くあひにけり

(語釋) かくいひくとは、此の後も、かやうに、度々、歌の贈答などしてなり○ほいは、本意の義にて、始より思ひ入れたる如くなるをいふ

さて年頃ふるほどに、女のおやなくなりて、たよりなくなるまゝに

(語釋) さて年頃あるほどに云く、古は女の家、男は簪すみしけるに、女のおやなく成りぬれば、漸々に、貧しくなりけるなり。殊に此の女のおやは、田舎わたらひしけるなれば、これが死にては、生活のたよりに苦しきとなり

もろどもに、いふかひなくてあらんやはとて、かふちの國、たかやすの郡に、いき
かよふ所いできにけり。

（語釋） もろともには、男女共になり○いふかひなくて云ふは、徒に手を空しく日を暮らさんやの意なり。親のせしやうに、田舎わたらひせんとて、河内の國に行きけるよしなり○かうちは、河内

なり○たかやすは、高安なり。さて生活のために、田舎わたらひしける間に、河内の國、高安の女を見そめて、通ふやうになれるよしなり。言すくなに、意をこめて、書ける文なり。能く心して、其の意をあやまらぬやうにすべし

さりけれど、此のもとの女、あしとれもへるけしきもなく、出だしたてゝやりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらんと思ひうたがひて、

(語釋) さりければ、さありければなり○あしとおもへるけしきもなくは、詞に出だして、怨みいはぬはもとよりにてといふ意を、もの辭にこめたるなり○男云々、あまりに、女の心のうつくしきが故に、男は却りて、他の男に、心をうつせるやと疑ひてなり

せんざいの中にかくれおて、かのかふちへいぬるかほにて見れば、此の女、いどうけさうじて、うちながめて、

(語釋) せんざいは、前裁にて、庭前に植ゑたる草木をいふ。後園に對していふ語なるべし。庭のうち、草木の蔭などに隠れ居たるなり○いぬるかほは、行くふりなり。かほは顔にて、様子をいふ○けさうは、假粧にて、顔つくりするをいふ。夫の見ぬ所にて、身なりをくづさぬが、女のたしなみたるよしなり○ながめては、心配して、物れもふさまをいふこと、前に委しくいへり。うちは、例の添へたる言なり

風ふけばおきつしらなみたつた山

よはにや君がひかりのめくら

(語釋) おきつしらなみは、沖の白波なり。さて一二の句は、たつ田山といふへかけたる序なり。他意なし○よはは、夜半にて、夜中の意なり○一首のころは、龍田山のやまをえの道はさかしくて、晝たにくるしと聞くに、山の此方にて、目くれて、よはにや君が獨りゆらん、さうくるしくも、おそろしくも、思ひ給はんが、いとほしとなり。女の情、さもあるべし。但、この歌、しらなみといふは、盜賊を白波といへば、それをもこめて、さる恐ろしき處を、夜こゆるが悲しといへるなるべしといふ説もあれど、盜賊の事まで、こめたりといはでも聞てゆべければ、なほ、序とのみ見る方、おたやかなるべし

とよみけるを聞きて、かぎりなく、かなしとれもひて、かふちへも、をさをさ、かよはすなりにけり

(語釋) 歌よむを、前裁の中にて、聞きけるは、昔は、歌をよみては、聲あげて謠ふこともありける故なり○かぎりなくかなしと思ふは、男もなさけ知れるものなりしなり○をさをさは通はずとは、今言にあまり通はずなといふに同じ

さてまれの、かの高安にきて見れば、はじめころ、心にくゝもつくりけれ、

(語釋) 心にくゝは、今言に、れくゆかしくなといはんが如し。さて此の高安の女は、始の中は、心れくゆかしくも思ひたれどとなり

今はうちとけて、髪をかしらにまきあげて、をもながやかなる女の、

(語釋) 髪をかしらにまきあげて云々、昔は、すべて女は、垂髪なりき。宮中の式に預る宮女、また

は、齊宮などは、髪あげするを禮としたり。そのゆゑは、髪垂れて、供御などに觸るゝを恐れたるなり。但、それは、美しく舉げゆひて、恭しきさまなり。この頭に巻きあぐるは、賤しく無禮なるさまをいふ。似たる事ながら、大差あり。混ぶべからず。賤しき女は、立ち居ひまなく忙しきにより、背に垂れたるをも、額髪をも、一つに頭に巻きあげて、假りにゆふ事ありき。こゝなるもさやうなり。顔にかゝれる額髪をあぐれば、顔の長く見ゆるものなれば、ながやかなる女といへるなり。手つから、いひかひを取りて、けこのうつはものにもりけるを見て、心うがりて、かずなりにけり。

(語釋) いひかひは、飯匙にて、今の杓子なり○けこは、筥子にて、飯もる器をいふ。萬葉にも、家にあれば、筥にもる飯をなどあり○心うかりては、其のさまの下賤なる様子を見て、男は心にうしと思ひて、其の後は、行かすなりにけりとなり

さりければ、かの女、やまどのかたを見やりて、
君があたり見つゝを居らん伊駒山

雲なくくしを雨はふるとも

(語釋) 見つゝをのをは、助辭なり。古今集の歌に、「ぬれてをゆかん」とあるをに同じ。一首のこゝろは、聞てえたるが如し。但、この歌は、萬葉集に「君があたり見つゝををらん伊駒山、雲なくくしを雨はふるとも」とあり。唯二の句の「をを」にかへて、記者の加へたるものなり

たびく過ぎぬれば、

(語釋) からうじては、今言に、やうやく、又、ヤットなどいはんが如し○やまど人とい、彼の男をさせるなり

君こんといひし夜どに過ぎぬれば

たのまぬものゝ戀ひつゝをる

(語釋) ものゝは、物ながらの意なり。頼みにはならじと思ひながらも、心にかゝりて、戀ひつゝを居るといふ意なり○一首のこゝろに、來んと聞てえつるに、來ぬ夜の多く過ぎぬれば、今はさるおどづれのあれど、思ひたのまれぬものながら、猶も戀ひしたひつゝ、月日の經ゆくとなり

といひけれど、男すますなりにけり

(語釋) 男すますは、男通はずといはんが如し○此の段、女の心はべの勝れたると、劣れるとの差別を書きわけたり。すべて、此の物語は、男も女も、意はへのあはれにすぐれて、賤しき舉動をなさぬをよしとして、かきたるものなり

(廿三段) むかし男女、かたおなかに住みけり。男みやづかへしにて、別を惜しみて、ゆきけるまゝに、三どせとざりければ、まちわびたりけるに、又、いとねんごろにいひける人に、こよひはあはんどちざりたりけるに、

(語釋) 評釋にいはく、日本書紀の孝德天皇の卷に、有妻妾爲夫被放之日、經年之後、適他恒理、而此前夫三四年後、食求後夫財物爲己利者甚衆と見えて、前夫の食るをあしとのたまへるなり。女は

ひとり、世にあり經がたきものなれば、三年の後、異男にあふは、かく古よりとがめなかりき。又、
雜令云、雖已成、其夫没落外蕃、有子五年、無子三年不歸、及逃亡有子三年、無子二年不出者、並聽改
嫁、これは、令の二の卷、戸令第八に見えたり。さてこゝなるは、宮仕へしにとて、ゆきたるにて、令
のとは異なれども、かゝる御定もある事なれば、三とせの後とは、女のおもへるよしなり。古意に、
女をほめて、男をわるしといはれたるは、いみじき言なり。三歳みざりけるも、身を心にまか
せぬ宮づかへなればなり。別を惜しみて、行きけるといへるは、男のはかれがたくしたるにて、其
の淺からぬ心をおもはば、三年をさても、さるやうこそあらめとて、猶まつべきに、異人にあはん
と契りけるは、女のおやまりなりけり。没落外蕃、又逃亡などの同じ類にはあらず云々とある説を
よとす

彼の男來たりけり。此の戸、あけ給へとたゞきけれど、あけて、歌をなん、よみて
出だしたりける

(語釋) 戸をあけて、歌をよみて出だせるは、三年をさりけるを恨み、又、この男を入れては、今夜
あはんと契りたる人に逢はん、便あしければ、まづ、歌をよみて、出だせるなり

あら玉の年の三とせをまちわびて

たゞこよひこそにひ枕すれ

(語釋) あら玉は、年の枕詞のまゝわびて云々は、待つにせんかたづきて、女の身によるべしなり、
今宵は、異人とにひ枕するとの意なり、〇にひ枕すは、男と女とにひ枕すなり、

今夜のさまを明らかに云ひ出でたるは、違なる事にて、思ひめぐらすひまもなく、心あらず田舎の
女の、いかにとも体よきさまには、得いはぬよしなり

といひいだしたりければ

梓弓まゆみつき弓としを経て

わがせしがでどうるはしみせよ

(語釋) こゝも、次の歌も、はじめ二句は、弓をたとへにいへるなり。此の歌は、評釋にいへるが如
く、神樂歌の「弓といへばしななきものを梓弓、まゆみつき弓しなこそあるらし」といふ歌を、本哥
にして、詠めるなり。此本歌の心は、おしなべて、弓といへば、名にしなぐはなきものを、こまか
にわけていふ時は、梓弓、まゆみ、つき弓、しなぐ、こそあるなれといふ意なり。たとへ意なるべし。
これをとりて、この歌は、夫婦といへば、ひととほりのやうなれども、宮づかへにも出づるほどの
事にて、種々のうき事どもを忍びつゝ、年を経て、わがうるはしく、中よくせるやうに、君も又のち
の夫に、うるはしくせよといへるなり。さてわが年頃うるはしくして、何事もしのび過さしよし
を述べて、女の心みじかく、異男にあはんと契りたるを、深く怨むるこゝろ見えたり。本歌が、たと
へ歌あれば、やがて、たとへに用ひたるなり。されば、返歌も、初二句は、弓をたとへにいへり。照し
合はせて見るべし。かくとせば、弓の名を三つまで重ねたる事も聞てえ、此の歌に、女のいたく耻
ぢくやみて、深く慕へるにも叶ふべし

といひて、いなんとしければ、女

(語釋) と歌を詠みすて、男は立ち去らんとしたりしかば、女は、深く耻ぢてなり
あづさ弓ひけどひかねどむかしより

心は君によりにしものを

(語釋) 此の歌も、諸説あれど、例の評釋の説よろし。其の大意にいはいはく、さきの歌を承けて、こなたにも、昔より兎にもかくにも、心は君によりにしものを、見すて、いなんとし給ふは、うらめしといへるなり。とにもかくにもといふころを、弓にたとへて、ひけど、ひかねとはいふなり。よるも、弓の縁なり。男のうたに、しなくのうき事ありしよしを、弓のうへにていへるからに、かへしも、げにさやうありし時、とにも、かくにも、心を君によせて、はなれざりしといふことを、又、弓のうへにていへるなり云々

といひけれど、男かへりにけり。女、いとかなくして。しりにたちて、おひゆけど、えおひつかで、し水のあるところに、ふしにけり。うこなる岩に、およびのちして、かきつけける

(語釋) しりにたちては、うしろに立ちてといふに同じ。あそより逐ひかけたるなり○えおひつかでは、女は、男より足もあつければ、逐ひつく事を得ざりしよしなり○し水のあるところに云々、此の女、逐ひかけ来て、息のたゆれば、水のまんとて、立ちよれるに、即、息きれて、其の所に伏したるなり。さてせん方つきて、指をくひて、其の血して、石に歌を書きたるなり。事のきはめて切なる心ざりしを、能く書き取りたりといふべし○ふしにけりといふは、小指の處にあらす。伊勢物語

語なると、針にて、指の血を出だしたる事あれど、しは、急に女の逐ひ出せたるなれば、針を持つべきにもあらねば、口にて血を出だしたるなるべし

あひ思はでかれぬ人をとどめかね

わが身は今ぞ消えはてぬめる

(語釋) かれぬるは、離れぬるなり。萬葉にも、離の字を訓せり○とどめかねは、とどめ得ずといふ意なり○めるは、今言に、やうすじやといふころなり。かくいふは、まだ消えはてぬほどに、よめる歌なればなり○一首のころは、われは、かくばかり思へども、かなたには、思はで、はなれぬる人を、とどめ得ずして、我が身は、今、消えはつるやうすじやとなり

とかきて、いたづらになりにけり

(語釋) いたづらになるとは、死ぬるをいふなり

(二十四段)むかし男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける

(語釋) あはじともいはざりける女の云々は、逢ひもせず、否ともいひ放たず、男の心を悩ます女なり○さすがは、今言に、しかしながらの意なれば、否とも諸ともいはぬのみならず。つれなき中にしかしながら捨て難き情ありげに見ゆるをいふ。すべて、さすがといふは、わるき事の中にて、よき事のあるにつきていふ詞なり

秋の野にさゝわけし朝の袖よりも

あはでぬる夜ぞひちまさりける

(語釋) 秋の朝、野の笹わくる袖は、いたく露にぬるゝものなれども、それよりも、つれなき人にあはでぬる夜は、涙にぬれまざるとなり。○ひちは、ぬるゝといふに同じ。○此の歌は、古今集戀の三にあり。但古今集には、「あはでこし夜ぞ」とあるを、こしには、あはでぬる夜となほして引きたるなり。いろこのみなる女、かへし

(語釋) いろこのみは、好色の意なり。逢はじともいひ放たずして、男の心を悩ますまを、前にいひて、此の女の色このみなる事を、いたく知らせたる文なり

みるめなきわが身をうらとしらねばや

かれなであまの足たゆくくる

(語釋) 上の句は、我が身を、みるめなき浦としらねばやと、上下に打ちかへして見るべし。みるめなき浦とは、逢ひ難き身といふことなり。浦は、たゞみるめによれる詞のみなりと心得べし。○一首の意は、逢ひがたき我が身と知り給はねばにや、夜ごとに、あしのたゆきに來たり給ふになり。それを、みるめのなき浦に、海人のみるめをかりにくるに譬へたるなり

(廿五段) むかし、男、五條わたりなりける女をええすなりける事と、わびたりける人の返事に

(語釋) 新釋に、いはく「これは、ある人、男のもとに、君は五條わたりなりける女を、え得ずなり給

り。男の女を得ずして、詫び居るをさうか詞なるゆゑに、それをわびたりけるとはいひしなり

たとへば、家の内に、よろこびある時は、嬉しく思ひ居るものなれば、人の訪問するをも、よろこびにくるなどいふが如し

れもほえず袖にみななどのさわくかな

もろこし船のよりしばかりに

(語釋) おもほえずは、思ひもかけずの義なり。○袖に漣のさわくとは、涙のふかき事をいふ。さわくは、浪によせたるなり。○もろこし船は、唐船なり。○よりしばかりは、よりしほといふ詞なり。よりしとは、過去の詞なり。さて唐船のよるは、大湊にて、ことに、浪もさわぐことなれば、泪のふかきよしに寄せたるなり。○彼のさうらひし人を、唐船に見なし、心のうれしさを、感涙のふかきよしにいひなしたるなり

(廿六段) むかし、男、女のもとに、ひと夜いきて、又もいかずなりければ、女のおやはらたちて、手あらふ所に、ぬきすをとりて、なげすてければ、

(語釋) ひと夜いきて云々は、男は女の許へ通ひ初むれば、三夜は、必、つゝけて通ふがならはしなり。然るに、一夜ぎりにて、通はずなりぬれば、人目も見ぐるしく、又、かゝるうはきなる男に逢ひをめたるは、女の考の至らざるゆゑなれば、女の親が、立腹したるよしなり。○手あらふ所に云々は、朝、むすめの起きて、手洗ふ所に、親の來て、昨夜も、男の見えざりきとて、立腹せるなり。○ぬきすは、貫簀なり。鹽の上に掛くる簀にて、手洗ふ水の外へ飛び散らぬ用意のものなり。此の鹽の上の簀

を投げたるは、顔洗ふ時は、殊に昨夜の事を思ひ起すものなればなるべし
たらひの水に、なくかげの見えけるを、みづから

(語釋) 鹽は、水を手にそゝぎかくる時、したに置いて、水をうくる器をいふ○なくかげの云々、
簀は、竹を編みたるものなり。親が、ろの簀を投げすてたれば、女の哭く影の、鹽にうつれるなり○
みづからは、娘をいふ。上には、親の事をいへるが故に、こゝはこそさらに、娘の歌なりとこぞわ
なり

我ばかりものおもふ人はまたもあらじ

と思へば水のまたにもありけり

(語釋) 我が顔の鹽にうつれるを、かくれるかに、いひなしたる、情の切なるさま想ふべし。此の歌
は、語も大意も、聞てえたるが如し

とよめりけるを、彼のこざりける男きゝて

(語釋) こざりける男は、一夜のみにて、來すなりたる前の男をいふ

みな口にわれやみゆらんかはづさへ

水のそこれてもろ聲になく

(語釋) みなくちは、水口にて、田へ水を塞き入るゝ口をいふ、鹽の水は、水口の水のたまれるに似
たれば、たとへていふ○此の歌は、心なき蛙さへ、水の底にて、ひとりはなかず、もろ聲に鳴くなり。

あらんどの意なり

(廿七段) むかし、色このみなりける女、出でゝいければ、いふかひなくて、男

(語釋) いふかひなくては、今言に「フガイナイ」などいはんが如し。女は、顔、好色のものにて、男
を厭ひて、出でゝ行きしに、男は之を悟らず、かへりて、それを慕ひて、歌など贈るさまなり。其の男
の心を、即「いふかひなし」とはいひしなり

などてかくあひかたみともなりぬらん

水もらさじとちぎりしものを

(語釋) あひかたみは、逢ひ難きを、かたみといひかけて、かたみとなれば、汲める水は、もりてあ
まどなくなるを以て、詞をしたてたるなり。さてかたみは、かたまともいふ。竹籠の事なり○一首の意
は、なに故に、かく逢ひがたくはなりぬらん。變らじと契りしものを、其の契を、女の念れはせまじ
きを、誠にあやしき事よと、獨りとする意なり

(廿八段) むかし、東宮の女御の御かたの花の賀に、めしあげられたりけるに、近
衛づかさなりける人

(語釋) 東宮は、春宮とも書く。皇太子の御事なり。こゝは、東宮の御母女御を申すなり。女御は、中
宮に次ぐ女官にて、今の權典侍などの如し○御かたとは、女御がたの御人の賀の義なり○花の賀と
は、花の頃ある賀をいふ○東宮の女御云々、近衛づかさなりける人とは、暗に二條の后と、業平朝臣
との事をほのめかしたるなり

花にあかぬなげきはいつもせしかども

けふのこよひに似る時はなし

(語釋) 花を賞して、飽かぬ歎息は、常にすれど、今日の今宵は、御賀のわざのためたく、おもしろさも添へば、花にあかぬなげきの格別なりとの意なり。さて裏には、彼の女御を慕ひ奉れども、及ばぬ事よと、歎息するよしを、含めたるなり

(廿九段) むかし、男、はつかなりける女のもとに

(語釋) はつかなりける女とは、男は度々逢ひたく思へど、女のいと稀れに、僅にのみ逢ふよしなり。はつかは、わつかともいふ。僅の字の義なり
あふことは玉の緒ばかりおもほえて

つらきこゝろのながく見ゆらん

(語釋) 玉の緒ばかりとは、玉の緒の短きといふより轉りて、暫時などの意に用ふ。こゝも然り○一首の意は、逢ふ事は、玉の緒の短きが如くなるに、いかなれば、我につらき君が心の長く見ゆる事ならんとなり。逢ふ事の短ければ、それに應じて、つらき心も短かくあるべきにぞ、例のおろかに詠み出でたるは、却りて情の切に見ゆるなり

(三十段) むかし、男、宮のうちにて、あるでたちのつばねのまへをわたるに

(語釋) 宮のうちとは、内裏をいふ○でたちは、御達また御等の字をあつ。婦人の尊稱なり。こゝは宮中にて、よき女房といふなり○つばねは、つばねのまへをわたるは、

何のあたにかおもひけん、よしや、草葉のならんぞが見んといひければ、男

(語釋) 此處も、諸説あれど、新釋の説よろしからん。其の大意にいはいく、局の前を男のわたるを見て、うちなる女の、女のあたかたきにか思ひけん。しかぐいへるなり。此のいへる詞の意は、我を忘れて、何とも思はぬ男は、にくけれど、よしや、腹たてずして、草葉のはては、霜かるゝやうにならん、男のありさまを見んといへるなり。草葉のしげると見れば、ほどなくかるゝを、人の早くおとろふるに譬へたるなり。さがは、アリサマといふ意なり。祥の字の義にあらず云々と、此の處、ことに詞を零きたれば、誠に解しがたけれど、暫くこの説に據るべし
つみもなき人をうけへばわすれ草

おのがうへにぞおふといふなる

(語釋) うけへは、咒祖の意にて、人の上を祈りて、あしくなす事をいふ。もとは、よきにもあしきにもいへど、此の頃は、既にあしき方にのみいへり○れのが上とは、已が身の上の意なり。さて忌草の已がうへにおふとは、人に忌らるゝをいふなり○一首の意は、罪もなき人をいのりて、あしくなさんとするれば、却りて、おのが身の上にあしき事ありとの意なり
といふを、ねたう女もおもひけり

(語釋) ねたうは、嫉くの音便なり。「罪もなき云々」の歌よみけるを聞きて、女も嫉く思ひけりとなり

(卅一段) むかし、男、ものいひたる女に、年ごろありて

(語釋) ものいひける女とは、たゞ物を言ひたるのみならず、逢ひたる事のあるをいふいにしへのしづのをたまきくりかへし

むかしを今になすよしもがな

(語釋) しづのをたまきは、倭文の麻環なり。倭文は、わが國にて、太古より織りたる文ある布なり。その倭文を織る料の卷子を、麻環といふ。續麻にて外を圍く、内を虚に卷きたるものなり。さていにしへのしづのをたまきは、繰りかへしといはん料の序なり。がなは、願ふ意の辭なり。がは、必、濁音によむべし昔あひたる女に、中絶えて、年へてのちに、戀ひしくおもひて、又、あひたきよしをいひたる歌なり

といへりけれど、何とおもはずやありけん

(語釋) 中絶したる男なれば、今更に、あひたきよしといふことも、頼むべきにあらねば、女の何とも思はずやありけん、記者の詞なり

(卅二段) むかし、男、津の國、うばらの郡に、住みける女にかよひける。此のたび、かへりなば、又はこじと思へるけしきを見て、女のうらみたれば、男

(語釋) 津の國は、攝津の國なり。うばらの郡は、和名抄に、攝津國、免原とある是なり。かよひけるにて、句を切り、下にがといふ辭を入れて心得べし。外は、聞てえたるが如し

あしべよりみちくるこほのいやまこし

(語釋) あしべは、葦邊にて、葦は海邊に生ずるものなれば、磯にしほのみちくるを、葦邊よりとはいふなり。こほのよりは、にといふに同じ。いやましには、愈増の義にて、見る／＼多くなる事にいふ。かのかなは、歎息の辭なり。さるは、かくまでも、思ふかくなるものかなといひて、心かはりするならんと、女の疑ひ怨むは、僻言を諫むる意を、おくめたるなり。一首の意は、葦邊にみちくる鹽の、見るがうちに、いやましに、ますこどく、君に心を思ひますかなとなり

かへし

こもり江におもふこゝろをいかでかは

舟さすさをのさして知るべき

(語釋) こもり江は、山陰にこもりたる江なるべし。のさしては、推し測りての意なり。君が心の中に、こめたる思は、いかでか、推量して、知ることを得べきといふ縁に、舟さすさをのさしてとは、いへるなるべし

おなにか人のことばにては、よしや、あしや

(語釋) 田舎人の歌としては、よしと覺ゆといふ意なり。しかし、實に此の歌は、記者のよみたるなれば、よしとも定めず、あしやといふ詞を添へたるなり

(卅三段) むかし、男、つれなかりける人のもどに

いへばえにいはねばむねのさわがれて

心ひとつになげくところかな

(語釋) えには、不得なり。万葉に、不知をシラニといふが如く、不を二といふは、古の一格なり。今言に「いはんとすれば、言ひ得ず」の義なり○一首の意は、人のつれなきを、深く恨みて、いはんとすれば、詞には言ひ得ず。又、そのよしいはねば、胸の静まる時なく、心一つに歎く比かなど、歎息したるなり

おもひく／＼て、いへるなるべし

(語釋) かく切なる歌を贈るは、容易の事にあらず。思案に思案を重ねて、いへるなるべしと、記者が、男の心中を推量して、いへるなり

卅四段) むかし、男、心にもあらで、たえたる人のもとに

(語釋) 心にもあらでとは、男の心の變れるはあらで、故ありて絶えたるをいふなるべし
玉の緒をあわをによりてむすべれば

絶えての後もあはんとぞおもふ

(語釋) あわをは、あわといふ結の名なり。これは、能くよりとのへて、結ぶなり○一首のこゝろは、玉の緒を、能くよりとのへて、あわといふ結にむすび堅めたるが如き二人の中なれば、たとひ、今は故ありて、中絶せるも、つひには、又、もとの如く逢はんと思ふとなり

卅五段) むかし、男、わすれぬるなめりとどひごとしける、女のもとに

(語釋) どひごとは、問言なり。久しく音信し給はぬは、忘れ給ひしに似た、女のいひあてせたる

谷せばみ峯まではへる玉かつら

絶えんと人をわがおもはななくに

(語釋) 谷せばみは、谷の狭きなり○玉かつらは、玉葛にて、葛の事なり○おもはななくには、思はぬにといふに同じ○二首の意は、谷がせばさに、峯まではひのぼれる玉葛の、長くつゝきたるが如く、行末ながく通はんぞ、われは思へるに、忘れざるなるべしと、問言し給ふは、却りて、そなたの情薄きに似たりと、餘情をもたせるなり○さて、此の歌は、万葉集、十四の巻に「谷せばみ峰にはひたる玉かつら、たえんのこゝろわがもはななくに」とあるを、少しなほして、例の記者がつくりたるなり

卅六段) むかし、男、いろこのみなりける女にあへりけり。うしろめたくやおもひけん

(語釋) うしろめたしは、今言に、「心モトナシ」又「心ニカ、ル」などいふに同じ。好色なる女に逢ひたるなれば、男は不安心にや思ひけん。左の歌を贈れりと、記者の詞なり
われならでした紐どくなあさがほの

夕かげまたぬ花にはありども

(語釋) あさがほは、朝の間だけ、花さきて、夕日のかげもまたで、萎むものなり。さるかはりやすき花にはあれど、我ならでは、下紐どくことなかれとなり。これにて、一首の意明らかなり○毛詩などに、女を薙にたとへたるは、ほめたる方なれど、こゝは、かはりやすきをたとへたるなり

かへし

ふたりして結びし紐をひとりして

あひ見るまではとかしとぞおもふ

(語釋) 歌のこゝろ隠れたる所し。但、萬葉集に、「二人して結びしひもを一人して、われはとき見じただにあふまでは」とあり。それをつくりかへて、こゝに似つかはしくしらへて、返歌となせるなり。この例、前にも多し

(卅七段) むかし、紀の有常ものへいきて、久しうかへらざりけるに、いひやる

(語釋) 紀の有常は、前にいへり○ものへいきてとは、其の事を畧きて、何處とも名をあげでいふ言なり。「物する」などのものと同じ。其處へゆくを、ものへゆくといふなり○親友なる、有常が、外へゆきて、久しく歸らねば、戀ひしさに堪へずして、いひやりたりとなり

君によりおもひならひぬ世の中の

人はこれをや戀といふらん

(語釋) この歌も明らかななり。君をこひ慕ひて、はじめて思ひならひぬ。世の中の人、かやうの事をや、戀といふなるべし

かへし

ならはねば世の人ごとく何をか

(語釋) ならはねばは、習はねばなり○何をかまは、何をかマアの意也○我しものしるは、助辭なり。○一首のこゝろは、前の歌に、「世の中の人、これをやこひといふらん」と、かを承けて、世の中の人ごとく、戀々といふは如何なる事をいふにかと、今までは、習はねば、人に問ひしれども、君が戀の師となりける事よとなり

○(卅八段) むかし、西院のみかどと申すみかどおはしましけり。

(語釋) 西院のみかどは、淳和天皇を申す。西院は、また、淳和院ともいふ。四條の北、大宮の東なり。にありきとぞ。もとは、橘太后の家なりしなり

其の帝のみこに、たかいこと申すいまをかりけり。

(語釋) たかいこは、崇子内親王にて、淳和天皇の御女なり。此のみこは、承和十五年五月十五日に、御年十九にて、みまかり給へるよし、續日本後記に見えたり。御母は、橘船子、正四位上清野の女なり○いまをかりけりとは、おはしましけりといふに同じ

そのみこうせたまひて、おほんはふりの夜、其の宮の隣なりける男、御はふり見んとて、女車にあひのりて、出でたりけり。

(語釋) おほんはふりは、御葬なり。其の御葬送の作法を見んとてなり○女車にあひのるとは、男が女と同事したるなり。これは、かくれて見に出づるさまなり

いとひさしう、わて出で奉らず。うちなげきて、やみぬべかりけるあひだに、

(語釋) 眞淵翁の説に、轎車ヤグルマを挽きて出づるが、いとおそきを、待わびつゝ、歎息して、今は見ずし

あめの志たの色でのみ、源のいたるといふ人、これも、もの見るに

此の車を、女車と見て、よりきて、どくなまめくあひだに、かのいたる螢をとりて、車にいれたりけるを、

車なりける人、此のほたるの、どもす火にや見ゆらんとおもひて、けちなんとす
さてのれる男のよめる

いでゝいなばかぎりなるべしともしつき

年へぬるかどなく聲をきけ

(語釋) いで、いなばは、御葬の御車を挽き出でなば、それが、かざりの御門出るべし。身の火
つきて、終りたまふも、輪へたまふものか、かく習ふは、するそと、人々の御葬を聞けと、いふもの。

至に示したるなり。〇ともしつきは、燈盡にて、皇女の死に給ひしをいふ。〇年へぬるかとは、年へぬるかはの意にて、御年經たまひて、御老年のことならば、止むを得ざれども、いまだ、二十にも足り給はずして、かくれ給ひぬる事なれば、人々の悲しみ歎く聲を聞け、かゝる折に、女車を見て、けさうしかゝるは、折を知らざる事よとの意を含めたるなり。

かのいたるかへし

いとあはれなくぞ聞てゆるともし火の

きゆるものとも我はしらずな

(語釋) 前の「なく聲を聞け」とあるを承けて、まことに、悲しく歎く聲を聞てゆる。さてともしつ
きと、君はいへど、佛説にも、常住不滅と説けば、きえはつるものども、我はしらずとなり○なは、助
辭なり○古意には、此の歌を脱したり

どなんかへしたりける。天のしたの色でのみの歌にでは、なほヨソキずありける。

(語釋) なほ^{ヨツネ}ありけるとは、尋常にてありけりとなり。なほは、なほくしなといふと同じ。尋常といふ義なり。此の返歌、天下第一の好色家のさまにも似ず、なみくしの、世の中のさまをさどれる人の如くに覺ゆとな。

「至は、順が祖父なり。みこの本意なし」

此のことなき本をよしとす。後人の書き入れたるものなるべし

（卅九段）むかし、わかきをのこけしうはあらぬ女をおもひけり。

(語釋) けしうはあらぬ云々、けしうは、異しきの音便にて、わるくもなしといふ義なり。勝れてよしといふ意にはあらず

さかしらするおやありて、おもひもぞつくとて、此の女をほかへおひやらんとす。

(語釋) さかしらする親とて、かしてだてする親の意なり。今言に、リコウブリスルの意なり。其のゆゑは、此の若き男が、今かたらはんとする女を、逐ひやる親なれば、かくいへるなり。こゝによりて見れば、此のけしうはあらぬ女とあるは、此の男の家に、めしつかふ女なりしなり○おもひもすするとは、かくておかば、思ひつきて、離れがたくやならんと、行末を危くおもふさまなり

さこそいへ、まだれひやらす。人の子なれば、心のいきほひなくて、えとゝめず。女もいやしければ、すまふちからなし。さるあひだに、おもひは、いやまさりにまざる。

(語釋) さこそいへは、今言に、サウハイヘドなどいはんが如し○まだおひやらすとは、逐ひやる親とはいへど、まだ事のさまを見て、そのまゝにおくよしなり○人の子とは、いまだ、我が代にはあらで、父が家事をとりをる事を知らせたる女なり○心のいきほひなくて云々、かく家事萬端、父の賄ふ事なれば、愛情おかけれど、女をどゝむる勢力なしとなり○女もいやしければとは、下婢なることを知らせたるなり○すまふは、負ひじと争ふことをいふ。こゝは、家を出でじと踏みてらへん力なしとの意なり○さるあひだに、女を逐ひやるは、いまださういふ事なかり

なり。すべし、他人に制せらるゝ時は、逐ひをさるゝが、戀のならひなればなり
にはかに、おや、此の女をおひうつ。男、ちのなみだをながせども、どゝむるよしなし。おて出で、いぬ。

(語釋) ちのなみだは、いたくなげきたるをいふ○おて出で、いぬとは、親めしつかふ人にいひつけて、其の女をつれて出でゆかしめしなり。其のゆゑは、次の文に「かへる人につけて」とあるによりて知られたり

女、かへる人につけて

(語釋) おて出で、いにし人の、かへるにつけて、男のもとへ、女が歌おねくれるなり
いつこまでおくりはしつと人とさ

あかぬわかれのなみだ川まで

(語釋) なみだ川は、かゝる名の川あるにはあらねど、飽かぬわかれの、涙を川のやうにながして、我がなげき居るよしを知らせたる意なり○一首のこゝろは、何處まで、おくりたるぞ、思ふ男の問ひたらば、涙川の邊まで、送りてかへれりと、答へよとなり

男、なくななくよめる

(語釋) なくななくは、泣きながらなり。送れるものゝ、かへり來て、右のうたを語るを聞きて、あはれさに堪へず、泣くなく詠めるよしなり

いとひてはたれかわかれのかたからん

ありしにまさるけふはかなしも

(語釋) 新釋にいはく、此の歌は、互にいとひては、たれか別のかたからん。わかれやすかるべし。かくおもひかはして、いとほぬ中は、わかれのかたければ、さきに、親のおひやらんとしても、まだおひやらずありし時にまさりて、今日はかなしもといへるこゝろなり。此のものは、なげきのこゝろをそへたり云々。此の説よろし。諸説、おほかた、解き得ず

とよみて、たえいりければ、おやあわてにけり。なほざりにおもひてこゝろいひしか。いとかくしもあらじとおもふに、まこと、たえいりたれば、まどひて、願などたてたり

(語釋) なほざりとは、尋常、又、ひと、ほりなどの義なり。○いひしかは、諫めいひしかにて、親は、ひと、ほりの事と思ひ、いひけりとなり。○かくしもあらじとは、かうはあらじなり。絶え入るやうの事は、あらじと思ひしに、誠に絶え入りぬとなり。○願など云々、神佛にぐわんかけて、いかで、此の人、たすけ給へと祈りきとなり

けふの入相ばかりに、たえいりて、又の日の、いぬの時ばかりになん、からうじて、いき出でたりける。昔のわか人は、さるすけるものおもひをなんしける。今の翁、まさし、しなんやは

(語釋) 入相は、日没の比をいふ。○からうじては、今言に、ヤットなど譯すべし。○昔のわか人は、さるすけるものおもひをなんしける。今の翁、まさし、しなんやは

の情ふかかりしかば、さるすけるものおもひをなんしける。今の世は、人情、おのづから、あさければ、深くものを思ふ翁といへども、まさし、爲なんやは、しはせじとの意なり

(四十段) むかし、女はらから、ふたりありけり。ひとりはいやしき男のまづしき、ひとりば、あてなる男のどくあるもちたりけり

(語釋) はらからは、同胞にて、こゝは姉妹をいふ。○まづしきの下に、「持ち」といふ意を含めて見るべし。○あてなるとは、貴人をいふ。あては、上品などの意なること、前にいへり。○どくは、徳の意なれど、中古の書には、金銀財寶に富みたるを「どくあり」といへり。こゝも然り

いやしき男もたる、しはすのつでもりに、うへのきぬをあらひて、手づから、はりけり。こゝろざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬの、かたをはりやりてけり。

(語釋) もたるは、持ちたるなり。此の下に、がの辭を加へて、見るべし。○しはすのつでもりは、十二月の晦日なり。元日の用意に、袍を洗ひたるなるべし。○うへのきぬは、和名抄に、袍(和名宇倍乃岐沼)一名朝服著襦之袷衣也とあり。手づから洗ふは、貧にして、召使もなきよしなり。○こゝろざしはいたしてとは、かれこれと、心配はするけれども、もと、賤しき生ひたちにあらねば、かゝる賤しきわざになれず、あやまちで、袍のかたを破りきとなり。○やるは、破るの古語なり

せんかたもなく、たゞ、なきになきけり

ず、ナイデバカリ居ツタとなり。明日の料にも思ひし、唯、ひとつの袍を破りたるなれば、まことに、かなしかりぬべきわざなり

これを、かのあてなる男きゝて、いと心ぐるしかりければ、いときよらなる、ろうさうのうへのきぬを、たゞかた時に見いで、やるどて

(語釋) 心ぐるしかりければとは、今言に、氣の毒なりければなほいはんが如し○ろうさうは、緑疹ロクセンの音を、なだらかにいへるなり。さて、この縁疹は、六位の人のきる袍なり○たゞかた時に見いで、云々は、彼の十二月の晦日のことにて、今は、明日の料なれば、いといそぐべきを思ひやれる事と、又、此の贈れる家には、かゝる物も、かねて、設けてありける富人なる事とを、知らせたる文なりむらさきの色とき時はめもはるに

野なる草木づわかれざりける

(語釋) 拾穂抄に、紫を女にたとへたり。寵のおかき時は、ろのゆかりまでも、あはれに思ふとなり。野なる草木とは、紫のゆかりと見れば、いづれも、むつまじとなり。めもはるは、目も遙かなるなり。又云、妻を大切におもふゆゑに、其のゆかりまで、あはれとおもふなれば、こゝろくるしき事を、聞きすゝしがたさに、此の袍をまゐらすとなりといへり。此の説にて、大意聞てえたり○又、古意に、此の歌は、古今集に妻のおとくを持ちて侍りける人に、うへの衣をおくるとて、よみてやりける。業平朝臣とはしきして、歌は右にたがはず。これは中將の妻の妹を妻として在りける男

ある、同じ野の草木をあげて、皆ながらうつくしまるゝにたとへたるのみなり、云々といはれたり。

合はせ見て、ろのこゝろをささるべきなり

むさしのゝ、こゝろなるべし

(語釋) これは、古今集に、よみ人しらず、むらさきの一もとゆゑにむさし野の、草はみながらあはれとぞ見る」といふなり。この歌を畧きて、引きたるなり。さて前の歌をたしかに知らぬよしに取りなして、むさし野の歌のこゝろなるべしと、記者の釋したるなり。さてこの歌の意は、みながらは、皆ながらなり。大意は、一本の紫あるがゆゑに、廣き野の草木まで、皆、うつくしまるゝ心地すとのこゝろなり。一本は、わざとせまきいひて、いとひろきに對せるのみなり

(四十一段) むかし、男、いろこのみとしるゝ、女をあひしれり。されど、にくゝはたあらざりけり。

(語釋) 色このみとしるゝは、好色の女とは知りながらの意なり○あひしれりは、相互に知りあふにて、なじみになれる意なり○されどにくゝ云々は、好色なるは、かはりやすく、あしけれど、又、にくからぬ所もありとの意なり○はたは、諸説あれど、ま亦の義に解して、難なかるべし。但、又、いふよりは、すこし軽く用ふる例なり

しばしば、いきければ、なほ、いとしろめたく、ざりとて、いかで、はた、えあるまじかりける中なりければ、

(語釋) なほは、今言に、ヤツバリの意、うしろめたきは、心もとなく、不安心なるをいふ。屢、通はゞ、女の心がはりするわけもなく、さては、不安心なる事もなき筈なれど、やはり、不安心に思ふは、たのみ難く見ゆる女なればなり。○さうとて云々、さうとては、然しなからんといはんが如し。屢、かよへど猶不安心に思ふほどの女ならば、通ふことを止むべきに、然しながら、思ひきる間からにもあらざりければの意なり。○いかではたえあるまじければは、行かでも亦あることを得ざればの意に心得べし。はたの語釋は、前に委し

ふつか、三日ばかり、さばる事ありて、えいかでなん

(語釋) 二日三日ばかり用事にさへられて、行く事を得ずとなり、しばらく通ひても、女の心のかはらん事を心配せるに、まして、二日三日ゆかぬ事なれば、使をやりて、歌をおくり、いかに返事するぞと試みたるなり

出で、こしあどだにいまだかはらしを

たがかよひちと今はなるらん

(語釋) 出で、こしは、男が女の家をなり。すなはち、出で、歸り來し、我が足だに、いまだ、消えずあらんを、うなはは、心かはりて、異男を通はし給ふべければ、誰が通路と、今はなるらんと意なり

ものうたがはしさに、よめるなりけり

日のほかに、變りやせんとなりと、おくれるよしを釋したるなり

(四十二段) むかし、かやのみこと申すみておはしましけり。そのみて、女をおぼしめして、いとかしこく、めぐみつかうたまひけり。

(語釋) 賀陽親王は、桓武天皇、第七の皇子にて、齊衡二年に、三品より二品に進み給ひき。○女をおぼしめしとは、女に御心をかけ給ふをいふ。○かしこくは、能くといふ意に心得てよろし。○つかうはつかひの音便なり。女に御心とめ給ひて、よく恵みつかひ給ふゆゑに、よき女の、あまた、参りさむらふ意をこめたる文なり

いとなまめきてありけるを、わかき人は、ゆるさざりけり。

(語釋) いとなまめきてとは、大勢つかひ奉る女の中に、殊に勝れて、艶麗なる女をいふ。其の殊に勝れたる若き男は、ゆるさずして、彼是と言ひ寄りきとなり、

われのみと思ひけるを、又、人きゝつけて、文やるとて

(語釋) 通ふ男の、我ひとりと思ひたるを、是よりは、やく言ひかはしたる男のありて、其の男が、我のみと思ひ居る男の事を聞きつけて、うらみの文やるなり。これは、一人の女に、二人の男の言ひよるなり。古意に、一人の女に、三人通ふなりといはれたるは、いかゞ

ほどゝぎすのかたをつくりて

(語釋) 文やるとて、時鳥のかたをつくりて、文にそへたるなり。さるは、女を子規によろへたる歌、文の中に、かきてあるゆゑなり。是、古の風流のわざなりと、新釋にいへるにて、明らかなり

ほどゝぎすながなく里のあまたあれば

猶うとまれぬおもふものから

(語釋) なほうとまれぬは、やはりうとまるゝといふ意なり。此の歌は、五四と、句を顛倒して、意をとるべし。子規よ、汝が鳴く里のあまたあれば、なつかしく思ふものながら、猶うとまるといふ意なり。是は古今集の夏の歌にて、たゞ、子規のうへのみなるを、こゝにかくはしがきを作りて、人々に心かよはする女にたとへたり

といへり。この女、けしきをとりて

(語釋) けしきをとりとは、今言に、機嫌をとるといはんが如し。男の機嫌を女のとりなり
名のみたつしでのたをさはけさぞなく

いほりあまたにうとまれぬれば

(語釋) しでのたをさとは、郭公ホトトギスの異名なり。賤の田長の義、勸農の意にて、鳴く鳥なれば、名づくといふ。○名のみたつは、子規は、あまたの里を鳴きわたるといふ、名のみたちたるにて、實はさにあらず。あまたの人にうとまれぬれば、かなしさに、今うなくといへるなり。さて其の裏の心は、又、異人にもいふやうにのたまへど、さやうの身の上ならず、君にうとまれし悲しさにこそなけり。下の句に、あまたに疎まれぬればといひて、君に疎まれしかなしさになくといふことを、含めたるなり。○いほりは、田長といふより、其の人の住む家のまきを、詞の縁にいへるのみなり。時はこゝきになんありける男かへし

(語釋) さつきは、陰曆五月なり。時をかきたるは、歌の中の郭公をたずくるのみ。是、記者の詞なり

いほりおほきしでの田長はなほたのむ

わがすむ里に聲したえずば

(語釋) 前の歌を承けて、よめるなり。一首の意は、此處、彼處に、鳴きわたる子規は、うとましけれど、我が住む里に聲たえずば、やはり、たのみにすべしとなり。「田長は」の下に「うとましけれど」といふ詞を加へて意をとるべし

(四十三段) むかし、男ありけり。あがたへゆく人に、うまのはなむけせんとて、よびたりけるに、

(語釋) あがたへゆくとは、京より任國へ行くことをいふ。○うまのはなむけとは、馬の鼻向にて、もと、旅ゆく人の、馬の鼻をうなたへ向けて、見おくるより出でたる語なり。それよりうつりては、たゞ、餞別する事にも用ふ

うとき人あらざりければ、家どうじして、盃さゝせて、

(語釋) うとき人にしのは、助辭なり。親しき中なりければ、妻まで出だして。離別の盃さゝせりとなり。○家どうじは、家戸主イヘトを音便にいへるなり。戸は家なり。じは主の畧にて。一家の内をつかさどる主婦をいふなり

女のさうぞくかつけんとす。主の男よみて、裳のこしらゆひつけさす、

(語釋) かつけは、纏頭の意なり。こゝは、かつがせん意にて、たくらんとすとの意なり○さすは、妻につけさするなり○さてかやうにかけけるは、あるじの男が、妻にかはりて、よめる歌なることを知らせたる文のさまなり

出で、ゆく君がためにとぬぎつれば

我さへもなくなりぬべきかな

(語釋) もなくは、裳なくと、喪なくとを兼ねたり。喪とは、すべて、よからぬ事をいふ詞なり○一首の意は、君がために、我が裳をぬぎたれば、裳のなくなりたりといふが、詞の上にて、裏の心は、君が出發を祝ひて、我が身まで、禍事なくなりぬる事よとの意なり。事もなきさまによりて、意ふかし。味はひて知るべし

此の歌は、あるが中に、おもしろければ、こゝろとめてよまずば、腹にふかきあぢはひもいでこじ

(語釋) 右の歌は、深く意を含めたる歌なれば、注意して、解せずば、味なからんと、記者の釋したるなり。さて此の詞なき本もあり。それもあしからず

(四十四段)むかし男ありけり。人のむすめの、かじづく、いかで、此の男にものいはんと思ひけり。うち出でんことかたくやありけん

(語釋) かじづくは、忍付にて、畏れ敬ひて、大に下する意なり。むすめは、人の妻の意なり。うちは、いひ出で難くやありけんとなり。さへ心の中に、思ひすば、いはいはゆる、戀の病となれるよしなり

ものやみになりて、しぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、おやきゝつて、なくなく、つげたりければ

(語釋) ものやみとは、何病ともなく、煩ふをいふ。乃、氣鬱病なり○かくこそ思ひしかとは、死ぬべき時になり。娘がれのれの病氣は、彼の男を慕ひしたために、かくなりけるなりと、側の下婢なとに語りけるを、親の聞きつけたるなり○なくなくつぐるとは、親は娘にさる事ありきとも、つゆ知らずして、かく今はの時になれるが悲しく思ひつゝ、告ぐるよしなり

まどひ來たりけれど、死にければ、つれくど、こもりをりけり

(語釋) まどひ來たりとは、娘の息のある間に、一目あはんとて、足をそらに、飛びくるさまをいふなり○かく急ぎ來たれど、かひなかりしかば、つれくどとなす事もなく、さびしく思にこもりきとの意なり

時は、みな月のつごもり、いとあつきころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてやゝすゞしき風吹きけり。螢たかくとびあがる、此の男ふせりて

(語釋) みな月は、陰曆六月をいふ○つごもりは、晦日をいふ、月ゴモリの義なりとぞ○あつは、管絃歌舞の類をいふ○よひは云々は、宵の間は、柩の前にて、笛ふき、琴ひきなどして、遊びをるをいふ。人の死になる時に、管絃歌舞するは、我が國、古來の風俗なり。今も神葬に、音樂あるは、此の

遺風なるべし

とぶ螢雲のうへまでいぬべくは

秋風ふくどかりにつげこせ

(語釋) つげこせは、告げよと願ふ意なり。雁は、秋風にさらはれてくるものなるに、今、夜ふけて涼しさの、はや秋風の吹きたちたる心地すれば、雁につげこせと、螢にあつらふるなり。臆斷に、もし魂は冥漠に歸するものなれば、螢の高く飛びあがるにつけて、魂にひとたび歸りこと告げよといふ心を、雁は春かへりても、秋は又來るものなれば、よろへて雁につげこせとよめるにや。此の男みふせりてといふには、此の意もあらんやうに覺ゆといへり。雲のうへまでいぬべくはあるを思ふに、實に雁によろへて、魂にかへりてといふ意ある歌なるべきか

くれがたき夏の日ぐらしながむれば

そのことゝなくものづかなしき

(語釋) くれがたきとは、夏の日は長きに、殊に前文にある如く、「つれく」ともりたるなれば、いへるなり○ながむとは、今は眺望の義にのみいへど、古は物おもふさまをいふ言なり○ものづかなしきは、何となく悲しきをいふこと、前にいへるが如し○一首の意は、相親しみし女にあらねば、往事を思ひ出で、彼是と悲しきふしはなければ、我をこひて死にたる事なれば、この心のいとはしき、夏の日の日ぐらし、思ひつゝけて、何となく悲しきなり

を、人の國へいきけるを、いとあはれとおもひて、わかれけり。月日経て、おこせたる文に。

(語釋) うるはしき友とは、親友のことなり○あひ思ひけるを、は、がの意に心得べし○人の國とは、他國をいふ。こゝは、京都の人より、他國をいふなれば、田舎をさしたるなり○いとあはれとは、今言に、甚、のこりおしいなといはんが如し

あさましう、えたいめんせで、月日へにける事、わすれやし給ひけん。いたく、思ひわびてなん侍る。世の中の人のかゝうは。めかるれば、わすれぬべきもの。にこそあめれ

(語釋) あさましうとは、今言に、ケシカラズなといはんが如し○えたいめんせでは對面する事を得ずての義なり月日へにける事は、ことかなといふ意にて、歎息の意を含めたるなり○思ひわびてとは、おもふにせん方なきをいふ○今言に、思案にくれてなといはんが如し○侍る、こゝにては、居マスといふ意に見るべし○めかるは、目離^{メカリ}にて、離れて相見ぬをいふ○すべて、こゝは、友だちよりおこせたる文の詞なり

といへりければ、よみてやる

めかるどもおもほえなくにわすらるゝ

時しなればおもかげにたつ

(語釋) おもほえなくには、覚えぬにといふに同じ○時しのしは、助辭にて、意味なし○一首のて

ゝろは、我は目かるとも覚えぬに、いかで、かやうにのたまふぞ。さてめかるとも、ねばえずといふは、此方には念らるゝ時なければ、つねに面影にたつゆゑなりとなり。第二句、おもほえなくにの下に、詞を含めたるなり。味はおべし

(四十六段) むかし、男、ねんごろに、いかでとおもふ女ありけり。されど、此の男を、あだなりときゝて、つれなさのみまさりつゝいへる

(語釋) いかでそれもおは、今言に、ドウゾして、あはゝやなどいふに同じ○あたは、變りやすきをいふこと、前に委しくいへるが如し

大ぬさのひく手あまたにきこゆれば

おもへどえてそたのまざりけれ

(語釋) 大ぬさは、臆斷に、顯昭の説を引きて、祓するに、陰陽師のもちたる串にさしたるしでなりはらへはてぬれば、これを、おのく、ひきよせつゝ、なづるものなりといへるが如し○一首のこゝろは、大ぬさのひく手あまたなるが如く、あまたの所に通ふ君なれば、ねんごろにのたまふをば、あさからず思へど、えたのみにし侍らず。それがために、よろしく、つれなく申すなりとの意なり

かへし男

おほぬさど名にこゝたてれなかれても

(語釋) 新釋に、歌のおもては、大ぬさはひく手あまたなりと、名にこそたてれ。川にながれて、つひによるせのありといふものを、ひく手あまたなりとて、いとおべき事ならずといふ意をかくめて、いひ残したるなり。又、たとへたる下の意は、あまた所に通ふと、名にこそたてれ、見給へよ、ゆく末に、つひによる所は、あるものを、いとひ給ふは、心得ずといへるなり。其のよる所は、君なりといはでおもはせたるなり。さてなかれてもといへるは、つねのてもとは異にて、もは軽く添へたるにて、ながれてといふ意なり、したの意は、行末にといふにあたれるにても知るべし云々といへり。この説にて、よく聞てえたり

(四十七段) むかし、男ありけり。うまのはなむけせんとて、人を待ちけるに、こざりければ

(語釋) 文意も、語釋も、よく聞てえたり
今うしろくるしきものと人またん

里をばかれずとふべかりけり

(語釋) 此の歌、一二の句、くるしきものと、今うしろといふべきを、それにては、五七のことばに叶はぬゆゑに、あとさきにしたるなり○一首のこゝろは、來ぬ人を、まつ事のくるしきものと、今うしろ。此のくるしさに思へば、人まつらん里をば、絶えずとふべき事となり○かれずは、離れずなり

(四十八段)むかし男、いもうどのをかしげなるが、琴ひきけるを見をりて

(語釋) をかしげなるとは艶にうつくしきをいふ此の外の語釋聞てえたるが如し

うらわかみねよげに見ゆる若草を

人のむすばんことをしぞおもふ

(語釋) うらわかみは、未若^{ミカ}みなり○ねよげは、寢よげなり○若草は、愛つらしくなつかしきもの

故に、夫婦にもたとへたれば、妹弟にもいへるなり。又わか草なれば、行末に、人のむすばんことを思ふとなり○ことをしぞおもふのしは、例の助辭なり。一首のころは、かくばかり、共寢^{トモヨミ}しよげさに見ゆる若人^{ワカサド}を、人のものとなさんが、惜しく思ふとなり○すべて、この歌は、未^ミといひ、根といひ、結ぶといふも、草の縁語にて、したてたるなり

かへし

初草のなごめづらしきことのはず

うらなくものををもひけるかな

(語釋) 初草は、若草をいふ。初草のやうにといふ意にて、めづらしといふ詞へかゝれり○うらな

くは、心の裏につゝむ事なきをいふ。此の歌の意、諸説、おほかたとき得ず。新釋のみよろし。其の大意にいはいはく、此の歌の意を、たゞ言にていはいは、いかなれば、かくめづらしき事をのたまふ。かゝて、兄弟の事ゆゑ、うらなくめづらしきこと、思ひまわらすまじきものを、さてくくやしといふ意にて、かなは、くやみて、嘆息

ば、うらなくは思ひまわらすまじきものを、さてくくやしといふ意にて、かなは、くやみて、嘆息したるなり。けるかなの例、皆、さやうにありける云々と、此の説にて、聞てえたり

(四十九段)むかし男あけけり。うらむる人をうらみて

(語釋) うらむる人とは、女をさせり。女の方より、あたなりと怨みたるを、そこであたなれどうらみて、よみてやれるよしなり

鳥の子を十づゝとをはかさぬとも

いかゞたのまん人のころを

(語釋) 鳥の子は、鶏の卵をいふ○十づゝとをとは、百なり○一首の意は、雞卵を百かさぬるは、至難のわざなり。しかし、この至難の事は、重ぬる術ありとも、あたにかはりやすき人の心を、とりとめん事は、術も力も及はじとなり

といへりければ

朝つゆはきえのこりてもありぬべし

たれか此のよをたのみはつべき

(語釋) 此のよとは、男女の中をいふ言なり。こゝは、夫婦となりて、未ながく、頼みとする事ができ得べきか、否、たのむ事を得ずとの意なり○一首の意は、朝露は、はかなく消ゆるものなり。しかし、千萬のうちに一つは、消えのこる事もあらん。然るに、世間のあたにかはりやすき男の心は、千

萬の中に一つも、かはらぬといふはなし。君も今は「いかゞたのまん」などのたまへど、程なくかはるべければ、頼みにしたりとも、末とげぬ事ならんと、歎きたる意を含めたるなり

また男

吹く風にこそこのさくらはちらずとも

あなたのみがた人のころは

(語釋) こゝは、去年なり○前の歌に、朝つゆのたどひをとりて、巧にいへれば、此の歌も、深くたくめるよしなり。一首の意は、去年の櫻の花の、吹く風に散らすある事は、もとよりあるまじきことなれど、もし、それはありとも、あゝ、たのみがたし。人の心はといへるなり○この歌は、六帖に、在原のとき春のうたに「ちらずして去年のさくらはありつとも 人のころをいかゞたのまん」とあるを、少しなほして、こゝに合はせたるなり

又女かへし

ゆく水に數かくよりもはかなきは

おもはぬ人をおもふなりけり

(語釋) 數かくとは、一二三の數の文字を書くをいふ○はかなき、こゝは、今言に、ヤクニタノミなどいはんが如し○一首の意は、流るゝ水に、數書くは、忽、きえて、跡のまらねば、まこと、はかなき事なれど、いふより、思はぬ人をおもふなりけり

となり○このうた、古今集には、戀に入れたり

あだくらへかたみにまける男をんなの、しのびありきしけることなるべし

(語釋) あだくらへは、互ひにまけじと、あだなるふるまひをなすことなり○かく互に、たのみ難きよしの歌なとよみかはすは、男女のあだくらへして、しのびありきしける事なるべしと、記者の詞なり

(五十段)むかし男、人のぜんさいに、菊うゑけるに

(語釋) ぜんさいは、前栽にて、庭園をいふ

うゑしうゑば秋なき時やさかざらん

花こうちらめ根さへかれめや

(語釋) うゑしうゑばのしは、助辭にて、植ゑ植ゑばなり。戀ひ戀ひて、ぬれくゝてなぞいふと同じく、重ねていふは、其の事をおもくいふにて、こゝは、よく植ゑばなぞいふほどの意なり○一首のころは、能く植ゑたれば、秋のなき時はなければ、年々に、必、さくべし。花は散るべけれど、根までは、枯れじとなり○根さへは、根ともにいふ義なり

(五十一段)むかし男ありけり。人のもとより、かざりちまきをおこせたりける返事に

(語釋) かざりちまきは、カザリチマキ飾綴なり。チマキは、和名抄に、以菰葉裹米、以灰汁煮之、令爛熟也。

五月五日咲之とあるこれなり。昔もちまきは、こもにてつゝむ事なれど、こゝなるは、あやめにて包みたりきと見ゆ。唐土にては、あしの葉、竹の葉にて、つゝみ、我が國にても、今は竹の葉にてもつゝむなれば、中昔の頃、あやめにても包むことありしなるべし。されば、歌にもあやめかりと詠めるなり。又飾といふは、五色の糸してくゝり巻きたれば、いへるなるべし

あやめかり君はぬまにぞまどひける

われは野に出でゝかるぞわびしき

(語釋) 君には粽を賜はんとて、あやめかりにこゝかしこの沼にまどひ給ひ、我はまた、雉子をまゐらせんとて、野に出でゝ獵したりと、君が勞を謝し、また、我が勞をも擧げたるなり。古人は、質樸なれば、我が勞せる事をもあげて、人にいひれくるがつねなり

とて、きしをなんやりける

(語釋) 聞こえたるが如し

(五十二段)むかし、男、あひがたき女にあひて、ものがたりするほどに、どりの鳴きければ

(語釋) あひがたき女とは、何か事情ありて、たやすくは、逢ひがたかりし女なり。こゝろは、鶏をい

いかでかく鳥のなぐらん人なれば

おもふこゝろはまだ夜ふかきに

(語釋) 人しれずは、人に知られずの畧語にて、歌詞なり。○一首の意は、何として、かく鳥は鳴くことならん。まだ曉には至らじ。心のうちには、まだ夜ふかしと思ふことなり

(五十三段)むかし、男、つれなかりける女に、いひやりける

(語釋) つれなしは、強顔などの字をあつ、なつかしからぬにて、よそくしく、氣つよくソシヲヲ顔するさまをいふ

行きやらぬ夢路をたどるたもとには

天つ空なるつゆやおくらん

(語釋) 行きやらぬは、行くことの出来ぬなり。○一首の意は、つれなき女なれば、現に行きてあふべきよしもなし。せめて夢になりとあはんとて、こなたの心はゆかんとすれども、女の方にてつれなければ、たましひ通はず、女のもとへ行きやらすして、終夜ゆめをたどりて、目さめて見れば、涙どもればえぬほど、袂のぬれたるは、夢路には、空の露やおくらんとかこてゐるなり

(五十四段)むかし、男、おもひかけたる女に、えうまじうなりての世に

(語釋) えうまじうなりての世とは、女を我が物とせんと、彼是、周旋したれども、え得られぬやうになりたる時にの意なり

おもはずはありもすらめど言のはの

をりふしでとれたのまるゝかな

(語釋) この歌も、諸説とき得じ。新釋よろし。其の説にいはく、拾穂、臆斷などに、古今集なる、よしの川よしや人こそつうからめ、はやくいひてしことは念れじ」といふ歌と同じ心なりとて、言のはとは、はやくたのめおきたる、言のはのやうにいひ、古意にも、其の意にまかれたれど、うはあやまりなり。さやうの意にはあらず。一首の意、まことには、女の心におもはずあらめど、たまさかに、通ふ文のことば、よそながらあひ見る時の言の葉などの、こなたを思ふやうにきこゆれば、其のをりおしでとに、たのみにする事かな、たのみてもかひなし。得らるゝ女にはあらぬものをと、うちなげきたる意を、かなのてにはにこめたり。かくとかざれば、はしの詞にもあはず。言の葉のをりおしとにと、つゞきたる詞の意にも、更に叶はざるなりと、此の説にて、聞こえたり

(五十五段)むかし、男、ふして思ひ、おきておもひ、おもひあまりて

(語釋) ふして思ひ、おきておもひは、思のいと切なるさまなり。つゞきの歌は、たゞ、涙のおかきよしのみをいへれば、この歌のあはれをおかめんとて、このはし詞を加へたるものなるべし

我が袖は草のいほりにあらねども

くるればつゆのやどりなりけり

(語釋) この歌は、大やう聞こえたるが如く、草の庵は、露しげきものなるが、我が袖は、うの草のいほりにあらねど、暮るれば、戀のおもひまじりて、涙のかわく時なく、いはゆるつゆのやどりなりけり

五十六段)むかし、人あれぬものおもひする男、つれなき人のもとに

(語釋) 人しれぬものおもひは、人にかくいひ出づることの出来ぬ物おもひなり。こゝは、身分に叶はぬ、高貴の人を戀ひしたひたるよしなり。そのゆゑは、歌に我から身をも、くだきつるかなとありて、及ばぬ戀なる事を知らるゝなり

こひわびぬあまのかるもにやどるてふ

われから身をもくだきつるかな

(語釋) こひわびは、及ばぬ戀にて、せんかたつきたるよしなり。われからは、舊の刈藁に、やどる虫なり。されば、二三の句は、われからをいはんための序なり。○やどるてふは、やどるといふの約言なり。○一首の意は、身分をも顧みず、及ばぬ戀にせん方つきて、心はもとより、身をも碎きつるよ。さてく、かひなき事に、からきめ見るこゝとよ、歎息せるなり。○此の歌は、古今集、題しらず、典侍藤原直子のうたに「あまのかる藁にすむ虫のわれからと、ねをころなかめ世をばうらみじ」とあるを少しかへて、はし詞をも作りたるなるべし

(五十七段)むかし、心つきなき色このみなる男、長岡といふところに家づくりてをりけり

(語釋) 心つきなき色このみとは、似合はしからず、相應せぬさまの好色家をいふ。されば、隣の女どもも、いみじきすきものゝしわざやなど、あざけりたるよしなり。○長岡は、山城の國、乙訓郡にあ

りて、桓武天皇の三年より、十三年まで、都なりし地なり

ろこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもありけり、

(語釋) 宮ばらは、宮原にて、殿ばらなといふに同じく、宮たちといはんが如し。こゝは、宮たちの二三人も、一所に住み給へる宮殿のさまなり。舊説に、宮腹にて、后、また、皇女の腹に生れ給へる御子をいふといへるは、わろし○こともなきは、難なきの義にて、今言に、大抵よろしいなといはんが如し。すぐれたるをいふにはあらず○女どもありけりは、宮づかへして、ありけるなり。さて一人ならぬことは、女どもとあるにて知るべし

おなかなりければ、田からすとて、此の男、見をりけるに、

(語釋) 田舎の事なれば、めしつかふ奴僕等に、田をからすとて、此の男、門にいで、見まはり、萬事指揮し居けるになり

いみじのすきものゝ志はざやとて、あつまりいりきければ

(語釋) 此の處も、新釋の説よろし。其の要にいはいく、すぐれたる好色の人のしわざよとたはふれいひて、あつまり入り来るなり。いみじとは、ものゝ勝れたるをいふ詞なり。すかもものは、好色の人をいふ。やはよといふに同じ。さて此の男は、色このむといふきこえあるに、田からすとて、出でゝとかく行ふは、艶だち色好む人のすきわざならねば、女どものわざを戯れて、いみじのすきものゝしわざよといへるなり。とるを、捨穂、臍斷なるに、皆、いみじの云々といふ詞を、男の家居のおとこをいふは、しわざといひては、しわざ。又、家居をいふは、男のしわざ。かくに

かくるゝゆゑもなしと、此の説、まことに、いはれたり

此の男、にげて、おくにかくれにければ、女

(語釋) 門に出で、いろく指揮しわたるに、いみじのすきものゝしわざやと、女にいはれたれば、耻ぢて、奥へ逃げ隠れたるなり

あれにけりあはれいく世のやどなれや

すみけん人のおどつれもせぬ

(語釋) やどなれやは、宿なればにやの義なり○一首の意は、荒にけり。ア、幾世經たる宿なればにや、昔、すみけん人の、絶えて訪ひおどづれもせぬならん。ろれゆゑに、かくは荒れたるならんとの意なり。さて實は、男のかくれて見えねば、人すまで、年經しやとの荒れたるよしに、戯れていへるなり

といひて、あつまり來ねてありければ、此の男

(語釋) 一旦は、男はちて隠れたれど、女ども入り來て、戯れる歌よみかけて、ろくに居れば、男もさすがに、まけじ心れこりて、戯れかへしたるよしなり。「來ねてありければ」とあるに、心をつけて、此の關係をよく心得べし

むぐら生ひてあれたるやどのうれたきは

かりにもれにのすたくなりけり

(語釋) むぐらは、葎の字を訓ず。生ひ茂る草なり○うれたきは、日本紀に、慨哉の字を訓める意にて、憂はしきをいふ詞○すだくは、多く集まるをいふ。水鳥のすだくなといふも、同じ語なり○あれにけりと、女のよめるを承けて、御歌のどほり、むぐら生ひ茂りて、荒れはてたるやどのうれはしきは、かりうめにも、おろろしき鬼の多集なりといひて、彼の女どもの群り來たるを、鬼にたとへて惡み戯れたるなり

となんいひ出だしたりける。此の女ども、ほひろはんといひければ

(語釋) ほひろはん云々は、はじめ男が門に出で、とかく指揮しをりける事なれば、已等も穂ひろけん。伴ひて田へ出でたち給へど、再、たはふれかけたるなり

うちわびてれちほひろふときかませば

われも田づらにゆかましものを

(語釋) 此の歌の意は、穂ひろはんといひて、いざなひ給へども、戯れのあそびぐさにし給ふ事なれば、もろどもに、え出です。もし、世にわびて、落穂ひろひ給ふときくならば、我も田づらに行きて、拾ひてまゐらせんものをと、戯れていへるなりと、新釋にいへるが如し

(五十八段)むかし男、京をいかと思ひけん。ひんがし山にすまんどおもひいりて
とみわびぬ今はかぎりの山里に

身をかくす山をよみて

意は、おほかた聞えたる如く、憂事ありて、都に住む事がいやになりたれば、かれ身を終は、山里に思ひ居りたる事なれば、其のかぎりの山里に隠遁して、人に知られぬ宿求めてんとなり。其の故は、人に知られぬ宿ならば、さまで、憂事もあるまじければなり

かくて、ものいたくやみて、しにいりたりければ、れもてに水をゝぎなどして、いきいで

(語釋) ものいたくやみては、何疾といふ事なく、重くわづらへるよしなり。憂事に、あまり心勞せるより、氣鬱病など、引きおこせるさまなり○しにいはるは、痛く胸にさしてみなどして、息の絶えたるよしなり○おもてに水ろゝきは、面に水灑ぎにて、絶息せるものを驚かし醒めしめんがためには、今もする事なり

わがうへに露うおくなるあまの河

とわたる船のかいのしづくか

(語釋) とわたるは、門渡^{トワダ}にて、あまの河の湊をいふ○あまの河は、天上の川なり。銀河などいふこれなり。○かいは、楫にて、水をはねて、船をやる具なり○一首の意は、我が一度死にたるに、顔の上における露にて、蘇生せり。されば、此の露は、この世のものにはよもあらじ。天上のあまの川の門わたる舟の車にやあらんとれもへるまゝをよみたるなり
といひてず、いきいでたりける

(語釋) さきに、「しき出で」といひて、又、こゝにかくいふは、重複せるやうなれど、重ねていひて、

詞をさむる文法、古文にはまゝある事なり

(五十九段)むかし、男ありけり。宮づかへいそがはしく、心もまめならざりければ、いへどうじ、まめに思はんといふ人につきて、ひとの國へいにけり。

(語釋) まめは、眞實の意なる事、前に委しくいへり○いへどうじは、家刀主にて、一家の主婦なる事も前にいへり○男、宮仕に多忙にて、おのづから、女の許へ疎遠に、殊にそれは眞實の志も見えざりき。然るに、已はかやうに疎遠にはせじ。眞實にれもふといふ人のありて、それが、田舎へ行くに、つきてはきけるなり

此の男、うさの使にて、いきけるに。

(語釋) うさは、豊前の國、宇佐八幡宮をいふ。此の官は、古來、おもくあがめ給ひしかば、御代のはじめには、必、勅使を立て給ふ例なりき。さらでも、事ある時には、勅使をつかはさるゝなりある國の志ぞうの官人の、めにてなんあるときゝて。

(語釋) しううは、祇承の字音を、なだらかに訓めるなり。勅使を祇承する官人にて、今の世に、馳走役人などいはんが如し。さてこれは、國司をはじめて、郡司、驛長などまでをいふべし。此の男のもとの妻、今は此の祇承の中の官人の妻にてありと、男の聞き傳へてなり

女あるじにかはらけとらせよ。さらすば、のまじといひければ、かはらけとりて出だしたりけるに、さかななかりける。たしななかりて

りて、飲みてさよの意なり○さかなのさかは、酒なり。なは榮にまれ、魚にまれ、酒のあはせにするものを廣くいふ詞なり。こゝは、菓子すなはち橘を酒肴に出だしたりけるなり。されば、此の橘を取りて、女に與ふとて、うれによせたる歌をよみたるよしなり

さつきまつはな橘の香をかげば

むかしの人の袖の香する

(語釋) さつきまつは、五月待なり、橘は五月をまちて、花さくものなればいへり○はな橘の香をかげばは、今とりて與ふるは子なれども、子によりて、花によせていへるなり○むかしの人とは、昔、わが親しみし人をいふ○一首の意は、橘の花の香をかげば、昔あひ見し人の袖の、香に能く似たれば、うれにつけて、むかしの人を戀ひしく思ふとなり○此の歌は、古今集に、四月の郭公と、五月の郭公との間に入れられて、何となき昔人の香を思ひ得たる歌なるを、こゝには、右の詞を作りて、其のさかなにせる橘によりて、もとの妻によみて與へたる事になせるなり

といひけるに、思ひ出で、尼になりて、山に入りける

(語釋) 評釋にいはく、といひけるに、思ひ出で、とは、昔、わすれぬ意なる夫の歌を聞きて、女が心みじかくて、別かれし事をくやしうも、恥づかしうも思ひ出でたるなり。しか見ざれば、尼になりて、といふ詞につゝかず。古意に、此の使、もとの夫ならんとは、思ひもよらざりけるに、かくよみたるを聞きて、ふと驚きはちて、尼になれるなりと、とかれたるは、いかゞ。たゞひ、歌よむをきかずとも、夫とせし人を見まがふやうなく、歌をきいたりとて、いかでか、ふとおどろく事の

あらん云々といへるは、いとよし

(六十段)むかし男、つくしまでいきたりけるに、これはいろこのむなり。すきものぞと、すだれのうちなる人の、いひけるを聞きて

(語釋) つくしは、筑紫にて、九州の古稱なり○これは云々とは、此の人、色好むなりといひて、又くりかへして、好色家などいへるなり○男の通るを、簾中に居る女の、此の男を見知りたるが、他の知らぬ女にいひ聞かせたるよしなり。それを男が聞きて、歌よみかくるさまなり

そめ川をわたらん人のいかでかは

いろになるてふことなかるべき

(語釋) いかでかはのは、軽く添へたる言なり。いかでかの意に見るべし○てふは、といふを約束たる詞歌なること、前にいへり○そめ川は、筑紫にある川なり○一首の意は、此の筑紫に来て、染川を渡りたらんに、いかで、色に出でざる事を得んやといひて、ては所がらなりと、却りて、其の人をうちかへしたるなり○此の歌は、拾遺集に、題しらず。業平朝臣としてあげたり。されど、拾遺集は、すべて、おぼつかなき事多ければ、或は此の物語より、業平朝臣としたらんも知りがたし

女かへし

名にしおはゞあだにうあるべきたはれ嶋

浪のぬれきぬあるとふなり

(語釋)

ものなれば、島の縁語にいへるのみ○此の歌、諸説異なり。うの中、古意を、語釋との説、おほかたよろし。其の大意にいはいく、染川をわたる故に、色になりたりとのたまへど、たとへば、たはれ島も、たはれといふ名におはし、あだにあるべき島なれども、更にあだなる事なし。されば、たはれといふは、なき名なりと人もいふ事なり。染川も其道理にて、ものを染めて、色になす事はなし。染といふは、なき名なるを、此の川を渡りたるゆゑに、色になりたりとのたまふは違へり。もとより、色なる君なりと、打ちかへしていへるなり云々

(六十一段)むかし男の年ごろおとづれざりける、女、心かしくやあらざりけん。はかなき人のことにつきて、ひとの國なりける人につかはれて、もと見し人のまへに出で来て、ものくはせなどしけり。

(語釋) 年ごろおとづれざりけるとは、男の心かはりて、音信せざりしにはあらで、なにか事情ありて、疎遠に打ち過ぎたりしなり。其のゆゑは、男、いにしへのにほひはいづらといふ歌よみたるに、女は答もせで、なきたるにて知るべし○はかなき人のことにつきてとは、かく疎遠なる男を、あてにして居らんよりは、田舎へ行きなば、またよき事もあるべしなど云ひて、人の誘ひたるなり。さて其の誘ふ人のいふ事の、たしかならず、浮きたる事なれば、はかなきとはいへるなり○ひとの國とは、他國の意なり。こゝは、都よりいふなれば田舎を指せるなり○もと見し人とは、彼の事情ありて、年ごろ、音信せざりし男をいふ○ものくはせなどとは、此の女、人の家に使はるゝ下婢なる故に、客人の前に出でゝ、給仕したるなり

ながき髪を、きぬの袋に入れて、遠山すりの長きあをゝどきたりける。

(語釋) ながき髪を云々、背に垂れたる髪を袋に入るゝは、衣服をよこさじとてするわざにて、賤しき女のさまなり○あをを、襖にて、あはせの衣がつねなれど、綿を入るゝもあり。衣服の上にはある物にて、今の世の羽織の如きものなり。さて襖は、うちくには、身分よき人も着るとあれど、人の前などに用ふるは、下賤の者に限り。殊にこゝは、下婢の事なれば、布にて作れる襖なりしなるべし。又、襖は、大抵、男の着るものなるに、便利なれば、こゝは女なれども、着たりしなり。またたけ長きを着たるも、女なればなるべし○遠山すりとは、草の汁などにて、遠山のかたをすれるなり。我が國にては、古來、草摺の衣を賞せる風俗なりき

よさり、このありつる人たまへど、あるじにいひければ、たてせたりけり。男われをば、しらずやとて

(語釋) よさりは、夕さりなどいふと同じく、夜といふに異ならず○ありつる人たまへとは、男が女の主人に向ひて、是の下女を興へ給へといひしなり○われをば知らずやとは、我をば、見惚れたるか。なにがしなりと、男が下女に問ひかけたるなり

いにしへのにほひはいつらさくら花

ちれるがごとくもなりにけるかな

(語釋) いづらは、いづれと探す意を含める詞なり○ことは、如くの意なり○一首の意は、昔のにはひやかに、美麗なりし容貌は、何處へ消え失せたるや。散れる櫻花のにはほひ無きか如くなりけり

かく衰へしめたるは、わが、年比、昔情せざりしゆゑに、つまらぬ人にをゝのかされ、今は人に移し使はるゝ身とまをなりける事よと、悲しく思ふこゝろをこめたるなり。かく解かざれば、歌の意をかからず。けるかなといふ詞に、心をつけて、此の意を悟るべし

といふを、いどばづかしとおもひて、いらへもせで、おたるを、などいらへもせぬといへば、なみだのこぼるゝに、目も見えず、ものもいはれずといふ。又、男

(語釋) いらへは、答なり。今の世に、返事といふに同じ。耻づかしくて、答もせざりしを、何ゆゑと、又、問はれて、涙のこぼるゝに、目も見えず、ものも云はれずと、答へたるよしなりこれやこのわれにあふみをのがれつゝ

年月ふれどよさりがほなる

(語釋) これやこのは、物二つにわたる時の詞なること、既に前に委しくいへり○まさりがほなるとは、つれなさのまさりがほなるの意にて、答せぬを、かくいひなしたるなり○一首の意は、これが彼のわれを厭いて、逢身アハミをのがれつゝ、年月おれど、思ひなほらず、つれなさのまさりがほなる人かとの意なり○これやこのといふは、終の句にいひ殘したる人かといふ詞へかゝれり。いひのこしたる詞へかけんとて、なるとは結びたるなり

といひて、きぬぬぎてとらせけれど、すてゝにげにけり。いづちいぬらんども知らず

(語釋) きぬは、衣服をいふ○とらせは、取らせにて、與ふるをいふ○いづち云々は、何處ともな

く、逃げ出で、ゆくへしれずなりぬとなり。いたく、恥ぢたるさま見るやうなり

(六十二段)むかし、世こころあるおうな、いかで、このなさけあらん男にあひ見てしがなとれもへど、いひ出でんにもたよりなければ、まことならぬゆめがたりを、むすこ三人をよびあつめて、かたりけり。

(語釋) 世こころは、色好む心をいふ。○おうなは、嬖にて、老女をいふ、若き女と混ぶべからず。老女にて、猶、色このみなりけるなり。○このなさけあらん男とは、下の在五中將を指せるなり。このは、今の彼のといふに同じ。○あひ見てしがなは、逢ひ見たしとなり。がなは、願望の意なり。○いひいでんにもたよりなければとは、老女なれば、在五中將を戀ひ慕ふよしを言ひ出でんも、似つかはしからず、便なきなり。されば、夢語にして、よろながら、三人の子に語り聞かせ、暗によく夢ときせしめんの意にて、話せるよしなり

ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、よき御男ず、いでこんどあはせるに、此のおうな、けしきいとよし。

(語釋) ふたりの子は、太郎と、二郎となり。○三郎は、第三の子なり。○よき御男ずいでこんどあはせたるは、母の暗にさやうなる夢をつくりて、話せる下こころを知りて、解き合はせたるなり。抑、夢合といふことは、昔よりありて、そのわざは、夢を解く人の言によりて、凶夢も吉夢となり。吉夢も凶夢となる事ありといふ。故に今こころの三郎が母のを吉夢に解きなしたれば、母はさてこそ、我心に叶ひたれと思ひて、氣色、甚よしとなり

こど人は、いとなさけなし。いかで、この在五中將にあはせてしがなとれもあつてころあり。

(語釋) こど人は、異人にて、在五中將ならぬ人をいふ。○なさけなしは、はじめに、在五中將は、情あかき人なるよしいへれば、在五中將にくらべては、異人は情なしとなり

狩りしありきける道に、いきあひにけり。

(語釋) 狩りしありきしは、在五中將なり

馬の口をとりて、かうくなんおもふといひければ、あはれがりて、いきてねにけり。

(語釋) 馬の口をとりとは、中將の乗りたる馬の口を、三郎がとりとめてなり。さて馬の口をみづから取りて云々といふは、中將の氣色をとる意を含めたる文なり。○かうくなん云々、かうくは、今言に、カヤウカヤウなどいふに同じ。さてこころは、異人は情なしと、三郎が思ふよしを、中將にひたりとも見らるべく、又、かくかくなん、我が母の思ふと、中將に告げたりとも解せらるべし。古説にも、兩様あり。いづれにてもありぬべし。○あはれがりて云々、例のなさけあかしわざの一端を知らせたるなり

さてのち、男、見えざりければ、おうな、男の家にいきて、かいまみけるを、男、ほのかに見て

ももとせに一とせたらぬつくもがみ

我をこふらしむもかけに見ゆ

(語釋) もゝとせに一とせたらぬは、年老いたるさまを、甚しくいふ意なり○つくもがみとは、髪
のつくもの花に似て、短きをいふ。つくもは、和名抄に、辨色立成云、江浦草、和名、豆久毛とあるこ
れなるべし。江浦草は、ふとぬといふものにて、藟の類なり。此の草の花、老人の頭の髪みじかきに
似たれば、此の江浦草の花に似たる髪を、つくも髪といふとゞ○一首の意は、老女の甚しく年老い
て、短き髪はその儂の見ゆるは、我を戀ひしたふ様子なるが、あはれなりとなり○下の句は、おもか
げに見ゆ、我をこふらして、顛倒して意をとるべし。又、此のうたは、老女の來たるを見て、しらぬよ
しによみしなり○もゝとせに一とせ足らぬといひて、いたく年の老いたるをいひ、又、つくもがみ
といひて、ろの老髪を知らせたり、これはわるくいふにはあらで、憐みおもふ方に心得べきなり。
又、儂に見ゆるは、心の通ひくれば、夢に見ゆる如く、戀ひしたふがゆゑに、心の通ひ來て、儂に見ゆ
るならんどのこゝろなり、能く味ひてよとるべし

るす。はしりゝとひて、家にきてうちふせり。

(語釋) 我を戀ふらしおもかげに見ゆといふ、なづけある歌をうたひて、すぐさま、馬に鞍をかけ、出づる様子なれば、老女は、必、わか許に行き給ふならんとて、つねの道をよくに暇なく、荊棘の生ひしげれる野路をふみわけて、我を隠れて、急ぎかへりぬとなり

男、このおうなのせしやうに、このびてたてりて見れば、おうな、うちなげきて、ぬとて

（語釋）男も姫のかいまみたるやうに、姫の家に來りて、しのびて見ればの意なり○ぬそては、寢
どてなり

とむしろに衣かたしきこよひもや

變ひしき人にあはであがねん

(語釋) さむしろは、延喜式に、廣席、狹席など見えて、狹き席をいふ○衣かたしきは、獨ねのことなる事、前にいへり○この歌は、古今集に、上の句は、同じくて、下の句は、我をまつらんうちのはしびめとあるを、例のつくりかへて、こゝに入れたるなり。實に、こゝには能く叶ひて、あはれなる歌となれり○一首の意は、狹き筵に、夜の衣をかたしきて、今宵も戀ひしき人にあはで、まろねするかどうかとうち歎きたるなり

どよみけるを、男あはれと思ひて、その夜はねにけり。

(語釋) 右の歌を、女のうたひけるを、戸外に立てる男の聞きて、あはれさに堪へず。内に入りて、いねたりきとなり

世の中のれいとして、思ひおもはぬ人あるを、此の人は、そのけぢめ見せぬ心な
んありける

(語釋) れいは、例の義なれど、こゝは、ならはしなどいはんが如し。思ひおもはぬ云々、世の中の男は、れほかた深く思をかくると、冷淡なるとあれど、此の人は、さるけぢめなく、まことに、物のあはれを知りける人よとなり。たとへば、若くうつくしき女を愛して、衰へたるを退ぐるは、なべてのならはしなれど、此の人は、さる偏頗の事なかりきとなり。これ物のあはれを知るといふことにして、すべての物語書の骨體なり。殊にこの物語は、物のあはれを知らせんとしくみたるものなれば、かゝる人を、最、人からよきやうに記せり。その心して、全篇の意を味あべし。〇けぢめとは、差別また、區別などの字の意なり

(六十三段) むかし、男女、みそかにかたらうわざもせざりければ、いづくなりけん、あやしさによめる

(語釋) この條、いたく省畧せる文にて、うち見たる處にては、意をとりがたし。諸説あれども、評釋の説いと詳らかなり。其の要にいはいはく、これは、たかき宮づかへする女の、男をこゝろみんとて、名をかくして、文をこせるに例は、いひより、あやしむる心なり。いづくなりけん、あやしむる心なり。

名をかくせるゆゑに、いづくの肩よりなりけん、知られねば、こそのさあやしさに、歌よみてやるなり。さるは、文のつかひはする人あらめど、女のかたより、口がためして、いづこもいはずなるこそ。さて、昔、男女の文かくるは、けさう心ありての事なれども、今の世のさなとは異にして、花、紅葉につけて、あはれなる歌ども書きてたくりて、其の返事のやうを見てゝゝるむる事どもありき。されば、文をこせたりとて、頼むべきにあらず。こゝもそれなり。此の段は、いたく事すくなく、畧きて書ける文なれば、心をやりて見ざれば、とき得がたし。ふるき註ども、わろし云々。又、いはく、臆斷に、みうかにかたらあわざもせねば、女の常にすむ所、いづくにかありけんも知らで、あやしみて詠みてやるなりといへり。これは、大かた、本文のまゝにいひて、更にとける所なく、いと拙し。古意に、こはもといひかはし、女の、宮の内などにあるが、其のあり所もいひ知らせねば、且、女の心をもあやしむなりといはれたり。もし此の説の如くならば、いづくなるらんとあるべきなり。けんといへるに叶はず。師のいはれたるは、けんといふ詞いかゞ。いづくなるらんとあるべきにや。もし、又、けんを助けていはく、物語の地の詞として、いづくにての事なりけんを見るべしといはれたり。けんをいかゞといはれしは、古意の説によられたるゆゑなり。又、地の詞としてといはれしも、いかゞ。いづくなりけんあやしむにとつきて、男のおもふ意をいへる詞なるをや

吹く風に我が身をなさは玉すだれ

ひまもとめつゝしらふものを

(語釋) 玉すだれとは、簾の美麗なるをいふ。○ひまは、隙なり。すきをいふ。○一首の意は、我が身を形も色もなき、風になさば、玉簾の隙を求めて、宮づかへせる女房の局の中に入りて、文おこせるは、何處のたれといふ事をしるべきに、風に身をなす事かなはねば、心にまかせずと、歎きたるなり。○此の歌は、樂葉の旋頭歌に、いきの緒に、われは思へど、人めおほみ、ころ吹く風にあらば、しばし逢ふべきものを、又、玉だれの、をすのすけきにいりかよひ、こねたらちねの、母がどはさば、風と申さん又、妹がぬる床のあたりに岩くゝる、水にもがもや入りてねなましなどあるによりて、例のつくれるなるべし。

かへし

とりとめぬ風にはありとも玉すだれ

たがゆるさばかひまもとむべき

(語釋) とりとめぬは、手に取りと、めぬをいふ。○一首の意は、たとひ、色も形も見ぬ風になりたまふとも、玉だれの中へは、誰もゆるさねば、隙もとめて、入るやうの事は、得したまはし。ならぬ事なりといへるなり。

(六十四段)むかし、みかどの時めきつかはせたまふ女の、いろゆるされたるありけり。大みやす所とて、いますかりける、御いとこなりけり。

(語釋)

時めきつかはせは、女下等と傳ふ。伊勢物語の御いとこは、みかどの御いとこなり。

○いろゆるされとは、禁色をゆるさるるに、これも時めき、寵愛したまひしを、知らせたるなり。さて禁色には、染色と、織物と、二種ありて、其位にあらざれば、着ることを得ざるなり。延喜式

に、凡、諸禁色者、總雖下衣不聽服用とあるは染色なり。又、同式に、有禁禁色者邪(謂綾羅錦綺之類)とあるは、文織物なり。されば、此の二つをゆるさるゝを、色ゆるさるとはいふなり。○大みやす所とて、いますかりけるのいますかりとは、れはしましけりといふに同じ。さて源氏物語などの例を考ふるに、皇子を生み奉れば、皆、みやす所といふ例なれば、こゝは、天皇の御母君ゆゑに、かくいへるなるべし。此の大御息所は、まづは、清和天皇の御母后(明子)を申せるにて、いとこは、高子(後に二條后)の御事なるべし。在原なりける男とは、業平朝臣を思はせたるなり。されど、業平の高子を相知れるは、文德天皇の御時にて、清和天皇の高子を寵し給ふ比は、此の朝臣、四十餘の歳にて、官位共に昇れること、史に見えたれば、此の時のことにはあらず、例の書きひがめたるなりけり。

殿上にさむらひける在業なりける男の、まだいとわかかりけるを、此の女、あひしりたりけり。男、女がたゆるされたりければ、

(語釋)

殿上にさむらひは、つねに、殿上に祇候せるなり。○いとわかかりけるは、すべて、物語にわ

かしといふは、極めて幼稚の時をいふ。こゝも、いまだ、十三四位の時なれば、女方にゆき、することをもゆるされて、ありつとなり。○女がたは、女方の意にて、女の住める局をいふ。○あひしるとは、夫婦のかたらひするをいふ。時代をあらぬさまにかきひがめたることは、前々にもいへるが如し。女のある所にいきて、むかひをりければ、女いとかたはなり。身もほろびなん。か

くなせそといひければ

(語釋) 女の云々は、男が女の居る所に行きて、對坐し居りければなり。をさな心にも慕はしくて、つねに、女の處にありけるなり○いとかたはなりは、甚だ見ぐるしなといはんが如し。かたはは、片羽にて、すべて不具なるをいふこと論なけれど、こゝは、見ぐるしといふほどに解すべし。かく、毎日我が室に来て、對坐し給はんは、いと見ぐるし。さては、わが身はもとより、御身も、共に滅びたまはんとなり○かくなせろは、かくし給ふ勿れなり。女がかく男に注意したりとなり○身もほろびなんは、名はもとより、身もの義に見てもよろしけれど、やはり、我が身はもとより、御身もの義に見る方おたやかなるべし

思ふればこのぶることぞまけにける

あふれしかへばさもあらばあれ

(語釋) 思ふには、行きてあひ見んと思ふをいひ、しのぶは、人目いかゞとしのびかくるゝをいふ○あふれしかへばは、逢ふに換へばなり。しは、例の助辭なり○さもあらばあれは、今言に、サウモアラバアレといふ義にて、たとひ、かくありともよしなといふことなり○一首の意は、相見んと思ふ心と、人目いかゞとしのぶ心と、心中に争ひしが、遂にしのぶ方の心まけて、人目もはゞからずかく毎日來て、對坐し居るなり。かくては、身もほろびんどのたまへど、逢ふにし換へば、よし、身はほろびても、をしからずとなり。かくいひて、前の身もほろびなんといへるに答へたるなり○此の歌は、古今集に「おもふたは思ふることぞまけにける、あふれしかへばさもあらばあれ」といふ歌あり

何をとりへのちやはなにぞはつゆのあたものぞ、あふれしかへばをしからなくにせいのき下の御を少しかへて、例のつくれるなり。ざるを、新古今集に、この歌を、業平朝臣としたるは、いかゞ。歌のさまさへ、本末、少しといふのはぬ心地するを

といひて、さうしにおりたまへば、いとさうしには、人の見るをも、しのばで、のぼりおければ、此の女、思ひわびて、里へゆく。

(語釋) さうしは、曹子にて、此の女の部屋をいふ○おりは下りにて、臺盤所より、曹子に下り給ふなり。一本にをりとあり。さらば、居りなれども、わりとある本。よろしかるべし。臺盤所は、禁秘抄に、臺盤所三間、北間朝餉、方敷黃端疊、東倚子其南女房、簡入袋と見わたる所なり○いとさうしには云々、臺盤所に居るうちは、さすがに、はれの所なれば、少しは、たしなみて、對坐し居たるに、曹子にては、いとどつゝします、人目もはゞからねば、女もせんかたづきて、わが里へゆかれたりとなり。わびての語釋は、前にくはしくいへり

されば、なれのよきことゝおもひて、いきかよひければ、みな、人きゝて、わらひけり。

(語釋) なにのは、今言に、ナンノソレガなどいふに同じ。一本に、なにを、なんに作れり。それもあしからず○よきこととは、女の里へゆくは、よき事を男のおもふなり。女がわが里へゆきしを、かへりてたよりよき事と思ひて、通ひきとなり。此の他は、聞てえたるが如し

つとめて、どのもつかさの見るに、くつはどりて。おくになげいれてのほりぬ。

(語釋) つとめては、朝はやくなり。晨の字などをあつ○どのもづかさは、主殿司にて、毎日、早朝に宮庭の洒掃をつかさどるものをいふ。早朝に、宮庭をめぐりて、下部どもの掃ひ清めたるあとを見分するものなれば、その官人に見つけられたるなり○くつはとりて云々、靴は従者または下部などのとるべきものなるに、みづから、取りたるは、しのびて、昨夜、女の里へゆき、今かへる處にて、さる従者などもなさまなり。又、宿直したる殿上人の靴は、奥に入れたく所なれば、そこへなげ入れたるなり、たゞ、脱きすておきては、宿直したるやうに見ねばなり。かやうにして、殿上にのぼりぬとなり。こゝは、三代實錄に、業平のことをしるして、放縱にして、かゝはらずなどある心ばへにて、かけるなるべし

かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに
ろびぬべしとて、この男、いかにせん、わがかゝる心やめたまへど、佛神にも申し
けれど、いやまさりにのみねほつゝ、なほ、わりなく、こひしうのみねほえけ
れば、

(語釋) かたはにのみは、見やるしくのみなり。女にはなれぬやうにするをいへり○ありわたるとは、日を経るをいふ。女につけまをひてのみ日をわたりきとなり。かくては、女の身も、わが身も罪なはれて、戀もかなはずなり。更、こひには、戀ふも、こゝろも、あらずなり。されば、この戀せむさう

にぞ、神傷に祈願せられ、魂をとりて、止むべくもあらざるなり。のりなくは、ひりて、おな、おな、
などの意なり

おんやうじ、かななぎよびて、戀ひせじといふ、ばらへのぐして、なんいさける。

（語釋） れんやうじは、陰陽師なり。中古には、何事にても、罪、けがれなどのある時は、陰陽師、神巫などにたのみて、祓といふ事をする風俗なりき。こゝも、身のほろぶるまで、戀するは、なにか物のたゝりなごにて、心の惑へるにやとて、祓をするなり○はらへのぐどは、祓の具にて、祓するにつけて、神に供ふる物をいふ。此の供物は、祓の大小によりて、差あり。大祓には、馬、釜、麻、布、人像など、さまざまの具を出だせり。こゝは、私の祓なれば、さる物までは、供へざるべし○いきけるは鴨の川邊に行きけるなり。祓は、水邊にて行ふわざなればなり

はらへけるまゝに、いどかなしき事、かすまざりて、ありしよりけに、こひしく
のみおぼにければ

(語釋) いとかなしきこと云々、被のしるしなきよりなり○ありしよりけにのけは、萬葉に、殊勝、異などの字を訓める意にて、ありしよりも、殊にまさりての意なり。被せぬうちよりも、まさりて戀ひしとなり。けは、清音によむべし

こひせじとみたらと川にせとみろが

神はうけずとなりけるかな

(語釋) みたらし川は、何處にても、社のほとりにある川をいふ詞なり○みろきは、身滌にて、身の

罪けがれを拂ひ清むるをいふ○この歌は、聞てゐたるが如く、戀のやむやうにと、みたらし川に、みろぎせるを、神も受け給はず、いよく戀ひしくなりぬる事よと歎きたるなり○此の歌、古今集に逢はぬ人を戀ふる篇に入りて、よみ人しらずに、下の句、神はうけずもなりにつらしなどあるを、少しかへて、例のつくれるなり

といひてなん、きにける。

(語釋) きにけるは、祓の場所より、家に還り來にけるなり

此のみかどは御かほかたちよくおはしまして、曉には、ほどけの御名を、御心にいれて、御こゑは、いとたふとくて、申し給ふを聞きて、

(語釋) 此のみかどは、暗に清和天皇を指し奉れるなり。三代實錄に、天皇風儀甚美、端嚴如神、性寬明仁恕、溫和慈順、好讀書傳、潛思釋教、鷹犬之遊、漁獵之娛、未嘗留意とあるをもてかけるなるべし○曉には云々は、曉のおこなひとて、佛名を唱ふをいふ。帝の御心に入れて、たふとき御聲にて、佛名を申したまふは、女心には、殊に尊く聞きなせるなるべし。女の佛の道に入りやすきは、むかしも今も同じ風俗なればなり

女はいたうなきけり。かゝる君につかりまつらで、すぐせつたなくかなしき事、この男にほたされてとてなん、なきにける。

(語釋) 女はいたうなきけりと、まづいひて、再、女のなほゆゑよしとくはくはくといへるは、二つの女法なり。かゝるたふとき君につかりまつらで、すぐせつたなくかなしき事、

前世の因縁とはいひながら、此の男にほたされての義なり○ほたされは、祓絆なり。和名抄、調度部、鞍馬の具に、絆、釋名云、絆(和名保木之)半也、物使半行不得、自絆也とあるものにて、馬のほだしよりおこりて、行くべき方へゆかれぬ妨となる物をいふ

かゝるほどに、みかどきこめしつけて、此の男をながしつかはしてければ、彼の女をば、いとこのみやす所まがてさせて、殿のくらにこめて、志をりたまひければ、くらにこもりてなく、

(語釋) ながしは、流罪にせるなり。當時の流罪は、近流(越前、安藝)中流(信濃、伊豫)遠流(伊豆、安房、常陸、隱岐、土佐)の三等ありき。こゝは、都近き越前の國なるべし。前に身もほろび、身もいたづらになりぬべしといふは、こゝをいへるなり○彼の女をば云々、彼の五條の皇太夫ミヤタケノミコ人のれはする宮をも去らしめて、倉にこめて、懲らしめたりとなり○まがては、罷出にて、尊所より賤所へゆくをいふこと、前にいへるが如し。すなはち、殿中を出だして、倉にれしこめたればいふ○しをりは、木の枝などをしをりたまめるが如くして、人をこらしむるをいふ。すなはち、いためくるします事なり。○落澤物語にも「この北の方にこめて、ものなくはせろ、しをりこらしめてよ」など見えたり

あまのかるもにすむむしのわれからど

ねをころななめ世をばうらみし

(語釋) 上の句は序にて、一首のこゝろは、かく倉にこめられて、わびしきめ見るも、皆、わが身のあしき事よりこれるなれば、音を泣くべし。世の人をば、怨みじとなり○あまのかるもにすむ虫の解は、前に委しくいへり○此の歌は、古今集に、典侍直子朝臣の歌とあるを、例のこゝにかり用ひたるなり。まことに、あはれおかし

となきをれば此の男、人の國より夜ひとにきつゝ、笛をいとおもしろくふきて、聲はいどをかしくて、歌をぞあはれに、うたひける。

(語釋) 人の國とは、他國の義なり。此の男は、流罪に處せられて、近くも越前なるべきに、夜ひとに都へ來たること、もとよりあるべからず。かゝる事は、例の虚實うちまじへて。作りなせるなり○歌をぞあはれうたひけるは下に「いたづらに行きてはきぬる」の歌をいふ。ながされたる國より、しのび來て、もし女の聞きもやすると、心いれて、笛ふき、聲れもしろく、歌うたふよしなり、女のうたを前に出だして、男のうたをれくに出だしたる、まことに、おもしろし

かゝれば、此の女、くらにこもりながら、それにうあなるとはきけど、あひ見るべきにもあらでなん

(語釋) 女は、笛の音のれもしろく、うたふ聲のあはれなるを聞きて、此の男なりとは聞き知れど、倉にこめられたる身の、出づべくもあらで、歌よめるよしなり

こりともと思ふらんこゝろかなしけれ

(語釋) さらともは、サカサマともにて、我は流罪に處せられたる、女なり、かく倉にこめられたる、笛ふきたらば、女もきこ知りて、逢ふこともあるべしと、男の思ふこゝろを承けんはいへるなり○あるにもあらぬは、ありてもなきが如き身といふ義なり 一首の意は、おほかた、聞こはたるが如く、毎度いたづらにしのび來たまふが、まことに、悲しき事よ。我はくらにこめられて、あれども無きが如き、身をも知らでとなり

と思ひをり、男は女しあはねば、かくしありきつゝ、うたふ。

(語釋) それもひをりは、女のなり。右の歌は、女の心中に思ひをるのみにて、もとより、倉の中なれば、うたふべきにあらず。故に此は、女の心を知るによしなく、いつまでも、女にあふまではと、うたひありくなり○女しのしは、例の助辭なり○かくしありくとは、前の笛ふきうたうたひて、女に逢ふまではと、ありくをいふ

いたづらにゆきてはきぬるものゆゑに

見まくほしさにいざなはれつゝ

(語釋) 物ゆゑには、ものながらの義なり○つゝは、いひさして、のこる意をふくめたるなり○一首の意は、かひなき事に、ゆきては歸りきぬるものながら、逢ひ見んとおもふこゝろに誘はれつゝ、なほ、度々ゆく事よとなり○この歌は、古今集に見えたるうたなるを、例のよきほどのところに、用ひなせるなり

「水尾の御時なるべし。大みやす所は、染殿の皇后なり。五條のきさきども」

(語釋) 此の一段のさま、水尾(清和)帝の高子を寵し給ひし時のさまにかきしかば、「水尾の御時なるべし」といひ、且、うの頃に、大夫人と聞ゆるは、御母染殿の後なれば、染殿の皇后なりとかけり、されど、寔に高子のいとこと申すは、文德天皇の御母、五條后なれば、いと子といふによりて、五條の後といふ説もありとて、後人の註せるが、本文となれるなるべし。さて業平朝臣と、高子と、相知りたるは、文德天皇の御時なるべし。いかにとなれば、業平は、仁明天皇の御時、正六位上にて。文德實錄には、一所も見えず。清和天皇の貞觀四年に、正六位下より、從五位下に轉じて、右近衛權少將となり。同五年、左兵衛佐と見えてより、官位、いよく、昇進せり。然れば、此の文の如きこと、清和天皇の御時に至りては、あらざりける證にて、文德天皇の御世にありし罪なりしを知るべし。さて染殿后も、貞觀六年に、皇太后となりたまひ、高子も、同八年に女御となりぬ。然るを、大みやす所といふことも、例の物語とはいひながら、實をたづぬれば、田村天皇(文德)の御時の事にて、田村の御母后、五條后のまだ大みやす所と申せる時の事とおもひ定めて後、この物がたりの時代をも、人をも書きまざらしたるを知るべしと、古意にいへり

(六十五段)むかし男、津の國にゐる所ありけるに、あに弟、どもだちなどひきおて、なにはのかたにいきけり。なぎさを見れば、船どものあるを見て

(語釋) する所とは、領地の義なること、前に委しくいへり。攝津の國に、領所あるによりて、兄弟朋友うちつれて行きととなり。こゝは、難波の浦へ、眺望にゆきたるなるべし。○舟どもとは、まぐの舟あるといふ

なれば、つをけふしうみつの浦とに
これや此の世をうみわたるふね

(語釋) みつの浦は、三津の浦なり。故に「こゝに」といへり。三津を數の三つに取りなせるなり。三津浦は、日本紀、齋明天皇の卷に、發自難波三津之浦とある所なり。又、三つに見るをかけてはいへるなり。○一首の意は、難波津を、今日見るに、三つの浦ごとに、舟どもかずくあり。これや、此の世をわたるありさまならん。こゝの海わたる舟はといふ意なり。まことに、波間こゝ舟は、世をわたるにたどふべきものなればなり。○うみをわたるを、古人の説に、世を倦みといふにかけたりといふ説もあれど、さまで、深く見るにも及ばざるべし。たゞ、海渡るの義にてあるべし

これをあはれがりて、人々歸りにけり

(語釋) この歌を、人々めで、歸りにきとなり

(六十六段)むかし男、せうじうしに、おもふとちかいつらねて、いづみの國へ、きこらぎはがりけ、いきけり。

(語釋) せうじうは、逍遙の字音なり。逍遙は、日本紀に、アソブと訓みれるが如く、心をやりて遊ぶをいふ。○思ふとちは、今言に氣のあへるといふに同じく、睦しき人々をいふ。○かいつらねは、かきつらねにて、かきは、添へたる詞なり。ひきつれての意なり。○きこらぎは、陰曆、二月をいふ。衣更着の義かどぞ

かふちの國、いこまの山を見れば、くもりみはれみ、たちねる雲やます。あした

よりくもりて、ひるはれたり。雪いとまろう、木の末にふりたり

(語釋)

生駒山は、峯をかぎりて、東は大和、西は河内なり。其の和泉の國へゆくとして見る方は、河

内なれば、こゝには、河内の國、いこま山とはいへるなり○くもりみはれみは、くもりつ、はれつといふに、ほど、同じ○たちゐる雲は、起ち居る雲にて、峯などより起てる雲と、又、靜まり居る雲をいふ。さて昨日までは、さやかなりしが、今日は、朝より雪空になりて、晝はれたれど、見わたせば、雪ふかくつもりぬとなり。けしき見るやうなり

うれを見て、彼のゆく人、なかにたゞひとりよみける

(語釋)

聞こえたるが如し

きのふけふ雲のたちまひかくさふは

花のはやしをうしとなりけり

(語釋)

かくさふは、かくすを延べたるのみ○一首の意は、雲のたちまひかくすは、花の林のうつ

くしきが、人に見はやするゝを、嫉みてならんとなり○雪いとしろう木の末にかりたるは、まことの花の林の如く見ゆるまゝに、例のをさなく詠みたるなり

(六十七段)むかし男、いづみの國へいきけり。津の國、すみよしの郡、すみよしの里、すみよしの濱をゆくに、いとおもころければ、おりぬつゝゆく。ある人、すみよしの濱をよめといふに

其の所の景色のよきさまに、書きなせるなり○おりぬつゝは、降りたりと、降りぬと、降りぬるをいふ

雁なきてきくの花さく秋はあれど

春のうみべにすみよしの濱

(語釋)

此の歌は、聞こえたる如く、雁なき、菊の花さき、いろく人の愛する秋はあれど、其の秋

のけしきも、春の海邊にはまさらじとなり。新釋に、春のうみべにといひさして、まさらじといふ意をこめ、すみよしのはまといひて、霞わたれるけしきを見ればといふ意は、いはでしらせたる歌のたくみなり。歌の詞に、みな人、よますなりにけりといふも、歌のたくみなるをめでゝの事なりといへるは、解し得て妙なり○佳吉をすみよしといふには、後の事にて、こゝも、スミノエとあるべしといふ説あれど、すみよしといへるも、新らしきことにはあらず。和名抄などにも、すみよしと訓めり。されば、あるくはスミノエといひし事、論なけれど、此の物語の頃には、すみよしともいひしなるべし。土佐日記などにも、すみよしとあり

とよめりければ、みな人よますなりにけり

(語釋)

上の歌をめでゝ、皆人、歌をよまずに歸りきとなり

(六十八段)むかし男ありけり。うの男、いせの國に、かりの使にいきけるに

(語釋)

かりの使といふは、勅使をつかはして、待をせさせて、捕らせ給ふ事なり。拾穂抄に、國守の國を治むるやうを見せたまはんために、狩の使として、つかさず事なるべしといへるは、さもあ

るべし○此の條は、古今集、戀の三に、業平朝臣の、伊勢の國にまかりける時に、齋宮なりける人にいどみそかにあひて、又のあした、人やるすべなくて、思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりけるとて、この二首あるを、かく詞をかへて、一條とせるなり。さて狩の使の事は、史には、使の人々をも、前の事をも、委しく記したれど、業平朝臣をつかはされし事見えず。此の朝臣、もはらざる事すべき年齢は、清和天皇の御代なれど、此の御代には、狩の使はとめられて、二度も此の事なし。陽成天皇の元慶八年に、再びおこされたれど、此の朝臣は、既に卒せり。されば、例のあらぬさまに、時代を作りなせるなり。

かの齋宮なりける人のおや、つねのつかひよりは、此の人、よくいたはれといひやりけり。おやのいふ事なりければ、いどねんごろに、いたはりけり。

(語釋) 齋宮は、いにしへ、天皇の御即位ある毎に、内親王、又は、女王の、いまだ、嫁し給はざるを選びて、伊勢の神宮と、加茂神社とに、奉祀せしめ給ひぬ。共に之を齋王といひ、其の居所を、齋宮といふ。又、伊勢なるを、齋宮といひ、加茂なるを、齋院といひき○おやは、母おやなるべし○いたはれは、今言と同じく、大切にせよといふ義なり○此の齋宮なる人を、ある説に、怡子内親王にて、文德天皇の皇女、惟喬親王の御同腹、御母は、紀の名虎の女靜子なりといへり。此の文にも、惟喬の親王、紀の有常、業平のしたしく交れるよし見ゆれば、殊に、ねんごろにせよと、母のいひやれると有るなどを以て考ふれば、より所あるに似たり。然るに、古意などに、いたく、之を辨じて、齋宮は、皇女なる如くに、最、神聖なるべきものなるに、業平と通せるやうの事は、さういふべし。

じめにもいへるが如く、當時は、男女の間、まことにみえりがましく、淫褻の氣、天地に満ちたる時なれば、其風俗をにくまば、別論なれど、ひとり、業平のみ責むべきにあらず。かゝる風俗の世には、又、皇女といへども、臣下と通じ給ひしことなしといふべからず。當時を評するに、今日の如く、男女の間の關係、整然たる倫理を以てせむるは、酷といふべし。當時、かゝる事ありたりとて、何ばかりの事かあらん。されど、むかし男ありけりとやうに書き記したる一條の物語なれば、之を以て、必しも、人をおし、時代を考ふべき、必要なしといはゞ、もとより別論なし。あしたには、かりに出だしたてゝやり、ゆふざりは、こゝにかへりてさせけり。かくねんごろに、いたはりけるほどに、いひつきにけり。

(語釋) 出だしたてゝは、齋宮の御心つけて、出だしやり給ふなり○ゆふざりは、夕至の義なり○こゝにかへらせけりは、齋宮へかへらせ給ひしなり。狩の使は、國司のもとにやどるがつねなれど、母よりよくいたはれといひおこされしかば、特別の御もてなしにて、齋宮の殿にやゑし給ふよしなり○いひつきにけりとては、ねんごろに、いたはり給ふをたよりに、いひよりつきて、密事^{ミツカゴト}いひたまひしよしなり。

二日といふ夜、男、われてあはんどいふ。女も、はた、あはじともおもへらむ。されど、いと人めしげければ、あはず。

(語釋) 二日といふ夜とは、今言に、二目メノ晩などいはんが如し○われてあはんは、わりなくあ

はんの義なり。わりなくは、道理なしの約言にて、無分別になどいふに同じ。古今集の俳諧歌に、よひのまに出でゝいりぬるみか月の、われてもの思ふ比にもあるかなといふ歌も、わりなくもの思ふといふ意にて、こゝとおなじ用ひざまなり。○はたは、又の意のかるき詞といふ説、まづ、よろしからん。この事、なほ、前に委しくいへり。

つかひぎねとある人なれば、どほくもやどさず。女のねやも近くありければ、女人をしづめて、ねひとつばかりに男のもとに來にけり。

(語釋) つかひぎねとは、使の中に、主とする人をいふ。婢ぎね、客ぎねなどいふも同じ。日本紀に、主神をかみぎねと訓みたるによるに、これも、使主とかく意なるべし。○どほくもやどさず云々は、齋王、すなはち、内親王の御ねまも、殿中のおくまりたる間なるべく、又、此の勅使をやどし給ふ所も、どほくはなれたる室にはあらで、いはゆる、上段の間なるべし。されば、女の間も近くありければとはいへるなり。○しづめては、殿中の人々をねさせて、後のこゝろなり。○ねひとつとは、昔は、一時を、四つにわかつて、子一つ、子二つ、子三つ、子四つとやうにいひき。他の時もしかり。いはゆる、子の一刻ころに、男の室へしのび來にけりとなり。

男、はた、ねられざりければ、どのかたを見出だしてふせるに、月のおぼろなるに、人のかげするを見れば、ちひさきわらはをさきにたてゝ、人たてり。

(語釋) 男、はた、ねられざりけりとは、女の事の心にかかりてなり。○どのかたは、月の方をいふ。

べければ、外の方の意なるべし。こゝは、男の心もしも女の心もあらんかと、外の方の月を見ながら、はしちかく、かりに倚り臥し居たるさまなり。○ちひさきわらはを云々、れとなは、心れき給へば、少女をつれ給へるよしなり。いかに殿中なりとも、貴女は、ひとりあるき給はねば、しのびながらに、少女を供につれ給へりとなり。又少女は、あどにつれ給ふべきに、さきにたてゝとあるは、少女は、殊に殿中をあるきて、勅使のやどれる室なをも、かねて、能く知りたりけんゆゑに、さきにたてゝしるべせしめられきとなり。

男、いどうれしくて、わがねる所にゐていりて、ねひとつより、うしみつまであるに、まだ、何事もかたらひあへぬほどに、かへりにけり。男、いどかなしくて、ねむなりけり。

(語釋) わがぬる所にゐては、我がれくなる間へつれゆきてなり。○ねひとつより云々は、前にもいへるが如く、子の一刻より、丑の三刻までなり。○まだ何事も云々、相思ふ男女の逢ふは、秋の長夜も短きならひなれば、まして、春の夜とて、いまだ心に思ふかたはしをだに、語らぬうちに、女はかへりにけりとなり。

つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もどなくて、待ちをれば、明けはなれて、しばしあるほどに、女のもとより、詞はなくて

(語釋) つとめては、朝の將に明けはなれんとする頃をいふな。晨の字をあつ〇いぶかしは、萬

葉に、辭悵の字をイブカシとも、オボツカナシとも訓める意なり。なごりをしくて、男ねずなりにける事なれば、心の中に、思のむすばれて、我よりたよりやるべきか、又、彼方よりたよりやあるなど、まつ問の、とやかに、心の亂れて、はれぬをいふ○あけはなれては、夜の明けて後をいふ。例のわらはが文以て來たるなり。男、披きて見れば、文の詞はなくて、歌のみありきとなり。さて文の詞のなきは、思の切にて、いかにともいふべきよしなきさまなり

君やこしわれやゆきけんおもほえず

夢かうつゝかかねてさめてか

(語釋) 一首の意は、昨夜、相見しやうにればゆるは、君が我が許へ來させるにか、或は、おのれが、君のもとへ行きしにか、其のいつれなるかを覺えず。さては、夢にてありしかとなり。はかなく別かれて、後朝の切なる心、さもありぬべし○夢かうつゝかとは、夢かといふが主にて、うつゝかといふは、軽く見るべきこと、新釋の説のどし。漢文の緩急などいふも、急の意強く、緩の意かるし。かゝる例は、和文にも、漢文にも、あることなり○萬葉に「うつゝにか君が來させる夢にかもわれはまどへる戀のしげきに」とあるを、本歌として、つくれる歌なるべし

男、いといたう、なきて、よめる

かきくらす心のやみにまどひにき

(語釋) 下の句、こよひさだめよと、古今集には、昔人さだめよとあり。こよひはなほし引けるなるべし○一首の意は、昨夜のことは、我はたかきくらす心に、君のおほせらるゝ事を、定むべくもあらねば、今宵來て、いづれども、定め給へとなり○心のかにかくに亂れて、暗くなるを、やみにたどへていへるなり。これも心の切なるさまあらはなり

とよみてやりて、かりに出でぬ。野にありけど、心はうらにて、こよひだに、人しづめて、いとどくあはんと思ふに、

(語釋) かくて、獵に出で、野を踏みわけ歩けど、女を思ふ心の切にて、うかくと、心の空なるよしなり。萬葉に「わぎもてが夜戸出の姿見てしより、心空なり土はふめども」などあり○こよひだにとは、昨夜はあふほどもなかりしかば、せめて、今宵は、人をはやくねさせて、あはんとおもふよしなり。人しづめては、人をねしづましむるをいふ

國のかみ、いつきの宮のかみかけたる、狩の使ありときゝて、夜ひと夜、酒のみしければ、もばら、あふ事もいせで、あけば、尾張の國へこそんとすれば、男も女も、人しれず、血のなみだをながせど、いあはむ。

(語釋) 國のかみ云々は、伊勢の國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたるをいふ。かけたるは、兼ねたるの義なり。眞淵翁の古意に、欠けたると見られたるは、つたなし。兼をかけといふは、常のことなり。この國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたる人が、齋宮に來たりて、勅使を饗應して、終夜酒筵を張めきとな

り。此の酒宴のために、逢ふ事も出来ず、さればとて、明日は、尾張の國へ越さんとすれば、悲しさのあまりに、血の涙を流して、わかれぬとなり○もはらは、何事にもあれ、其の事のみするをいふ。こゝは、一向に、又、少しもなどいふほどの事なり

夜、やうく、あけなにとするほどに、女がたより、出だすさかづきに、うたを書きて、出だしたり。とりて見れば、

(語釋) 夜漸々あけんとする頃、女の方より、杯のおもてに、歌をかきて、出だせりとなり

かち人のわたれどぬれぬにじあれば

(語釋) かち人は、徒歩人なり○えにしは、縁に、江をかけたるなり○歩にてわたるに、ぬれぬほどの水は、いと浅きを、二夜とだに逢ひがたき、浅き縁なりといへるなり。たゞ一夜、かりうめのちぎりにて、かくわかれまゐらするは、まことに浅き縁よとなり

とかきて、末はなし。其のさかづきのうらに、つい松のすみして、うたの末をかきつぐ

(語釋) 末は、歌の下をいふ。歌の上下を本末とも、つねにいふ。さて下のなきは、男につぎてよとの意を示したるなり。又、杯のうらに書きたるは、おもてに、本のかきてあるが故なり○つい松云々新釋にいはいはく、つい松は、續松を音便にしかりへるにて、たい松と同じものなり。このすみしてか

にも、五位二人取、續松、並前行とあり。こゝも、松をこめて、出せんとするゆゑに、その人の、松をもして、庭にまち居るべければ、其のれちたるすみをひろはせて、書けるなり。旅よをひして、はし近く、出で居たるさを見るが如し。をりふしあたり、硯もなく、いそぐゆゑにもあるべし。臆断、古意など、つい松といふ名の意のいいひて、うのすみしてかけるゆゑをときもらされたるは、おろそかなり云々

またあふ板の關はこねなん

(語釋) こは、又、いかにもして、逢ふ時もあらんと、女を慰めていへるなり。其の中に、都にかへりても、逢坂をまたも越えて、伊勢に來たりて、逢はんといふ意をこめたるなり。抑、この贈答は、互にしげき人目を忍びて、はかなきちぎりにてわかるゝなげきを、江の水の浅きにいひなし、又、あひ見んと慰むるを、逢坂の關てゆるに擬へなど、すべてかくし詞にて、巧にしくみたるなりさて、こゝに歌の末といふは、七々の句なるゆゑに、かりに末といへるにて、實は連歌ともいふべきにて、おまさのく思ふ心を述べたるなり。されば、あながち、本末を合はして、一首の歌とはいふまじきなり。契沖法師は、一首の歌にせんとて、かにかくに説きなされたるは、なか／＼にわるし

あくれば、をはりの國へ越えにけり

(語釋) 越えとは、國の境を出づるをいふ。伊勢より、尾張へ行くに、山もなければ、越ゆるは、河を越えたるなるべしといふ説もあれど、いかゞ、河にはわたるとこそいへ。越ゆとはいふまじきなり。たゞ、國境を出でたるを、こゝには越ゆとはいへりを見る方、おだやかなるべし、

(六十九段)むかし男、かりの使よりかへりきけるに、大淀のわたりにやどりて、いつきの宮のわらはべにいひかけける

(語釋) 大淀は、延喜の神名式に、伊勢の國、多氣郡に、竹大與村の神社ありて、即、齋宮の同じ郡にて、遠からぬ所なり。かつ齋宮くだり給ふ時、まづ、こゝにはらひして、齋宮へ入りたまふ例なり。ある説に、伊勢、尾張の道のわたり口なりとあるは、いかゞあらん。こゝは上の條の同じ度にて、尾張より京へ歸るとて、伊勢を又經るに、大淀といふところに宿りたれば、齋宮より、御使のあるが中に、彼の心じりのわらはべもありしかば、それにいひかけたりとなり

みるめかるかたはいづこづさをさして

われにをしへよあまのつりぶね

(語釋) みるめは、見る目を、海松めにかけて、さて海松のある所は、海人のよく知れるものなれば、釣舟の竿もて、さし教へよといふ、たとひ歌なり。彼の見し後、あひ見るよしもなく、わびしきに、齋宮に又あひまゐらせんには、いかがしてよからん、一度みちびきせる童女なれば、かうくしてよからんと、吾にをしへよとなり。それを、海邊にての事なれば、その物もてたとひたるなり。又しのびたることにて、人に知られぬやうに、いへるにもあるべし。この歌は、小野篁の「人にはつげよあまのつりぶね」の歌をねもひて、例の記者のつくれるなるべし

(七十段)むかし男、伊勢の齋宮に、内の御使にてまゐりければ、彼の宮にすまひける女、われくしむとて

(語釋) すまひとは、舊説に、好色の事とも、又、榎子といふ女の名なりともいへり。何れにても聞こゆれど、こゝは、好色の意に見る方よろしからん。常に好色なるからに、勅使にさへすぎごといひかけたるなり。この女は、齋宮の侍女なり。さてすぎといふ言の原義は、すべて、物をこのまじうするをいふ。それより轉りて、好色、また、風流などの義ともなりぬ。わたくしとては、齋宮の御賴を、勅使へつたふるにはあらで、侍女がわたくしとて、よめる歌なりといふ意なり

ちはやぶる神のいがきもこにぬべし

大宮人のみまくほしさに

(語釋) ちはやぶるは、神といふ語の冠辭なり。いがきは、忌垣の約にて、みだりに、人の入るまじ垣をいふ。即、神のいます所の垣は、みだりに、人の入るまじきものなれば、たとへていへるなり。○大宮人とは、殿上の大内に居る人を、ひろくいふ稱にて、こゝは、勅使をさしていふ。○一首の意は、大宮人のせちに見まほしければ、神の御禁制なる、忌垣も、みだりに越えて見んと思ふなりよし、たりありて身のほろぶるも、いとほしとなり。さて神とは、齋宮をしたにさしていへるなり。齋宮のしたひたまふ君を、わたくしに慕ひまづることなれば、齋宮のたゞり必あるべしと、それをあそる意を、含めたるなり。これをはしがきに、わたくし事にてとは、かけるなり。○さてこの歌は、万葉に、「ちはやぶる神のいがきもこにぬべし、今はわが名のをしけくもなし」、又、同集に、「ゆふかけていはふやしろもこえぬべし、おもほゆるかも戀のしげきに」などあるによりて、例の記者のつくり

なせるものなるべしとおぼゆ

男かへし

こひしくばきても見よかしちはやぶる

神のいさむる道ならなくに

(語釋) 道ならなくには、今言に、道デナイノニなどいはんが如し○一首のこゝろは、男女相慕ふは、神の禁じ給ふ道ならぬに、神の忌垣も越えぬべしなどやうに、ことごとしくいふべき事ならねば、戀ひしくば、來てあひ見よかしとなり

(七十一段)むかし、男、伊勢の國なりける女に、又もえあはで、隣の國へいくとていみじう恨みければ、をんな

(語釋) こゝの女とあるは、上の齋宮にて、一夜あへる人をいふと見えたり

大よどの松はつらくもあらなくに

うらみてのみもかへる浪かな

(語釋) 松を女に、波を男にたとへて、我がつらきにはあらぬを、われを恨みがほに、かへるかなと、女のいふなり○この歌は、古今集、在原元方のうたに、「あふことのなさきにしよる浪なれば、うらみてのみふたちかへりける」と、あるによりて作れるなるべし

(七十二段)むかし、こゝにはありて、さうとてさうたて、うらみてのみもかへる浪かな

(語釋) せうそこは、消息の字音にて、又、また、詞をいふがつねなれど、こゝは、懸想詞をいひかくる事だに出來ぬ女のよしなり。さるは、まゐる人などのありて、きびしきゆゑなるべし
めには見て手にはとられぬ月のうちの

かつらのごとき君にぞありける

(語釋) 月中桂樹のことは、支那にて、はやくよりいへり。和名抄にも、兼名苑をひきて、月中有河、河上有桂、高五百丈とあり。我が國にても、ふるくよりいひきと見ゆ。萬葉集に、「めには見て手にはとられぬ月のうちの、かつらのごときいもをいかにせん」といふ歌あり。こゝのは、萬葉のを、少しかへたる例のわざなること、明らかなり

(七十三段)むかし、男、女をいたううらみて

(語釋) 一本に、この詞をおとして、前段につけたるは、わろし
いはねふみかさなる山はへだてねど

あはぬ日おほくこひわたるかな

(語釋) 岩ねふみかさなる山とは、岩ほなど踏みつゝ、越ゆる山は、深く險阻なるものにして、人の通ひがたきものなれど、さる重なる山は、隔てねど、相思はねば、あはぬ日おほく、戀ひし戀ひしと思ひわたるかな、まことに、つれなき、君が心かなど、うらみて、歎息したる歌なり○この歌は、萬葉

集に、「石根ふみかさなる山はあらねども、逢はぬ日おほみ戀ひわたるかな」とあるをとりて、例の作者の、少しかへたるものなること著し

七十四段むかし、男、いせの國なる女に、京にゐていき、あはんといひければ、女

(語釋) 男、伊勢の國なる女に逢ひそめしかど、伊勢にては、ながく逢ひかたき事情おこりて、京につれゆきて、あはんといひけるなり

大よどのほまにおふてふみるからに

心はなぎぬかたらはねども

(語釋) 大よどの濱に生ふておは、みるの序にて、意味なし。みるは、海松に、見るをかけたるなり。一首の意は、よそながらも見るからに、戀のころは、なぎ和きて、をさまれば、此の國に居て足れり。京へゆくは、否といへるなり

といひて、まして、つれなかりければ、男

袖ぬれてあまのかりほすわたつみの

みるをあふにてやまんとはする

(語釋) 海松は、袖をぬらして、海人が、かりては濱にほすものなれば、上の句は、みるといふ序にさへるのみ。一首の意は、見るからに、心はなぎぬかたらはねども、あはれ見るをかけたるなり

岩まよりおふるみるめしつねならば

しほひしほみちかひもありなん

(語釋) 此の歌の解、諸抄まちくなり。古意には、こはかく見る事だにかはらであらば、之を朝夕のかひにてころあるべき物なれど、右の大淀の歌と、又、同意なり。ましてつれなかりければとかけるは、こゝをいふなり。又、海松は、岩に生ひて、かつ色かへぬものなれば、つれなくばといへるは、ろれによれる語にもあるべし。しほ干、汐満は、萬葉に「あしづの海しほみちみつ時はあれど、いづれの時かはが戀ひざらん」とよめるは、時あることをいひ、此の歌には、朝夕に、常にいふ意にていへり。然るを、此の語に泥みて、或は男の心のかはりかはらぬたとひと思ひ、或は世の中は、かはる事もあれば、逢ふ時もあらんをいふなと思へるは、皆わろし云々を見えたり。又新釋には、いはまよりは、岩まにといふ意なり云々。此の歌、おふるといふまでは、みるをいはんための序なり。みるめは、海松めを詞のおもてには、意は見る目なり。しほは助辭なり。さてしほひ、しほみちといふ詞、拾穂抄には、男の心のかはる意にいひ、臆斷には今こそえあはぬ時なりとも、又、あふ時のあらんずるをさていふ意と、又、しほのみちひの定めなき如くなれば、さだめなきをたのみて、かひありてあふことあらんぐといふ意と、二説に説き、古意には朝夕に、つねにといふ意なりといはれたり。これらの説ども、みなわろし。師説に、岩まより云々、此の歌の四の句、説き得たる人なし。しほひしほみちは、とまれかくまれといふ意なるを、海の詞にて、いへるのみなり。今

はともかくもあれ、末つひには、かひありて逢ふこともあらんといへるなりと、いはれたり。此の説も、なほ、とき得られたるにあらず。末つひには云々といふこと、此の歌のこゝろに、更になき事なり。此の女は、よろながら見るのみにして、逢ふことは、否といひはてたるなり。さるからに、又此の歌の、かへしに、つらき心は、袖のしづくかと、男のつよく恨みたる歌よめるなり。よく思ふべし。おのれ此のうたの意をときあかさん。よろながらにても、逢ひ見ることをつねならば、京にいきても、此の伊勢の國に居りても、いづれにしても、かひありなんといひて、なほ、京にいく事を、うけひかぬ意なり。かひありとは、見る事のつねならば、それがかひあるなりと、女はおもひていへるなり、かひは、是を詞のおもてどしたり。しほひに、貝のあるは、更なり。しほみちに、貝もありなるとは、浪の下にあるをいへり。かく見ざれば、かひもといふものてには聞えず。たとへたる意をいはゞ、京にいきて、かひあるは更なり。伊勢に居りても、なほ、かひもありといへるなり。それは見ることのつねなるゆゑなり。しほひは、しほのひきさればこゝを去りて、京にいく事にいひ、しほみちは、こゝにみちてある事なれば、伊勢に居るにたとへたりといふはひがことならじ。かくときてこそ、一首のこゝろつらぬきてはきこゆれといへり。新釋の説。まことに、こまやかにして、舊註にまさり

又男

涙にぞぬれつゝしほる世の人の

[illegible]

(語釋) 涙にうぬれつゝしぼるは、人のつれなきさに、涙の雨の如く、袖にたりかゝれば、堪へがた
くて、ぬれ／＼しぼるさまをいへるなり。世の人の、つらき心は云々は、此のしぼる袖の雨のおほ
きは、一とほりの涙にはあらじ。すべて、世の人のつらき心は、袖の涙となるにか。されば、つれ
なき君が心も、我が涙となりて、かく袖を、いみじく、ぬらすならんといふ意なり○袖のしづくか
は、袖の涙といふ意なり。たゞ上に涙に云々とあるがゆゑに、「しづくか」といへるなり
よにあふことかたき女になん

（語釋）世の中に、すぐれて、逢ふこと難き女になんとなり

(七十五段)むかし、二條の後の、また、春宮のみやすところと申しける時

〔語釋〕 春宮のみやす所とは、春宮（皇太子）の御母儀をいふ。女御、更衣なども、御子を生みまづれば、御息所と申すなり。こゝは、二條の後の、いまだ、皇后に立ち給はずして、御息所と稱せる時のことなり。古今集、雜の部に、「二條后、東宮の御息所と申しける時、大原野に詣てたまひける日、よめる、在原業平朝臣」とて、下の歌あり

氏神にまうでたまひけるに、

(語釋) 二條の后は、藤原氏にませば、其の氏神は、天兒根命をいふ。この神は、鎌足公常陸の國にて生れ給ひしかば、そこにまつりてありしを、奈良の比、三笠山に遷し、又平安の都となりて。此の乙訓の大原野にうつし祭られたること、大鏡に見えたり。さるを、はじめて、大原野にうつし給ひしは、嘉祥三年に閑院の左大臣冬嗣公なりといふ説あれど、此の公は、嘉祥のまへ。天長三年に、薨じ

たまひぬゆゑに、閑院の左大臣云々といふ説は、實錄をも見ぬ人のわざなり。さて二條の后を御息所と申しけるは、清和天皇の。貞觀十一年より、同十八年までの間をいふなるべし。(貞觀十一年二月一日、此の御息所の生み奉りたまふ皇子(陽成)太子に立ちたまひ、元慶元年正月一日に、御即位ましゝて、其の御息所、高子は皇太夫人にのぼり給へばなり)さるを、右の年月の間に、此の御息所、氏神詣のこと、實錄にも、古記にも見ぬされば、おぼつかなければ、古今集と、此のおみとに、かくあるゆゑに、右の如く、東宮の母儀とはいふなり

近衛つかさねさむらひける翁、人々のろくたまはりけるついでに、御車よりたまはりて、讀みてたてまつりける

(語釋) 近衛つかさにさむらひける翁とは、暗に業平朝臣を指したるなり。さて業平朝臣は、元慶元年正月(五十一の時)左近衛の中將となりたれば、近衛つかさとはいへるなり。然るに、今年、彼の太子(陽成)も位につき給ひしかば、御母を御息所とはいふまじきなり。又此の業平朝臣、貞觀六年に左近衛少將になりし時のこともいふべけれど、さては、高子を御めやす所と申さぬ以前のことなり。とにもかくにも、時代をかきひがめたるを、例の作者の心しらびなりける。○ろくは、祿にて、後世の褒美のことをいふと、前に委しくいへり

大原やをしほの松もけふころは

神代のことをおもひつゝしめ

(語釋) 大原の松は、神代にさむらひける翁の、天孫降臨の時より、天皇を護り奉り、其功、他の神にすぐれ給へり。然るに、此の神の御子孫なる、東宮の御息所は、天皇をまもり奉る妃夫人などおほき中に、すぐれ給へることなれば、此の御息所のまうで給ふを見をな

はすにつけて、御みづから、神代のことをおぼし出てたまふなるべしとなり。さて下のころは、松を御息所に比して、はやく密事をおぼし出で、や、此翁に、人より殊に御車より祿たまふならんといふ意をふくめて、よろこぶさまにとりなしたり。かくとかずては、前の詞がきはいたづらになりぬべし。能く味ひてよ

とて、心にもかなしと思ひけん、いかゞおもひけん、しらすかし

(語釋) とては、といひての義なり。○男、歌にしかよみて、心にもいかなばかり、昔おもひ出で、悲しかりけんとなり。右の詞書のみにて、心をうへたるさま、猶あきらかならねば、此詞をうへて、さぞらしむるなり。いかゞありけんしらすかしとかきたるは、下意ありつらんよしをおもはせしむる例の作者のたくみなり

(七十六段)むかし、田村のみかどと申すみかどおはしましけり、その時の女御、たかき子と申す、いまそかりけり、

(語釋) 文德天皇、崩御まして、山城の國、葛野郡、田邑タムラの郷、眞原丘に葬り奉りぬ。(この時、天安二年八月)よりて、田村のみかどと申す。○女御かたき子云々は、文德實錄に、嘉祥三年七月、藤原朝臣多賀幾子爲女御と見え、三代實錄の天安二年十一月の條には、從四位下藤原朝臣多加幾子卒、多加

幾子者右大臣從二位良相之第一女也、少有雅操云々と見えたり○いまそかりは、おはしますといふが如く、御座の字をあつること、前に委くいへり

それうせ給ひてのちのみわざ、安祥寺にて、やよひのつこもりにしけり、

(語釋) たかき子のうせ給ひしは、天安二年十一月なること、前にいへるが如し○のちのみわざとは七七日の間の佛事をいふ○安祥寺は、或る説に、山科にあり。五條の後、順子の建てたまへる寺なりといふ。文德實錄に、齋衡二年六月、詔以安祥寺預於定額云々、三代實錄、貞觀元年四月の條に、緣皇太后御願、置安祥寺年分度者三人云々など見えれば、この頃、おもくあつかはれし寺なることは、更に論なし○やよひのつこもりは、三月の下旬をいふ

人々、さゝげものたてまつりけり。たてまつりあつめたるもの、千さゝげばかりありけり。

(語釋) さゝげものは、捧物にて供物をいふ。之を字意のまゝに、ホウモチといへることも、物語ぶみに、これかれ見えたり○千さゝげは、捧物の數の多きをいふ

そこばくのさゝげものを、木の枝につけて、堂の前にたてたれば、山もさらに堂のまへに、うごき出でたるやうになん、見えける。

(語釋) 神佛、または、貴人に、物をさゝぐるには、必、木の枝につく。こゝは、堂のまへの廣きところなれば、特に大なる枝につけりといふ。されば、山も堂のまへの廣きところなるべし。この光の形勢まことに功なり

其のころ、右大將にいまそかりける、藤原の常行と申すいまそかりて、講のをはるほどに、歌よむ人々をめぐあつめて、けふのみわざを題にて、春のころばへある歌、たてまつらせたまふ

(語釋) 常行大將は、天安二年十月、從五位下周防權守より、右近衛少將となりて、多加幾子の身まかり給ふ時は、いまだ官位ひくかりき。こゝは、後よりまきらして、かけるなり。さて此の常行は、右大臣良相公の一男にて、右の女御の兄君におはせり。さてこの人の、右大將になられけるは、貞觀三年のことなり。時代をかきまきらせるは、例のことなり○講とは、法事にて、經を講じなどするゆゑにいふ。其間は、人皆、聞き居りて、他事すべきならねば、れはるほどに、歌よませらるゝなり

右の馬の頭なりける翁。めいたがひながらよみける

(語釋) 右の馬の頭は、暗に業平朝臣をさせるなるべし。朝臣は、貞觀五年に、右馬頭となりぬ。此の御わざの比は、いまだ翁といふべき年ならねど、例のまぎらしたるなり○目はたがひながらは、さゝげ物を山なりと、見たがへてよめる歌のこゝろなればなり

山のみなうつりてけふにあふことは

春のわかれをどふとなるべし

(語釋) 此の女御の御わかれと、春(三月下旬なれば)のわかれとを、兼ねていふなり。その御わか

れを吊ふとて、山もみな、此處へうつり来るならんと、をさなくよめるなり○山もみな云々といへるは、如來の入滅には、海水飛涌、大山崩裂すなど、經文に見えたれば、女御の身まかり給ひしを、如來の涅槃にならずへ、且、その捧物を山と見たれば、即、山としてよめるなり○前にいへるが如く、女御のうせ給へるは、天安二年十一月十四日なり。辛未のその日より數ふれば、貞觀元年正月二日、四十九日にはあたるを、三月の下旬といひ、春のわかれとよみしなど、皆、日數をもかへたるは例のわざなり。さて此の歌は、作者のよめるなり

とよみたりけるを、今みれば、よくもあらざりけり。そのかみへ、これやまさりけん、あはれがりけり

(語釋) そのかみは、當時の義なり○あはれがるは、おもしろがるをいふ○こゝは、記者のよみてみづから、昔のことになしつるなり

(七十七段)むかし、たかき子と申す女御、おはしましけり。うせ給ひて、な、七日のみわざ、安祥寺にてしけり。

(語釋) 前と同じたびのことなるを、ことに、筆をおこしてかけるは、此の書のつねなり。但て、は、山科の事をいはんとてなるべし

右大將、藤原の常行といふ人、いまそかりけり。そのみわざにまうで給ひて、かゝるに、山科の禪師のみ子は、いまだつからず、うの山科の宮に籠るなり、水はあはれ

などして、おもしろく、つくられぬれ、まうをたまひて、

(語釋) かへとは、歸るさにて、歸途の義なり。この文は、歸途に、山科の禪師のみ子のおはします宮にまうで給ひてと、つゞけて見るべし。さて其の間に、其の宮のさまをいひたるにて、この体歌にも、文にも、多きことなり○禪師のみ子は、法親王をいふなり。この頃、禪師といふは、法師といふに同じく用ひたるが如し○瀧おとし、水はしらせ云々、おのづから景色にはあらで、ことさらに、作りなしたるなり。下に、島このみ給ふ御子なりとあるに、照應せしめんと文のたくみなり。心をつけて見るべし

としむろよそには、つかうまつれど、ちかくは、いまだつかうまつらず。こよひはこゝにさむらはんと申したまふ。親王よろこびたまひて、よるのおましのまうけさせたまふ。

(語釋) としむろは、年來の意なり○よろにはつかうまつれど云々、遠ながら心を寄せて、仕へ奉れとの義なり。つかうまつるは、總べて、貴人に對して、そのために周旋奔走する事にもいひ、又は傍に侍して、御物語などすることにもいふ○さむらはんは、侍候する意なり○よるのおましは、新釋に、御子の夜の御座なり。晝は、おもての方におはし設けて、出で居たまひ、常行大將、止宿になりたれば、夜は、又、うちくの方にて、御酒宴などあるべしとて、夜の御座のまうけをさせ給ふなりといへり。されど、やはり、舊説の如く、常行大將を止宿せしむべき、寢所の設をさせ給ひきといふより、○さて山科の禪師の補王は、仁明天皇の四の皇子にて、彈正尹を聞ていしを、貞觀元年

五月に、入道したまへり。こも又、此の女御の後のみわざの頃は、まだ入道したまはざるを、皆、かきたがへたるは、例のことなり

さるに、かの大將出で、人にたばかりたまふやう、

(語釋) 出で、は、親王の御前より、退り出で、なり○たばかりは、たは添へていふ詞にて、たゞ、はかりといふに同じ。慮、また、測などの義にて、考へはかる事なれど、轉じては、人と相談するやうの事をもいふ。こゝはその意なり

みやづかへのはじめに、たゞ、なほやはあるべき。

(語釋) みやづかへとは、常行大將が、今夜、親王の御許にあれば、敬ひていへるなり○なほは、黙の字の意なり。なほあるとは、何ともせず徒にあるをいふなれば、なほやはあるべきは、其の反對にて、たゞ黙してあらるべきか、あらぬの意なり

三條のおほみゆきせし時、

(語釋) 三條のおほみゆきは、貞觀八年三月廿八日に、右大臣良相の、百花亭へ御幸ありし事をいふなるべし。此の事、三代實錄、十二の卷に見えたり。さて良相を西三條右大臣といへば、三條の大御幸とはいへるなるべし

紀の國の千さとのほまにありける、いとれもころき石、たてまつれりき。

(語釋) 千さとのほまは、紀の國、熊野の邊なりといふ。海邊には、いろくの雅致ある石おほきものなれば、これを大御幸の時のために立て置相公へ、紀の國の千さとのほまにありける、いとれもころき石、たてまつれりき。

大みゆきの後、たてまつりしかば、ある人のみさうしのもへの溝にすまれりしを、嶋このみたまふ君なり。此の石をたてまつらんとしたまひて、御隨身舎人して、とりにつかはす。

(語釋) こゝも、例の詞を省きたれば、聞てえにくし。新釋の説よろし。其の説に、紀の國は、都に遠ければ、大御幸におくれて、もて來て奉りしかば、かひ無くて、御曹司の前の、みづにすゑおかれたるなり。島このみ給ふとは、庭をつくるには、水のながれ、島山などのけしきあるさまにつくる事なれば、今の世に、庭をこのむといふを、昔は、島このむといひけん。さまに瀧おとし水はしらせなどしてといへる、すなはち、庭このみ給ふしわざなり。庭好みたまふ人は、石をめだたまふものなればとて、奉り給ふなりといへり○御隨身舎人は、常行大將のとも人なり

いくほどもなくて、もてきぬ。此の石、きゝしよりは、見るはまされり。これを、たゞに奉らば、すゑなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。

(語釋) たゞには、直ちになり○すゑなるは、漫に、又、不慮になどの意なり。こゝは、その石を、徒に奉りては、あまり不慮なる心地して、興なしとて、歌よませ給ふとなり

右の馬の頭なりける人なん、あをき苔をささみて、まさゑのかたに、此の歌をつけて、奉りける

(語釋) あをき苔を云々、古意に、青苔をこまかにささみて、之を以て、蒔繪のかたちの如く、歌の文字を石につけたるなりといへり。この説にて、きこえたり

あかねども岩にぞかふる色見えぬ

心を見せんよしのなければ

(語釋) あかねどもは、飽かねどもなり○かふるは、代ふるなり○一首の意は、親王をおもひ奉る心のほども見せまゐらせんと思へど、心は色も姿もなく、見せ奉らんやうなし。されば、岩に代へ表して、見せたてまつる。これのみにて、足れりと思ふにはあらねどもといふ意なり

となんよめりける

(語釋) 聞てえたる如し

(七十八段)むかし、氏の中に、みこうまれたまへりけり。

(語釋) むかし云々、何の氏ともいはず、打ちつけにかくいへるは、此の書は、業平物語なれば、かく書きて、在原氏の中にいふ意なり。さて此の皇子は、行平卿の御ひすめ、更衣文子、貞観十六年に、清和天皇の御子、貞數親王を生みたてまつれる事をいふなり

御うぶやに、人々歌よみけり。御おほちがたなりける、翁のよめる

(語釋) 御うぶやにとは、御産屋の祝にの義なり。産家に、三日の夜、七日の夜などいふは、古よりの例なり○御おほちがたは、御祖父方にて、行平卿の弟、業平朝臣をさせるなり。この時、業平朝臣は、五十一歳にあたるべければ、翁といふもよしありけり

わが門にちひろあるたけをうそつれば

夏はたれかかくれざるなり

(語釋) ちひろは、千尋の義なり、藤にたれかかくれざるなり○わが門は、我が門と、一門とをかねていへるなり○一首の意は、我が門のあたりに、世にまれなる、千尋の竹を栽ゑて、うの陰もひろければ、我が氏族、家親のもの、たれか、このかげにかくれざるべき、皆、かくれて、夏は、すゝみ、冬は、霜雪をおほひて、あたゝかならんとなり。さて裏に、一門に、珍らしく御子生れ給へば、此の皇子の御陰によりて、氏族のもの、ことごとく、御恵を蒙るべしといふ意を、含めたるなり

これは、貞數のみこ、時の人、中將の子となんいひける。兄の中納言、行平のむすめのはらなり。

(語釋) 聞てえたる如し。但、この文は、一本になし。後人の書き入れたるものなるべしと、先輩もいはれたる如く、なき本をよしとす

(六十九段)むかし、おどろへたる家に、藤の花うゑたる人ありけり。いとおもしろうさけりけり。やよひのつごもり、雨をぼふるに、をりて人のもとへたてまつるとて、よめる

(語釋) 雨をぼふる、雨のショボく降るをいふ○此は、古今集に「三月のつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて、人につかはしける」とて、此の歌あり。こゝに衰へたる家といひ、また、折りて奉るなど、詞をかへて、歌の意をかめたるは、例の作者の巧なり

ぬれつゝぞしひてをりつる藤の花

春はいくかもあらじとおもへば

(語釋) 三月の下旬にて、殘る春は、幾日もあらねば、雨の降るに、強ひて、この藤の花を折りて、たてまつる事となり

(八十段)むかし、左のおほいもうちぎみ、いもうかりけり。賀茂河のほとりに、六條わたりに、家をいとおもしろくつくりて、すみたまひけり。

(語釋) 左のおほいもうちぎみとは、左大臣の事なり。こゝは、左大臣、源融公のことなり。公は、嵯峨天皇、第八の御子にして、承和元年に、元服し給ひ、源姓を賜はりき。嘉祥三年、從三位に叙せられ、貞觀四年、左大臣となり、寛平七年、七十四にして、薨せられ、正一位を賜らる。此の公の河原院は、六條、坊門の南にありき。こゝは、其の家をいふなり○古今集の「君まさで烟たえにし鹽がまの、うらさびしくも見えわたるかな」といふ歌の註に、顯昭がいはいく、河原の院に、いみじき家を造りて、池をほり、水をたへて、潮を毎日三十石づゝ汲み入れて、海底の魚貝等を住ましめたり。陸奥の國のしほがまの浦をうつして、蛭の鹽やく屋に、烟をたゝせて、玩ばれけるなり云々と見えたり。なほ、源順の、河原院の賦にも、此のこと、委しく見えたり

かみな月のつごもりがた、きくの花うつろへるさかり、もみちのちくさに見ゆるなり。

(語釋) かみな月は、陰曆、十月をいふ○うつろへるさかりとは、衰へうつろふ最中といふにおなじ○ちくさは、千種ちくさの義にて、紅葉の、こゝへ見ゆるなり

此の段のおもしろきをほむる歌よむ。これにありけるかたおきな、板じきのしもにはひありきて、人にみなよませはてゝ、よめる

(語釋) 夜ひとよは、夜とほしなり○酒のみしは、酒宴するをいふ○夜あけもてゆくは、夜の漸く明くるをいふ。もては、かろく見るべし○かたおきは、下賤の翁の義なり。かたおは、もと、乞食をいふ語なれど、轉じては、卑賤なるものをいふ○板じきの下とは、疊をしきたる次なる板敷の、其の下の方の地上をいふ○人に皆よませて云々、卑賤なる翁なれば、人にですぎぬやうに、皆、人のよみたるのちに詠むさまなり

しほがまにいつかさけけん朝なぎに

釣する船はこゝによらん

(語釋) 朝なぎは、朝の間の波のなきて、穩かなるをいふ○よらんは、寄れかしといふ意なり○一首の意は、こゝをまことの鹽竈の浦に見たてゝ、この遠き陸奥のしほがまへ、何時の間にか、我は來にけん。今、朝なぎのけしき、いはん方なし。定めて、この朝なぎを機として、釣する船も出づるならん。其の船、こゝによれかし。又、一層のなかめならんとなり

となんよみける。みちの國に、いきたりけるに、あやしくおもしろき所々おほかりけり。わがみかど、六十餘國の中に、しほがまといふところに、似たる所なかりけり。さればなん、かの翁、さらにこゝをめでゝ、志ほがまに、いつかさけけんとは、よめるなりける

(語釋) みちの國にいきたりけるには、彼の翁の、はやき時に、陸奥に行きて見たらしゆゑに、かくはいへるよしなり○わがみかどは、我が朝といふに同じ○似たる所なかりけりは、此の浦の風景、殊に勝れて、他にこのけしきに似たる所もなしといふ意なり○さればなん云々は、六十餘國に、似たる所もなきほどの勝地なれば、彼の翁、まことのしほがまなりとおもひて、此の歌をよみたるは、ことさらに、こゝをめでての事なりと、記者のいへる詞なり

(八十一段)むかし、これたかのみ子と申す御子おはしましけり。

(語釋) 惟喬の御子は、文德天皇、第一の皇子にて。御母は、紀の靜子、正四位下紀の名虎の女におはせり。此の親王は、承和十一年にうまれ給ひ、貞觀十四年七月に、出家したまひ、法名を算延と申しき。おほ、總論の處に、委しくいへり。參考すべし

山さきのあなたに、みなせといふところに、宮ありけり。年ごとの、櫻の花さかりには、その宮へなん、おはしましける。

(語釋) 山崎は、山城の國、乙訓の郡にて、水無瀬も同じ所なり。類聚國史、三代實錄等に、水生とある所なり。こゝに、惟喬親王の御別業ありて、櫻のさかりには、必、おはします例なりきとなり其の時、右の馬のかみなりける人をつねにおておはしましけり。時世へて、久しくなりければ、其の人の名をすれにけり。

(語釋) こゝの右の馬は、業平朝臣なること、下の歌をもにて、明らかなり。さるるを、ことさらに、其の名、忘れにけりといへるは、かへりてあるなり

かりけり、ねんごうにもせせ、酒をのみのみつゝ、やまと歌に、かゝれりけり。

(語釋) かりは、鷹狩をいふ。一説に、こゝのかりは、あまり突然なれば、櫻がりの意にはあらじかといへど、なほ、鷹狩の事に見る方よろし。此の物語は、極めて文を省きたるかきざまなれば、こゝも、例の省きたるなり。それは、水無瀬、交野あたりは、名高き狩場なれば、親王の別業を、こゝに立て給へるも、狩に便ならんがためなるべし。されば、其の所にゆづりて、殊更に、狩の事をいはぬなり、さて其の目的なる狩は、かたはらになして、心とめてもせぬよしなり○やまと歌とは、唐詩に對していふ事なれど、うつりては、たゞ、歌といふべき處にも、かくいふなり。こゝも然り今かりする、かた野のなぎさのおんのさくら、こどに、たもしろし。その木のもとにおりおて、枝を折りて、かざしにさして、かみなかしも、みな、歌よみけり。うまのかみなりける人の、よめる

(語釋) 古意に、こは水生より、河内の國の交野郡の交野に至りて、狩りしたまふなり。こゝは、天皇の御狩場なれど、まだ、其の頃には、禁せられざりしか、又、一の御子なれば、心にまかせて、遊びたまふか。さて其所の渚の院は、度々、御狩あるゆゑに、離宮めきたる院のありしにや。此の親王のは、既に水生にあれば、又はあらじかし。此の院のさまは、土佐日記にも見ゆたり云々といはれたり○おりおては、馬よりなり○枝を折りてかざしにさして云々、櫻の枝を折りて、頭にかざすは、いたく、花を賞翫するしわざなり

世の中にたえてさくらのさかざらば

春のこゝろはのどけからまし

(語釋) のどけからましは、開けくあらましなり。のどけしは、今言に、ユウ／＼したる意なり○此の歌、今古集にも、土佐日記にも出でたり○一首の意は、さかぬほとは、咲をまち、咲く時は、散るををしみ、盛なるほとは、雨をいとし、風をおそれなと愛するあまりに、心のいとしまなきより、なべて世に櫻といふものゝ、絶えてなくば、春の心は、なか／＼、のどかならんとなり
となんよみたりける。又、人のうた
ちればこゝろいとさくらばめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

(語釋) めでたければ、今言に、結構なれなどいふに同じ○此の歌は、前の歌を承けて、君は、櫻の花が、早く散るゆゑに、心のどかならず、わろしとのたまへど、我はさは思はず、櫻は結構なるものなるうへに、散ればこそ、いとよけれとおもふなり。その故は、此うき事おほき世に、どうしてか久しくあるべき。はやく見きりて、散るも道理よとなり○さて右の二首は、此の親王、つひに、世を遁れ給ふ前兆のやうにつくれるなり。この親王、御位に即きたまふべかりしを、良房大臣のはからひにて、弟の惟仁親王の立ち給ふ勢なりしかば、御不平の事ありしは、既に總論にくはしくいへるが如し。参照して事實を知るべし
とて、その木のもとはたちてかへるに、日ぐれになりぬ。御もなる人、酒をもたせて、野より出でたり。この酒をのみてんがて、まゝ所をさへもかへりて、まゝの

河といふところに至りぬ。

(語釋) 御もなる人云々、此の人は、渚の院に従ひまゐりたる人にはあらざ、これも、御供なる内の人、水無瀬の宮より、直ちにまゐれる人といふ○野のかたより云々は、渚の院の方にはあらざ、野の方より出で来たりとの意なり。酒をもたせて来たるは、もとの酒の盡きたらんことをおもひてなり○あまの河は、交野の近邊にあり

みこに、馬のかみ、大御酒まいる。みこののたまひける、かた野をかりて、あまの河のほとりにていたるを題にて、うたよみて、さかづきはさせとのたまひければよみて、たてまつりける

(語釋) 大御酒は、神、また、貴人にまゐらす酒をいふ○まゐるは、まゐらすといふ義にて、盃を献るをいふ

かりくらしなばたつめにやどからん

天のかはらにわれはきにけり

(語釋) かりくらしは、狩暮し居ての義なり○たなばたつめは、織女をいふ○天の河原は、天上の天の河原にとりなしたるなり○一首の意は、天の河原は、織女の家ある處なれば、わざと、狩りくらししてその織女に、宿からんとす

と聞てゑければ、此の歌をみて、かへす／＼、すしたまひて、かへしえしたまはず。紀のありつぬ。御供につかうまつれり。うれがかへし

(語釋) すしたまひは、誦し給ひなり。此の歌のおもしろさに、幾度も吟誦したまひて、御感のあまり、返歌も、おと出でねば、有常が、代りて、返歌せりとなり
一とせにひとたびきまます君まてば

やどかす人もあらじとぞおもふ

(語釋) 織女は、たゞ、彥星をこそ待て、他人に宿はかさじとおぼゆとなり。此の君は彥星。人は織女をさせるなり

かへりて、宮に入らせ給ひぬ。

(語釋) これは、日くれて、歸り給ふなれば、都の宮にはあらで、天の河の近邊なる、水無瀬の宮なるべしと、古意にいへるが如し

夜ふくるまで、酒のみものがたりして、あるじのみて、多ひて入りたまひなんとす。十一日の月も、かくれなんとすれば、彼の馬のかみのよめる

(語釋) あるじのみこは、惟喬親王といふ○あひては、酔ひてなり

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山のはにげていれずもあらなん

(語釋) あかなくには、飽き足らぬになり○まだきは、時よりもはやきをいふ○かくるゝかのかは、かなの意にて、歎息の詞○なんは、願の意なり○この歌は、親王の寢所に入りたまはんとすると、月の入るにたゞひたるなり○一首の意は、見もかぬに、入るべき時より、かくるゝ月のあくるゝ

みこにかはりたてまつりて、紀のありつね

おしなべて峯もたひらになりなん

山のはなくば月もかくれじ

(語釋) なりなんは、りなの約、ならねばならんといふを延べたるなり○一首の意は、山のはにげて、入れずもあらなんと、君のたまふ如く、われも、おしなべて、峯も平地のやふになれかしとおもふなり。月は、山の端にかくるゝものなれば、山の端なくば、かくれじといへるなり

(八十二段)むかし、みなせにかよひたまひし、惟喬のみて、れいのかりしにおはしますとも、馬のかみなるおきな、つかうまつれり。日頃へて、宮にかへりたまひけり。

(語釋) 水無瀬に通ひ給ひしは、御別業のありけるゆゑなり。そのよし、前段にあれば、省きてかけるなり○宮は、都の宮なり

御おくりしてとくいなんと思ふに、大御酒たまひ、ろくたまはんとて、つかはさざりけり。此の馬のかみ、こゝろもどながりて

(語釋) 御おくりしては、水無の宮より、京の宮へ御送りしてなり。日頃へたることなれば、疾くかへらんと、馬のかみは思へど、親王は、今宵は、宮にとゞめんの御心にて、御暇たまはぬよしなり○ろくは、祿にて、御褒美などいふに同じきこと前にいへり○心もどながりとは、早く御暇たまはら

んど、待ちかぬるよしなり。さて歌をよめるなり
枕とて草ひきむすぶ事もせし

秋の夜とだれたのまれなくに

(語釋) この舊註、まち／＼なり。新釋の説よろし。其の要にいはく此の歌の意は、日頃、旅にありつれば、今宵は、家にかへるべし。とふめ給ふとも、かりそめの枕もどらじ。せめて、秋の夜となりとも、たのみにすべき長夜の頃ならば、今しばし悠々としても、宜しけれども、三月の短夜の頃にては、さやうに、たのまれぬに、かくひきとふめ給ふは、つらし。はやく、御暇たまへといふ意を、いひのこしたるなり。草ひきむすぶ事もせしとは、かりそめの枕もせしといふことを、旅に出でたるをりの事なれば、草枕に思ひよせて、いへるなり。こよひは、とまらじといふ意にありける。秋の夜とたのむとは、秋の夜ならば、悠々としても、夜長なればと、たのみにせらるゝをいふ。たのまれなくには、たのまれぬにといふ意なれば、いひさしたる詞にて、かくとふめ給ふは、つらし。はやく、御いとま給へといふ詞の外に残れり云々

とよみける。時は、やよひのつこもりなりけり。みこ、大どのこもらで、あかしたまひてけり。

(語釋) 三月のつこもりなりけりとは、春の短夜の頃なるをしらせたる文なり○大どのこもらでは、大膽籠らでなり。貴人のいね給ふを、大膽をもるといふ。親王が、かく大どのこもらで、酒宴などして、夜をぬかし給ふは、侍場のなごり、能くあはしてなるべし

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを

(語釋) かくしつゝは、かく御侍の御供は、更なり。かへらせ給ひても、終夜、御酒宴の御物語などして、仕へ奉りきとなり。古意には、親王の大殿こもらであかし給ふは、出家し給はんとして、名残を惜みたまひしなりといはれたれど、新釋には、「枕とて」の歌よみしは、出家し給ふ時とは、年月へだれりといへり。いづれに見ても、ありぬべし

思ひの外に、御くしおろさせ給ひて小野といふ所にすみ給ひけり。

(語釋) 思ひの外は、案外の義なり。惟喬親王は、第一の御子にて、世の御おぼえもおはせるに、出家し給へれば、馬の頭の案外に覺えたるよしなり。三代實錄に、貞觀十四年七月、惟喬親王、寢疾頓出家、爲沙門とあり。此の時、御年二十九○小野は、山城の國、愛宕の郡なり

む月にをがみ奉らんとて、まうでたるに、ひるの山のふもとなれば、雪いとたかし。まいて、みむろにまうでゝ、をがみ奉るに

(語釋) む月は、陰曆、正月をいふ○雪いとたかし云々、雪のたかく積りて、なれぬ都人のあゆみかねたれど、こゝろざしのおかければ、強ひて、あゆみて、御室に詣でたるなり

つれ／＼と、いとものがなくして、おはしましければ、やゝ久しくさむらひて、いにしへの事など、思ひ出で、聞てゑさせけり。

(語釋) つれ／＼は、徒然の義にて、なすわざもなく、おはしますさまをいふ○ものがないは、何となく、悲しきよしをいふ。正月にて、世は公私とも、何くれといそがしきに、徒然なるさまにおはす

るが、もの悲しきなり○いにしへの事とは、水無瀬、交野に狩りし給ひしことなどは更なり。すべて世に勢のおはしける時の事をいふ。これ、惟喬親王の世を憤りまして、隠遁したまへる事をあらはせるなり。これも、總論にいへり

さても、さむらひてしがあとおもへど、れほやけ事どもありければ、えさむらはで、夕ぐれにかへるとて

(語釋) 今宵は、こゝに止まりて、御物語したく思へど、去り難き公事ありて、其の日の夕ぐれに歸るなり。正月なれば、公事のしげきこと、似つかはし

わすれては夢かどう思ふおもひきや

雪ふみわけて君を見んとは

(語釋) おもひきは、兼ねて思ひて、ありけるやはの意にて、案外なるをいふ○天皇の御位にもつきたまふべき君の、山里の雪の中に、つれくとしておはするを見て、こは夢かとおもふとなりどてなん、なくなき、きけける

(語釋) 泣きながら歸り來にけりとなり。この詞にて、歌のこゝろ、いとゞあはれに覺ゆるは、例の作者の巧なるなり

(八十三)むかし男ありけり。身はいやしなから、母なんみてなりける。その母、長岡といふところけり。すみけり。

(語釋) 身はいやしなからむかし、その母は、長岡の邊にありけるなり。

暗に、業平朝臣の事をいふ○母なんみてなりけるは、業平朝臣の母は、伊登内親王なれば、かくいふ。さて伊登内親王は、桓武天皇第八の皇女なり。業平朝臣の御父は、阿保親王にて、御母も、内親王なり。しかるに、時勢を得ずして、つひに、身をはからかし、世をいとひたることは、總論にいへるが如し

子は京にみやづかへしければ、まうづとしけれど、まばく、えまうです。ひとり子にさへありければ、いとかなうしたまひけり。

(語釋) まうづとしければ、詣でんとしければなり。心にかけて、詣でんとしければ、宮仕いとまなかりしかば、たびくも詣ですとなり○ひとり子にさへありければ、殊に、寵愛せる意なり。業平朝臣は、伊登内親王の一人子なればなり。三代實錄に、業平者、故四品阿保親王第五子、正三位行中納言行平之弟也、阿保親王娶桓武皇女伊登内親王、生業平云々と見えたり。業平と行平と、父の同じきことは、更に論なけれど、母は異なりて、伊登内親王の御腹には、業平一人なりしなり○かなうしたまふとは、殊に、勝れて愛し給ふ義なり

さるほどに、まはすばかりに、とみの事とて、御文あり。おどろきて見れば、ことごとばなくて、

(語釋) さるほどには、然ある程になり○しはすは、陰曆、十二月をいふ○とみは、頓の字をあつ。にはかなるをいふ。こゝは、急なる事とて、御消息ありきとなり○ことごとくなくてとは、異事なくの義なれば、他の事はなにもなく、たゞ、つぎの歌のみありきとなり

おいぬればさらぬわかれのありといへば

いよく見まほしき君かな

(語釋) さらぬわかれとは、去りがたく、逃がれ難き、別の意にて、死別をいふ○いよくは、物の一つある上に、今やひとつ添はるやうの意ある詞なり○見まほしきは、見たく思ふの意なり○此の歌、とみの事とて「などあるをおもふに、伊登内親王が、病に臥し給へる時の歌なるべし○一首の意は、老いぬれば遁れがたき死別といふ事のありといへば、さらぬだに逢ひたきに、いとい、君には逢ひたく思ふこととなり

となんありける。これを見て、馬にものりあへず、まねるとて、いといたう。うちなきて、みちすがら思ひける

(語釋) 馬にものりあへずは、馬に乗るひまもなくなり。京より長岡は遠ければ、馬にて往くべきに、馬に草飼ふ暇も、心いそがれて、出で往きとなり○みちすがらは、道々なり。このあたり、文、簡にして意ふかし

世の中にさらぬわかれのなくもがな

千世もといのる人の子のため

(語釋) かなは、例の願望の意なり○人の子とは、たゞ、子といふ意にて、こゝは、自分のことなり○一首の意は、世の中に、遁れがたき死別といふことは、なくとも、千世もといのる人の子のためとなり

(八十四) おかし男ありけり。わらはよりつかうまつりける君。御ぐしぞろしたまひてけり。

(語釋) つかうまつりける君とは、暗に惟喬親王を申せるなり。業平朝臣は、惟喬親王より年まより。されば、わらはよりつかうまつるとは、いふまじけれと、かく事實をあらぬさまにかきまざりしたるは、例の作者の心しらばなり

む月には、かならず、もうでけり。おほやけの宮づかへしければ、つねには、あまうです。されど、もとの心うしなはで、もうでけるになんありける。

(語釋) もうでは、貴き人の許へゆくをいふ。こゝも、親王なればいふ。正月は、今の世にも、人のもとへ禮にゆく事あれば、其の心にて、必、まねりとなり○もとの心うしなはで云々、惟喬親王には、はじめより仕へ奉りしことなれば、親王、御出家の後も、もとの心を失はずして、訪ひ慰めまねらせきとなり

むかしつかうまつりし人、ぞくなるせんじなる、あまたまねりあつまりて、む月なれば、こどだつとて、大御酒たまひけり。

(語釋) せんじは、前にいへる如く、禪師にて、法師をいふ。されば、ぞくなるせんじなるとは、俗人と、法師とをいふなり○こどだつとは、常に異なるをいふ。正月なれば、つねの月には、異なりとて、御酒たまひきとなり

雪こぼすがどふりて、ひねもすにやまず。皆、人あひて、ゆきにふりこめられた

(語釋) 雪てぼすがことは、雪のいたく降りて、入れたる物をこぼすが如くなるをいふ。ことは、如くなり○ひねもすは、終日の意なること、前にいへり。かく大雪なりしかば、人、皆、杯をいくたびもめぐらして、酔ひきとなり

雪のつもるづわがこゝろなる

とよめりければ、みこいといたうあはれがりたまうて、御うぬぎて、たまひけり

(八十五)むかし、いとわかき男、わかき女をあひいりけり。おのく、おやどりければ、うゝみて、いひなごてやみたり。年長にて、女のよきより、養へる事、

げんといへりければ、興うたをよみてやれりけり。いかゞおもひけん

(語釋) わかき男とは、幼き男といふ義なり。わかき女も同じのいひへりけりは、契らんといひよりしなり。こゝは、男の方より契らんといひよりしなり。されど、當時は、互に親ある身なれば、恐れ包みて、いひ出で、止みしが、年を経て、今度は、女の方より、猶、この事、隠られず、しどげんといひやりしかば、男、いかゞ思ひけん、かゝる歌をよみて、やりきとなり。○いかゞおもひけんは、女、の心をいふにあらず。男の方にかけて見るべし。

今までにわすれぬ人は世にもあらじ

おのがさまぐ年の經ぬれば

(語釋) この解、新釋よし。其の説にいはく、歌のこゝろは、猶、この事とげんとのたまへど、いひかはさんどしたりしは、互に幼きほどの事にて、其の後、異男コトナトコにあひ給ひなど、おのがさまぐ、年經ぬれば、今までに、わすれぬ人は、世にあらじ。君もわすれ給ひしものにて、今、また、さやうにいひたまひても、まことに思ひ給ひてのことにはあらじ。たのみ難しといへるなり。さるは、はじめいひかはさんどしたる中なれば、かく女の心を疑ひたる歌は、よむまじき事なれば、「いかゞおもひけん」と、はしに記者の詞をそへたるなり。心をつくべし。おのがさまぐとは、此の女、その後、こゝ男にあひて、わすれられな思して、又、はじめいひさしたる男にかたらはんとしたるものとぞ思はるゝ。さるからに、かく疑ひたる歌よみて、やりて、やみたるなり云々

とてやみけり。男、女のあひはなれぬ宮づかへになん、出でにける

(語釋) 男、女をなにも思はず、其の女の居る、ひとつ所へ、宮づかへに出でけりとなり○あひはなれぬは、一つ宮をいふなり

(八十六)むかし、男、津の國、うばらの郡、あしやの里に、しるよしきて、いきて住みけり。むかしの歌に

(語釋) しるよししてといふ意は、初段にくはしくいへり。参考すべし○むかしの歌には、たゞ、古歌にといふ意なり

あしこのやのなだの志はやきいとまなみ

つげのをぐしもさゝずきにけり

(語釋) この歌は、萬葉集、石川郎女が歌に、「しかのあまはめかりしはやきはいとまなみ、くしげの小櫛とりも見なくに」とありて、筑前の國、しかの海人をよめるなるを、所をかへ、詞をかへて、この芦やの里の古歌としたるは、例の作者のたくみなるなり○一首のこゝろは、あし屋のなだのしほやく蜚が、いとまなさに、とりまぎれて、つげの小櫛もさゝず、容貌をつくることだにせずて、世をわたるとなり

とよみけるは。この里をよみけるなりけり。こゝをなん、あしやのなだとはいひける。

(語釋) むかしの歌にといふより、この詞までは、皆、記者のことばなり
此の男、なまみやづかへしけり、とれきたよりして、衛府のすけも、あしやの

きにけり。この男のこのかみも、衛府のかみなりけり。

(語釋) なまは、前になま心とある處にいへるが如く、すべて、其の事に精熟せざるをいふ、生意氣生兵法などのなまと同じ。こゝは、散位、または、權官などにて、知行所にゆきて、遊びなどしてをるをいふなるべし○それをたよりに云く、衛府の佐^{スケ}ども、來たれるを見れば、業平朝臣の右兵衛權佐なりし時を、暗にいへるなるべし。衛府の佐とは、左右衛門、左右兵衛の佐などの人々をいふ○このかみは、兄をいふ。これも、暗に、行平卿をさせるなり。衛府のかみとあれば、行平卿の左兵衛督などにてありし時をいへるなり。此の兄弟の任官、年代のたがひあるを、かく同時のやうに書きまぎらしたるは、例のことなり

其の家のまへのうみのほとりに、あろびありきて、いざ此の山のかみにありといふ、ぬの引の瀧見にのぼらんといひて、のぼりて見るに、

(語釋) いざは、人を誘ふ詞なり○ぬの引の瀧は、布引瀧にて、あしやの里と同郡なる、山中にあり生田川の水上なり。海邊より見れば、まことに、布を引きかけたる如く、二段におつる瀧なり。ゆゑにこの名ありといふ

其の瀧ものよりことなり。たかさ、二十丈、ひろさ、五丈ばかりなるいしのおもてに、あらしぬにいはをつゝめらんやうになん、ありける。

(語釋) ものよりことなりとは、他のなみくの瀧に異れりとの意なり○いしのおもてに云々、石の面になり。この下に、「ながれおつ、其のさま」といふ詞を加へて見るべしと、新釋にいへるが如し

○つつめらんとは、包みたらんの義なり

さる瀧のかみに、わらふだのれほきさして、さし出でたる石あり。其の石のうへに、はしりかゝる水は、せうかうじ、くりの大さにて、こぼれれつ。そこなる人みな、瀧のうたよます。かのゑふのかみまつよむ

(語釋) さるは、さめるの畧言なり○わらふだは、和名抄に、圓坐を訓めり、後の世の圓坐といふものも、これに同じ○せうかうじは、小柑子なり。三代實錄に、太宰府例貢小柑子云々など見えて、今の世の金柑なるべし。又、大かうじといふは、今の密柑のことなるべし○ゑふのかみは、行平卿をさせること、前の文にて知るべし

わが世をばけふかあすかとまつかひの

なみだの玉といづれまされり

(語釋) まつかひは、待つ間の意なり○一首の意は、年老いたる、我が命の、今日か明日かと待つ間の、何となく、心ぼそく、落つる涙の玉と、今見る瀧の水玉と、其の數のおほきこと、いづれまさるならんとなり

あるじ、つぎによむ

(語釋) あるじは、業平朝臣なり

ぬきみたる人こそあるじとしら玉の

ぬきみたる人こそあるじとしら玉の

(語釋) ぬきみたるは、貫きぬるなり。瀧の白玉をまことの白玉に見なして、よめるなり○一首の意は、瀧の上にて、緒に貫きたる、あまたの玉をぬきみだして、散らす人あるやうな、白玉のひまなくも散りかゝる事かな、我が身、いやしく、袖せばくて、多くはつゝみあへぬにとなり

とよめりければ、かたへの人わらふことじやありけん。此のうたをよみて、やみけり。

(語釋) かたへの人とは、あるじの外の人にて、側にありし人々をいふ○わらふことじやありけん云々は、よき歌の中に、わろきを出だしたれば、わらひとなりて、興さめたるにやありけん、人は、歌よまずとなりけりとなり

かへりくる道とほくて、うせじと宮内卿もちよしが家の前すぐるに、日くれぬ。

(語釋) かへりくる道とほくて云々、布引の瀧のほとりより、葦屋の里へは、三里ほどあればかくいふ○宮内卿もちよしは、いかなる人にか、知るによしなし

やどりのかたを見やれば、あまのいざり火、おほく見ゆるに、彼のあるじの男、よむ

(語釋) いざり火は、^{イザリ}漁に用ふる^{ダイマツ}炬火をいふ

はるゝ夜の星か川べのほたるかも

わがすむかたのあまのたく火か

(語釋) 新釋に、いはく、いざり火を、遠く見れば、げに星か、螢かと思すがふけしきあり。晴るゝ夜

としもいへるは、すこしにても、くもりたる夜は、星の數おほく見えねばなり。川べの螢とは、螢は川邊におほきものなればなり、一首のこゝろは、やどりのかたを見やれば、きら／＼するものゝ、かず／＼見ゆるは、晴夜の空の星か、川べにすたく螢か、あの見ゆる光は、マアと、奇異なるを歎息してれもへば、これはわがすむかたの螢のたく火ならんかといへるなり。かく解きたるは、第三句の螢かもといへるによれり。此のやすめ詞のまどくそへたるとは、歎息の意あれば、かならず、おのが説の如くなるべし云々といへるぞよき

とよみて、家にかへりきぬ。其の夜、南の風ふきて、なごりの波、いとたかし。つとめて、其の家のめのこどもいで、うきみるの浪によせられたるひろひて、いへのうちにもてきぬ。

(語釋) 家にかへりきぬは、あしやの里の家になり○南の風ふきて云々、こゝの南面は海なれば南風ふけば、濱邊に浪たかくよせ来るなるべし。其の夜、烈風なりしかば、其のなごりの波、夜あけても、いと高きなり○つとめては、其の翌朝はやくの意なること、前にいへるが如し○めのこは、女の子にて、すべて婦人をいふ事なるべけれど、こゝは、家にめしつかふ女と見えたり○みるは、海松なり浪にゆられて、浮きて、濱邊により来るをいふ。さてかく女どもの海松をひろひくるは、客人にまゐらせんとてなるべし

女がたより、其のみるをたかつきにもりて、かしはをほひて、出だしたり。このかしはにかくかけり

(語釋) つきは、折なり、折は、すてん、食物をいふ、其の中に、たけなごも、たけなごは、かなりのかしはをほひて云々、柏の葉は、木葉の中にも、はゞ廣くて、おほかにたよりよければなるべし。上代には、かしはに食物を、たゝちに盛ることさへありき。膳部を、カシハデとよひは、其の證ともいふべきか

わたつみのかざしにさすといはふも

君がためにはをしまざりけり

(語釋) わたつみは、海神をいふ○かざしは、挿頭なり。人は、花、紅葉などをかざしすなれど、海神は、藻をかざしにさゝんとなり○さすとは、さすどての意なり○いはおは、いつくといふ意に同じく、大切にするをいふ○一首の意は、海の神のかざしにさすどて、大切にしたまふ藻も、君がたのために惜しまず、風にて濱邊へよせられれば、取りてまゐらすなりとなり

おなか人の歌にては、あまれりや。たらずや

(語釋) あまれりや、たらずやは、あまれりの方おもく、たらずやは、たゞ、添へたる詞なり。前の「よしやあしや」とあるに同じ。参照して、其の意を知るべし。この歌、田舎人としては、あまれりといふてゝるなり

(八十七)むかし、どわかきにはあらぬ、これかれ、友だちどもあつまりて、月を見て、それがなかに、ひとり

(語釋) いどわかきにはあらぬ云々、いどわかきと物語書にいへるは、十二三歳より、二十歳以下

の人をいふなり。こゝは、わかきにはあらぬれば、二十歳以上なること、いふも更なり。諸抄に、四十歳位の事ならんとも、又は、四十歳以上の事ならんともいへり。これ、つぎの歌は、月に對して老を感じたる歌なればなり。されど、新釋には、いそわかきにはあらぬと、こと更にことわれるは、二十より、三十までの年なるべし。三十位になれば、随分ものゝあはれを感じて、かゝる歌よまんも、似つかはしからぬわざにはあらずといへり。いづれにてもあるべし。さて古今集には、題しらずとあるを、かく詞をうへたるなり。歌は、まがふべくもあらぬ、業平朝臣のうたなり

おほかたは月をもめでしこれぞこの

つもれば人のおいとなるもの

(語釋) おほかたは、凡そいふに同じ○めでしは、愛せずの意なり○これぞこのは、今言に、コレガアノなにくじやといふに同じ。古言に、彼のといふべきを、このといふこと多し○此の歌のころは、大抵の事ならば、おもしろき月をも、おかくはめてし、これが、彼のつもりつもれば、人の老となる、年月の月なるものととなり、さて此の歌、上の句は、天の月の事をいひ、下には、年月の月に轉じたるなり。巧なること想ふべし

(八十八)むかし、いやしからぬ男、われよりは、まさりたる人をれもひかけて、年へにけり

(語釋) いやしからぬは、身分のかるからぬをいふ。身の輕からぬ人は、容易に口にもいひ出だし

人しれずわれこひしなはあぢきなく

いづれの神になき名おふせん

(語釋) 人しれずは、口に出ださねば、思ふ人のしらぬをいふ○あぢきなくは、もと、味氣なくにて、今言に、ウマクナイ、又、グアイワロシなといふ語なり。それよりうつりて、無益、また、いたづらなどの意となれり。こゝも、うつれる方にて、意きこゆ○一首のころは、思ふころを人に知られず、いたづらに戀ひ死なば、人は神のたゝりにて、死にきといふべし。さては、神になき名おふせ奉る道理なるが。其の無名のつみを負せまつらん神は、いづれの神にかあらんとなり。諸説くどくしきが多し。新釋の説よろし

(八十九)むかし、男、つれなき人を、いかでとおもひこひわたりければ、あはれとやおもひけん。

(語釋) つれなき人を、いかでとおもひ云々、男、わが方にたやすく靡かぬ女を、どうして、手に入れんと思ひて、年比、戀ひわたりきとなり。女も、はじめは、かくつれなかりしが、男の年比熱心なるにほだされて、あはれと思ひけんとなり

さらば、あすものこして、ものばかりをいはんといへりけるを、かぎりなく、うれしく、又うたがはしかりければ、おもしろかりける、櫻につけて

(語釋) さらばあす云々、前にいへるが如く、女も男の情のあつきにほだされて、然らば、あすあは

んといひしなり○ものごしにて、ものいふとは、簾、または、ふすまなどを隔て、話するをいふ○
かぎりなくうれしくおもふは、男がなり○おもしろかりける櫻とは、花のさかりなる櫻をいふ。か
くさかりなる花を折れるは、程なく散るものなれば、歌に、今日こころかくはといはんためなり。用意
こまやかなりといふべし

さくら花けふこころかくはにほふともうめ

あなたのみがたあすのよのこと

(語釋) あなたは、あといふに同じく、歎息の詞なり○一首の意は、おほかた聞てゐたる如く、櫻花
今日こころかくさかりに匂ふとも、嗚呼、たのみがたけれ。明日は散るかもはかりがたし。君もこの花
の如く、今こころかくのたまへれど、明日の夜のことは、たのみがたしといへるなり

といふ心ばへもあるへし

(語釋) この解、舊説わろし、新釋にいはいく、戀の歌は、あなたを心あさきまにいふが、つねの
事なれど、さばかり、つれなき人の、にはかになびくさまにいへることなれば、男のうたかひて、あ
なたのみがた、あすの夜の事といふ心ばへも、實にあるべしと、記者のいへる詞なり云々

(九十)むかし、月日のゆくをさへなげく男、やよひのづこもり

(語釋) さへは、物の一つある上に、また加はるやうの處に用ふる詞なり。そのうへなごの義なり。
こゝも思ふ人に逢ふ事の出来ぬのみか、月日のいたづらに、經ゆく歎ある意を、含めたるなり○あ
よひのづこもりとは三月下旬の義なり

をしめども春のかぎりのけふの日の

夕ぐれにさへなりけるかな

(語釋) さてこの歌は、後撰集に、題しらず、よみ人しらずとありて、第三句を「けふまた」に作れ
り。後撰集にては、たゞ、春のつくるを惜む歌なるを、こゝには、詞を加へて、思ふ人にえあはで、い
たづらに、過ぎゆく月日を惜しむに、今日は、春のわかれもうちをへて、いとゞ、をしめ、かなしき心
とせり。作者の巧みなること、驚くに堪へたり

きゝしる人もなしや

(語釋) 右の歌、れもてには、春を惜しむ意をあらはし、うらには、思ふ人に逢はで、月日の經ゆく
をうらむるなるが、此の歌のこゝろを、聞き知る人もなしやとなり。これ記者の詞なり

(九十一)むかし、をどこ、こひしさにきつゝかへれど、女にせうろこをだに、にせ
でよめる

(語釋) きつゝかへれどは、戀ひしさに、度々、女の居る近邊までは、來たれども、逢はでかへれど
の義なり○せうろこは、消息にて、文にて音信することをもいへど、こゝは、懸想詞をいひかくるを
いふ。懸想詞をいひかくるをも、せうろこといふこと、前に委しくいへるが如し
あしべこくたふしをぶねいくろたび

ゆきかへるらんしる人なしに

(語釋) あしべこくは、芦邊漕くなり○たななしをぶねは、棚なし小舟にて、船棚の無き、小さき舟

をいふ○いくろたひは、幾十度なり○あまたゝび來たれど、女にさとりもしられでかへるを、芦のしげみを行きかへる、小舟の見えぬにたどへたるなり○こは、古今集にのみ人しらず、「堀江こゝ棚なし小舟こぎかへり、同じ人にやこひわたるべき」とあるをなほして、例の作者のつくれるものなるべし。又、棚なし小舟といふことは、萬葉などにもよめり

(九十二)むかし、男、身はいやしなくて、いとたかき人を、おもひかけたりけり。すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけん。ふしておもひ、おきておもひ、思ひわびてよめる

(語釋) 身はいやしなくて云々は、身の官位などひくゝて、勢力なき身なるに、すぐれて官位のたかき人を懸想したるなり○すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけんは、記者の詞なり。男はいとく戀ひしたへど、少しも、頼みとすべき様子見えすして、女はつれなきよしなり○ふしておもひ、おきて思ひは、其の思、切にして、身も轉輾するまでこがるゝよしなり

れふなく、れもひはすべしなうへなく

高きいやしきくるしかりけり

(語釋) おふなくは、隨分の義にて、我が身の分にしだかふ意○なうへなくは、比類なくの意にて、比類せざるをいふ○一首のこゝろは、身の分に應じたる戀こそすべけれ、賤しき身にて、比類せざる、いはゆる世にいふ、灯燈につもかねといふ如き、不相應の戀は、すまじき事よ、かく成りかた

むかしも、かゝることありけり。世のことわりにもありけん

(語釋) むかしもかゝることありけりは、今人も、戀に貴賤の區別なく、かゝる事、世におほし。やはる昔の人にも、かやうなることありきとなり○世のことわりにもありけんは、戀のためには、かく苦勞するも、古今、共にまゝあるならひなるは、これ人情の道理にやあらんとなり

(九十三)むかし、男、女ありけり。いかゞありけん。其の男、すまじなりけり。のちに、男ありけれど、子ある中なりければ、こまかにこゝろあらねど、時々、ものいひれこせけり。

(語釋) すまじなりにけりとは、男が女の許へ通はぬやうになれるをいふ。すむは、住むにて、男女、共に居ることをいふ○のちに男ありければ、はじめの男にはあらで、異男なり○子ある中なりければ、はじめの男とは、子まで生みたる間なれば、むかし、相住みし時にくらべて、こまやかに語り合はねど、しかしながら、舊情もだしがたくて、時々ものいひやりきとなり

女のかたに、ゑかく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすて、ひと日、ふつか、おこせさりせり。

(語釋) 此の處の文きこえにくし。但、新釋に、女のかたにと、句を切りて、此ののてにはは。扇に云々へかゝれり。此の女、繪かく人なりければ、女のかたに、扇にかきにやれる心なり。ものすどは、來て居ることを、大やうにいへる詞なりといへり。しばらく、此の説に従ふべし○大和物語に、

染殿の内侍といふ、いまずかりけり。それを、よしありのおど々申しけるなん、時々すみたまひける、物をよくしたまひければ、御衣をもをなんあづけさせたまひけるに云々、又、いはく、在五中將すまくなりてのち、中將のもとより、きぬをなんねてせたりける。これにあらはひ(洗ひを延べたる詞)などする人なくて、いとわびしくなんど、いひやりけるを、猶、必して給へどなんありければ云々あるは、この文をかきかへたるものなるべし。元來、大和物語は、伊勢物語を書きかへたる處おほし。其の中に、人の名を明らかにかけるは、さるいひつたへありし故にもあるべく、又は、推量してあてたるにもあるべし、されば、必、證とはしがたきこと更に論なし

かの男、いとつらくて、おのがきこゆる事をば、今までしてたまはねば、ことわりと思へど、猶、人をばうらみつべきものになんありけるとて、よみてやれりける。時は、秋になんありける

(語釋) いとつらくて、甚、つらく思ひての意なり。○おのがきこゆる事をば云々、これよりなんありけるまでは、男の詞なり、きこゆることは、こゝにては、頼む事といふほどの意なり。おのれ、今は住まずなりて、異男の來て居る事ゆゑ、己が頼みたる、扇の繪をすみやかにかゝぬは、道理なりと思へど、猶、うらめしくおぼゆとなり。○時は、秋になんありけるは、記者の詞にて、つぎの歌に、今の男を秋に、我が身を、さきに春にたとへたれば、うれを釋したるなり

秋の夜は春日もするゝものなれば

春の夜は秋の夜もするゝものなれば

故は、春の露よりも、秋の露がたちまさりて、よきゆゑならんとなり。さて裏には、我を隠れて、今の男に思ひつき給ふは、我にまさりて、今の男の、容貌の美しきがゆゑなるべしとなり。己を春と、露とに見たて、異男を秋と霧とに見たてたるなり。さて露より霧のかた、たちまさらんといひて、怨むる意を含めたるなり

どなんよめりける。女かへし

千々の秋ひとつの春にむかはめや

もみちも花も共にこそちれ

(語釋) むかはめやは、むかはんやは、むかひはせじの意なり。○一首の意は、千々の秋も、一つの春にむかひはせじ。いたく劣れり。されど、秋の紅葉も、春の花も、共に散りやすきものにて、頼みがたしとなり。秋の紅葉を、今の男に、春の花を、はじめの男にたとへたるは、いふまでもなし。贈答ともにたくみなりといふべきなり

(九十四)むかし、二條の后につかうまつる男ありけり。女のつかうまつりけるを、常に見かはして、よばひわたりけり、いかでものこしにだに、たいめんとして、おぼつかなく思ひつめたる事、すこしはるかさんといひければ、女、いとこのびて、ものごしにあひにけり。ものがたりなどして、男

(語釋) 常に見かはして云々は、男も女も、二條の后に仕うまつりたれば、常に、互に見たるよしな

り○よばひは、呼ぶを延べたる言なり。こゝは、男の女を慕ふことに用ひたり。なほ、この詞、くはし
くは、竹取物語講義にいふべし○いかに物としにだに云々は、何とぞして、たとひ、障子あすまを隔
てでも、逢ひたしと、切に思ふさまなり。かくいふは、女のつれなくして、容易に逢ひがたきよしな
り。たいめんは、對面なり○おぼつかなく云々は、我に靡くか否か、不安心におもひつめたるさまな
り。おぼつかなしの語釋は、前にいへり○はるかさんは、晴るかさんにて、今言に、ハラサンといふ
に同じ。始終、女の心を不安心に思ひつめたるを、逢ひて、いさゝかにても、はらさんとなり○し
びては、人しれず、かくれてなし

ひこぼしにこひばまされりあまの川

へだつる關を今はやめてよ

(語釋) ひこぼしは、彥星にて、牽牛をいふ。我が戀は。その彥星にもまされりとなり。彥星は、一年
に、一度、織女に逢ふといへど、我はたましくあふ夜も、かく物としにてへだてあれば、彥星の織女
を慕ふよりも、我が戀は、まされりとなり○あまの川は、牽牛、織女の事をいへれば、其の語の縁と、
下のへだつといふ語の冠辭とにおけるなり○關は、今、物としに逢ふをいふとも見ゆれど、なほ、是
まで打ちどけずして、月日へたるをたとひたるなるべし。さてつれなかりし間は、止むを得ざれど、
かくしのびて、逢ふとならば、此の隔つる關を、今はやめてよといふ意なり。一首のこゝろは、たの
づから、聞てゐたるが如し

この歌にめでと、あひにけり

(語釋) 此の歌は、まことに切なるおもひをあらはしたるなれば、うれに感ぜし。女の心もどけし。
逢ひにけりとなり

(九十五)むかし、男ありけり。女をどかくいふこと、月日へにけり。いは木にしあ
らねば、心ぐるしとやおもひけん。やうく、あはれ思ひけり。

(語釋) いは木にしあれば云々、この女も、岩や木の如く、無情なるものにあらねば、さすがに、氣
の毒と思ひけん、漸々に、あはれと思ひきとなり。心ぐるしとは、今言に、氣の毒などいふに同じ。
古意に、苦に思ふと解せられたるは、いかゞ

その比、六月のもちばかりなり。女、身にかさ、ひとつ、ふたつ出でたりければ、い
ひおこせたる、今は何の心もなし。身にかさもひとつふたつ出できけり。時
もいとあつし。すこし、秋風吹きたちなん時、かならず、あはんどいへりけり。

(語釋) もちは、望の字をあつ。されど、必しも、十五日か、十六日の事にはあらで、今いふ中旬など
の意に見るべし○かさは、瘡にて、腫物の類をすべていふ。こゝは、今いふ、ねぶなどいふものゝ、
出でたるなるべし○今は、何の心も云々より、かならずあはん」までは、女のいひおこせたる詞な
り。是よりさきは、故ありて、つれなくしつれど、今は君の情をあはれと知りぬれば、何の思ふ子細
もなし。唯、たまたま、身に瘡も一つ二つ出で、殊に時も、六月中旬にて、盛夏の折なれば、少し秋風
たちて、清涼なる時折に、逢はんとなり

秋たつころほひ、女のち、其の人のもとにいくべかなる事きゝて、いひのこし

り、くぜちいできにけり。

(語釋) この文、いたく、省零せるがゆゑに、解しにくし。但、新釋に、うの人のもとにいくとは、女のむかへられて、男のもとにいくことなり。昔は、女の家、男のかよひてすむ事なるに、女をむかへんとするは、父に知られじと、ふかくしのふゆゑありて、女をむかへとりかくさんと、かまへたるなるべし。さるからに、父、その事をきゝつけて、はら立ちひのゝしるなり。くせちは、中昔の俗語にて、今の世に、やかましき事いできたりといふが如し。さて此の段、女は、母のもとにをり、兄は父のもとにをりて、家の異なるなり。さ心得て見るべし。其のよしを、くはしからぬは、中むかしは、大かたかやうの事なればなりといへり

さりければ、此の女のせうどにはかに、むかへに來たりければ、女、かへでののはつもみちをひろばせて、歌をよみて、かきれく

(語釋) さりければ、サアリケレばにて、前を承けていふ語なり○せうとは、兄^{セヒ}人の音便にて、兄のことなり○にはかに云々は、此の女を、母のもとにおきては、いかなる事の出でせんも計りがたければ、兄がむかへて、父のもとにおかんとするよしなり○はつもみちは、初紅葉なり。七八月の頃に、もまれには、色づきて、おつる木の葉もあるものなれば、それを拾はせたるなり。かくせるは、木の葉ふりしく云々といはんためなり

秋かけていひしながらもあらなくに

木の葉ふりしく云々といはんためなり

(語釋) 此の歌、心得がたし。古意には、秋の聲は、梨^シりし事なり、かくあらぬをよに思ひけり。また、浅き縁にて、有りけりとなり。さて既に、秋風吹き立ちなん時に、あはんと梨^シりしをいへば、其の時も過ぎて、木の葉の散りしくといひて、月日のうつり來しを、詞のつゞけにてしらせ、かつ、木の葉のちりつもる水は、浅くなるものなるをもて、あさき縁に江をうへて、たとへたり。かくむつかしきは、例の記者の歌なりといへり。又、新釋に、此の歌の解、拾穂、古意どもにおろそかなり。さては、あらなくにといふ詞にかなはず、臆斷も、ときさま、たろろかななるうへに、くたくしくて、一首の意、きこえず云々。この一首のころ、みな月の比より、秋風吹きたちなん時、かならずあひまゐらせん、とかくせんなど、秋かけていひしとほりにもあらず、いひしことは、むなしくなりぬるに、いたづらに、其の秋のみは來て、木の葉ちる時節になれり。さてくあさきはかなき縁なりきと、散れる木の葉につけて、いへるなり。さて木の葉ふりしく江は、水あさくなるものなれば、浅き事のためにも、かねいひて、江に縁をかねたり、とき得がたき歌なり。よくく、心とめて、見るべし云々といへり。まづは、新釋の説によるべきか

とかきおきて、かしてより人おこせば、これをやれとて、いぬ。さてのち、つひに、よくてやあるらん、あしくてやあるらん、いにし所もあらず。

(語釋) かしてより、人おこせば云々は、彼の男の許より、人よこしたらば、之をやれと、召しつかひの女なごに、紅葉にかきたる歌をわたしおきて、父の許へゆきたるなり○さてのちは、サウシテ後の義なり○よくてやあるらん、あしくてやあるらんは、男が女の身のうへをおもふことゝをいふ

なり○いにし所もしらずは、行方も知られぬよしなり

かの男は、天のさか手をうちてなん、のろひをるなる。

(語釋) 天のさか手をうちてなん云々、天のとは、いにしへの常にて、天より傳へたる事をはじめとし、物の稱美にも、奇妙なる義にも、冠らせいふ辭なり、さか手は、古事には、手を我が前の方にて打ち、凶事には、後方に手をめぐらして、打つなり。古事記上卷、事代主神、この國を天孫に避けて、海に入りたまふ時の文に、即踏傾其船。而天逆手矣、於青柴垣打成而隱也と見えたるは、逆手を拍ちて、船を青柴垣になしたまへるにて、今の世にいふ、まじなひなるを、こゝは、呪詛するわざにいへるなり。よりておもへば、上古には、逆手をうつは、たゞ、禁厭のわざなりしを、中昔には、呪詛する事に用ひたりきとも見えたり

むくつけき事、人ののろひひとは、れふものにやあらん、れはぬものにやあらん。今こそは見めどぞいふなる

(語釋) むくつけきは、恐ろし、又、氣味がワロイなどの意なり。こゝは、すべて、記者の詞なり。男の呪詛するを恐ろしき事かな、呪詛といふ事は、ろの呪詛せらるゝ身に負ふものにやあらん、おもはぬものにやあらん、それは知らねど、此の男は、今におもひしらせんとて、逆手を拍ちて、のろひをるなりとなり○むくつけといふ詞を、舊説に、報いがましき、又、むくきといふ詞なりなど、とかれたるは、更にあたらず

(九十六)むかし堀河のおほいさうちぎみと申す、いふところからけり。四十の賀、九

條の家にてせられける日、中將なりけるおきな

(語釋) 堀河のおほいさうちぎみ云々、おほいさうちぎみとは、太政大臣をいふ。これは、基經公。すなはち、昭宣公のことなり。公は、貞觀十四年八月に、三十七にて、右大臣の左大將となりたまひ、四十は、同十八年なり。此の時、まだ、業平朝臣は、中將ならず、翁ともいふべからぬほどなるを、かといふは例の此の文の書きざまなり。されど、歌は、古今集にありて、此の朝臣のなること、論なし○四十の賀云々、四十歳を初老といひて、祝ふことは、懷風藻に、正六位上刀利宣令詩五首賀五八年、從五位上總守伊岐連古麻呂一首言賀五八年宴云々と見えたり。されば、古代よりの習慣なり。皆、藤原の朝より、奈良の朝のはじめまでの人々なればなり○九條の家も、基經公の家なるべし

さくら花ちりかひくもれ老いらくの

こんといふなる道まがふがに

(語釋) ちりかひは、散りちがふ意なり。老いらくとは、唯、老といふ事に用ふ○がには、爲にの義なり○一首のこゝろは、櫻花よ、あまたちりちがひて、ろこらくらくせよ、老といふものゝ、來ん道まがふためにとなり○老をば、人の如くよみなしたるが、例のをさなくておもしるきなり。古人の歌には、かゝるをさなきが多き事、前にも屢いへり

(九十七)むかし、おほさいれほいさうちぎみときこゆるおはしけり、

(語釋) 此の文は、文德、聖和の御時のさまに書きたれば、其のほどの太政大臣は、藤原の良房公なり。公は、忠仁公と謚し、清和天皇御外祖父、天安元年二月に、太政大臣となり、同、四年、從一位に叙

せられ、二年十二月、攝政となり、貞觀十四年九月に薨せられき。堀河の太政大臣と申せるこれなり。こゝは、必しも、忠仁公と定むまじけれと、暗に公の事をおもひて、かけること、更に論なかるべし。

つかうまつる男、なが月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて奉るとて

(語釋) なが月ばかり云々、古意に、長月としもかけるは、夏より八月まで、雉を賞せず、又、々春は、まことの梅花あれば、作枝は用ふべからず。かれこれ思ひて、長月ぞよきほどして、いへるなるべし。之を以て思ふに、梅が枝に、雉をつくるも、花のある時は、其のまゝつくべきなり。花をこきおろして、つくるが故實なりといふは、故實を守るが如くにて、古意にはあらずといへり

我がたのむ君がためにとをる花は

ときしもわかぬものにぞありける

(語釋) この歌は、古今集にも、六帖にも、初の句は「かぎりなき」とありて、題しらず、よみ人しらすとあり。されば、時ならぬ、かへりぎきの花など折りて、朝廷に奉りし時の歌なるべし。それを、こゝには、はしがきに、梅の作枝とし、雉をつけたりと書いて、ときしもの詞に、きじをかくせりとつくりにしたるなり。○一首のこゝろは、我が頼みにする、君のために折る花は、我が心のいつもかはらぬにならひて、其の花も、時をわかつたず、つねに、咲きてあるものにぞありけるといふ意なり。かゝるか詞をかへて、意を異にせるは、この作者の例の事なりとよみて、たてまつりたりければ、いさかこゝへ、さかたかりたぬいへて、
まへにけり

(語釋) かしこがりは、賢きとりなしなりと。ほめたる詞なり。○をかしがりとは、今言に、おもしうがりといはんが如し。すぐれて、風流なりとめでたまふなり。○のろくは、祿にて、今の月俸、年俸などをいへど、うつりては、今の世の褒美などの義にもいふ。こゝもしかり。なほ、くはしくは、前にいへり。さてこゝは、記者の、みづから作りて、且、ほむるは、例のとりなしなり

(九十八) むかし、右近の馬場のひをりの日、

(語釋) 新釋にいはく、此の右近の馬場のひをりの日といふ事は、顯昭の説にて、やすく聞てゐたるを、世に難義なりといひ傳ふるなり、世この物しり人たち、とやかくやと思ひめぐらし、いろいろにまぎらはしくいひなしつゝ、今はまことに、難義と云なれりける。おのれ、顯昭のために、其のきたるぬれ衣をとりすてんとす。まづ顯昭の袖中抄に。右近の馬場は、一條より大宮の方をいふ。それより東の方は。左近の馬場なり。五月二日、左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、此の眞手詰の日、すなはち、ひをりの日なりといへるは、よくあたれることなり。さるを、岡部の翁、又、本居翁などは、此の日の競馬、騎射は、此の馬場にてはなきを、顯昭のしらでいへるなりとて、馬寮式、騎射式、左右近衛式の文どもひき出で、五月五日、六日の競馬騎射は、大内の馬場にて行はれて、帝、武徳殿にみゆきし給ひて、見たまふ事を、くはしくははれたり。されど、この説は、いまだしき事なり。そのゆゑは、五月五日、六日に、大内の馬場にて、ある競馬騎射は、帝のみゆきありて見たまふほどの事にて、延喜式にしろされ、左右近衛の馬場にてあるは、其

○伊勢物語講義

二百四十回

のうちならしめゑに、式には、さほうをしるされざるなり。荒手番、眞手番といふ名をおもふべし。乗手、射手をつがひてゝるむる心にて、俗語に、あらてゝるみ、本てゝるみといふが如し。北山抄に、正月十五日、兵部手結、十七日觀射、十八日賭射とあるにてもしるべし。兵部の手結は、賭射のうちならしにて、同じ心ばへなり云云、さて五月三日、四日は、あらてゝるみなり。五日、六日は、其當日にて、大内の馬場にまゐらぬさきに、左右近衛の馬場にて、本てゝるみをする事なれば、眞手番とはいふなり云々、此の眞手番は、朝はやくありけん、歌に、「あやなくけふやなかめくらさん」といへるも、あしたによめるにてこそ、よくかなへれ。大馬の馬場なるは、みだりに、人の見にゆく事かなはねば、此の本てゝるみを見んとて、物見事も出づる事なりけり。今昔物語には、今はむかし、右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、在原業平といふ人、中將にてありければ、大臣屋につきたりけるに、女車、大臣屋ちかく立ちてといへり。(かく右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるにと、今昔物語にさだくと見えたるを、岡部翁、本居大人など考へもらして、物に見えぬよしにはいはれたるなり) かくれば、右近の馬場にて、五月六日に、騎射ある事さだかにして、五日には、左近の馬場にてあるべき事、もとよりなり。されば、岡部翁の説も、本居大人のいはれたる事も、皆あやまりにありける。さて左近の荒手結のものに見えたるは、西宮記曰、是日、左府荒手結、恒例三日行之、而依大内御腦殿上佐籠御物忌、因彼日不行云々とあり。かくれば、三日は、左近の荒手結にして、四日は、右近の荒手結なることも知られたり。かく荒手結といふ事あれば、眞手結もあるべき事、論なし云々。五日、六日の眞手結は、かみにひき出でたる今昔物語の中にも、論なし云々といふ事なり。意には、引綱、又は、綱、ならんといはれたれど、うけかたは、それ、袖中抄に、眞手番の日は、射手の近衛舍人、榻の尻をまへぎまに引きたをりて、まへにはさむゆゑにいふといへるがよろしかりける。いさゝかなるよしにて、ものゝ名となること、いにしへのさまなり。近衛舍人着榻事、西宮記、十七の卷、賀茂祭警固の條にも、近衛舍人着榻半臂等、候陳と見えたり。眞手番の日は、やがて、大内の馬場にまゐる事なれば、榻を着するなるべし云々と見えたり。この説にて、聞こえたり。むかひにたてたりける車に、女のかほのしたすだれより、ほのかに見えければ、中將なりける男のよみてやりける

(語釋) むかひに云々は、此の男の、物見る馬場の埒を隔て、むかひの方に、女車は立てたるなり。○かほは、顔なり。ふるくは、かほといひて、總身の事にもいへど、こゝは、單に顔と見てよろし。○したすだれは、西宮記、十七の卷に、婦人之車簾なりとあり。車簾といふとは、異なり。下すだれは、車簾の下の方にそへて、かくるものなり。○中將云々、或る説に、中少將は、馬場のれど、屋に着くべければ、女車など入る處は、遠くて見えぬ、又、歌よみてやるべくもあらずなどいへど、此の文は、例の書きかへたるなれば、實を以て論ずまじきなり。古今集、戀に、右近の馬場のひをりの日、向ひに立ちたりける車の、下すだれより、女の貌のほのかに見えければ、よみてつかはしける、業平朝臣とありて、つぎの歌を載せたり

見ずもあらずみもせぬ人のこひしくは

あやなくけふやながめくらさん

○伊勢物語講義

二百三十五

(語釋) あやなくは、理なくにて漫の字などをあつ。今言に、わけもなくなどいはんが如し○ながめは、物れもひながら見るをいふ。たゞ、眺望の義に用ふるは、あたらず○一首のこゝろは、きはやかに見たるにもあらず、又、見ぬにもあらず、人の心にかゝりて、わけもなく、たゞ戀ひしくて、今日は物れもひくらさんとなり。さて其の人とさだかに知りたし、名のり給へといふ意を、餘韻にもたせたるなり。されば、返歌に、知るしらぬ云々とは、いへるなり

かへし

ふるまらぬ何かあやなくわきていはん

おもひのみこそしるべなりけれ

(語釋) 一首の意は、さやうに、其の人を知ると知らぬとを、異なる事にのたまふが、わけもなく事なり。たゞ、深く思ひ給へ、さし給はゞ、其の御おもひこそ、案内者となりて、あひたまふやうになれといふ意なりと、新釋にいへるにて、聞てえたり

のちは、たれと知りけり

(九十九) むかし、男、後涼殿のはざまをわたりければ、

(語釋) はざまは、こゝは、殿と殿との間をいふ○後涼殿とは、清涼殿の後北にあるゆゑにいふ。されば、はざまは、後涼殿と、清涼殿との間なることしるし

あるやんごさなき人の御つぼねより、わすれ草を、そのふ草をやりふとて、おし

(語釋) この處、諸註いかゞ、新釋にいへる、やまを物語には、みやす所の御方よりとあり。げにさやうならんと思はるゝ事なり。されど、此の物語にては、ある貴女の御局と見るべし。その貴女を、

此の男、もと相知れりしかども、かく禁中にまゐり給ひて、時めき給ふ事なれば、中たえたるなり。さてこゝは、かく中たえて、消息もなきは、念れたるならん。されど、さはいはで、中たえたるは、おほやけをはかりて、しのぶゆゑにやあらんといふ心を、あらはにいへば、側の人のきゝ知りやせんとして、わすれ草をさし出だして、わすれたるならんといふ心を知らせ、又、しのぶゆゑとやいふらんといふ心を、此の草をしのぶ草とやいふと、草の名を問ふさまに、いひまぎらして、人のきゝ知らぬやうにと、したるわざなり。ざるを、昔より、女の用意ありて、ものしたるよしを、考へえたる人なかりしかば、いづれの註も、みなときえざりき云々○わすれ草は、萬葉などにも、萱草と書きたるがおほし。和名抄にも萱草、一名、念憂(和名和須禮久左)と記し、後撰にも、「おもふとはいふものからにともすれば、わするゝ草の花にやあらぬ」、又、枕草子に、六月に、念草の花さける事もかきたり。されば、今も萱草とて、憂の比、黄なる花の咲くものをいふ事、明らけし。しのぶ草は、和名抄、苔の類の中に、垣衣一名、烏韭(和名之乃布久左)とありて、ことなる草なること明らかなるを、大和物語には、れなむ草を、しのぶとさ、わすれ草をいへばと書れたるは、心得がたし。一草に、二名ありといふは、あやまりなり

わすれ草おふる野べと見らめど

こはしのぶなりのちもたのまん

(語釋) これまで中たえたれば、げに念れたるならんと、見給ふらめど、さにはあらず、人目を忍ぶゆゑに、中絶せるなり。されば、又、逢ふ時もあらんと、心にたのみてあり。ゆく末も、たのまんとの意なり。それを、男も側の人に知られぬやうに、草によせて、まぎらはしたるさまなり

(百)むかし、左兵衛督なりける、在原の行平といふ人ありけり。その人の家に、よき酒ありとて、うへにありける人々のまんどて、來たりけり。

(語釋) 行平は、三代實錄に、貞觀六年三月、從四位上、備前權守、在原朝臣行平爲左兵衛督と見たり。良近朝臣は、貞觀十二年正月、右中辨となり、同十六年、左中辨には轉せれば、行平左兵衛督なる時は、良近は、左中辨にあらず。又、下にいふ太政大臣は、(忠仁公)同、十四年に薨じたまひて、良近まだ右中辨の時なり。かく事をかへたるは、例の事なり。○よき酒は、濁酒と清酒とある中に、清酒をいふなるべし。○うへにありける人々とは、殿上にありける人々なり。○「人々のまんどて來たりけり」、この詞は、もとなきを、本居翁の補はれたるなり。まことに、この詞なくては、文意きこえず

左中辨藤原の良近といふ人をなん、まらうどさねにて、其の日は、あるじまうけしたりける。

(語釋) まらうどさねとは、客のうちの主となる人をいふ。婿さね、使さねといふも、その主となる人をいふなり。○あるじまうけは、響應するをいふこと、前にもいへり

なまけある人にて、かめに花をさせり。その花の中に、あやこき藤の花ありけり。

(語釋) なまけある人とは、風雅心ある人の義なり。これは主人の行平をいふ。○うの花の中にいふにて、種々の花ありしことを知らせたる文なり。注意すべし

花のしなひ、三尺六寸ばかりなんありける。

(語釋) しなひは、花ぶさの長くさがりたるをいふなり。今の世の藤の花は、五尺、六尺ほどさがるもあれど、古はつくらずして、おのづから、咲きたれば、長きがまれにて、三尺六寸ぐらゐなるは、珍らしかりなるべし

うれを題にて、歌よむ、よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけしたまふと聞きて、來たりければ、どらへてよませける。

(語釋) はらからなる云々は、同胞なる男といふ意に見るべし。行平朝臣の同胞はほくて、たれともいひがたけれど、これも、業平朝臣をあてたるなるべし。さて業平朝臣は、歌にすぐれたる人なるを、歌の詞しらぬよしにかき、又、この歌のわるきなど、皆、記者の狂言なり。○あるじまうけし給ふと聞きて來たるは、これも、賓客をもてなさんとして、來たれるなり

もとより歌のことは、しらざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなん

(語釋) すまひは、争ひなり。こゝは、辭退するをいふ。○かくなんは、下によみけるといふ詞を含めたるなり

さく花のしたにかくるゝ人おほみ

ありしにまさる藤のかけかも

(語釋) おほみは、おほさにの意なり○ありしにまさるは、いよく榮えゆくをいふ○かもは、例の歎息の意なり○つぎの詞を以て見れば、藤原の太政大臣の、先祖にこえて、榮えたまふも、同じ氏族にて、良近朝臣の如き、よき人々の、其の下に多ければ、かくはあらんと、其の日の上客をはじめ、其の席なる、藤原氏の人々を、藤の花によそへてよめるなり

などかくしもよむといひければ、おほきおとゝの、榮花のさかりにみまうかりて、藤氏の、ことじさかゆるをおもひて、よめるとなんいひける。みな人、うしろすなりけり

(語釋) などかくしもよむ云々は、此の席にある人の問の詞なり○いまそかりては、おほしまじまといふ意なり○皆人云々は、此の歌をよみ出でたる時は、人皆、いかにかくはよむと、そしらんとするさまなりしかと、かやうくのわけにて、藤氏の、ことに、榮ゆるをよみたりと答へたりしかば、皆人、そしらすなりにきとなり

(百一)むかし、男ありけり。うたは、よまざりけれど、世の中をれもひしりたりけり。

(語釋) 世の中を思ひしりたりとは、世の中の人情を、よく知たりとなり。元來、歌は、物のあはれを旨とするものなれば、歌よむぐらゐの人は、すべての人情にも通じざるが、つねなれど、此の男は、歌はよまねど、人情はふかく、ものゝあはれを知りきとなり。なるは、氏族なる女の、尼をよみて、山

里にあるを、うらやめるよしの歌などおくれるは、まこと、なすけふかき事なればなり

あてなる女の尼になりて、世の中をおもひうむじて、京にもあらず、はるかなる山里にすみけるもどに、もどしどくなりければ、よみてやりける

(語釋) あては、上品の意なること、前にいへり○うむじては、今言に倦みはてしといふに同じ○しづくは、氏族の字音なり○元來、世をすてたる尼の許へ、男が歌をおくるなどは、尋常にあらねば、殊に氏族なるよしをこどわりたるなり。之を、もと逢へる中なりなど、説けるはわろしそむくどて雲にはのらぬものなれど

世のうき事ぞよそになるてふ

(語釋) うむくどては、世を背くどてなり○雲にはのらぬものなれどは、仙人などのやうに、雲に乗りて、空中を飛び行くといふが如き、ことごとしきわざにはあらねどなり○一首のこゝろは世を背くどて、雲に乗りて、飛びゆくものにはあらねど、山里にうつりすめば、おのづから、世の憂事よそになるといふよしに、うけたまはれば、君にもさこそおはすらんと、問ふよしなり。さて餘韻に、羨まし。我も世をいとへばといふ意を、含めたるなり

(百二)むかし、深草のみかどにつかうまつりける男ありけり。いとまめに、じちやうにて、あだなるこゝろなかりけり。

(語釋) 深草のみかどとは、仁明天皇の御事なり。此の帝崩じ給ひて、深草山に葬り奉られしかば、かく申すなり○まめは、眞實の意なること、既にいへり○じちやうは、實様の字音にて、やはり眞實

なるをいふ。かく重ねていふこと、此の比の書には、例れほきことなり

さるに、心あやまりやしたりけん。

(語釋) かく眞實忠直なる人が、親王たちのつかひ給ふ女に、ものいふは、あるまじき事なれば、心あやまちやしたりけんとは、いへるなり

みこたちの、つかひたまひける女を、あひしりにけり。さて朝にいひやる

(語釋) みこは、親王をいふ。此の外は、聞てえたるが如し
ねぬる夜のゆめをはかなみまどろめば

いやはかなくもなりまざるかな

(語釋) 昨夜逢ひしは、たゞ、夢の如く覺えて、はかなければ、せめて、又、さだかなる夢にだに見んとて、まどろめば、その夢をも見ず、いよく、はかなくなりまざる事よとなり○此の歌は、古今集にては、業平朝臣のなるを、たれどもさすべからぬやうに採りなしたるは、例の事なり
どなんよみてやりける。さる歌のきたなげさよ

(語釋) 歌のきたなげさよとは眞實なる人の、ぬしある女に逢ひし事なれば、思ひなほして、過を改むべきに、さはなくて、いよく、切なる情をよみてれくりたれば、かくいふなり。自記の書なれば、卑下して、いへるなりといふ舊説は、いかゞ

(百三) むかし、ことなる事なくて、尾になりける人ありけり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけん。賀茂の祭見に出でたりけるを男、うたふてある

(語釋) ことなる事なくとも、かしられりして、尾となる事とは、大抵、子にみられたりと云は、父か、夫を失ひたるが如き、よのつねならぬ事ありて、世をはかなみてのしわざなるを、此の人は、さる格段なる事なくて、尾になれるよしなり。されば、貌はやつして、尾となりたれど、世の中の事、ゆかしくて、賀茂の祭見にも行きたるなりけり

世をうみのあまとし人を見るからに

めくばせよともおもほゆるかな

(語釋) うみの云々、世を倦みて、尾となれるは、海の蜃にいひなして、蜃はみるをかりとりて、人にくはすものなれば、海藻喰せに、目くばせをかねたるなり。目くばすとは、今の世にもいふ如く、おもふ情を、目にて知らするをいふなり。こゝは、尾なれども、物ゆかしくて、祭見に出でたるは、われに目くばせして、戀の情をよせよと思はるゝよしなりとの意なり

(百四) むかし、男、かくては死ぬべしといひやりたりければ、女

(語釋) かくては死ぬべしとは、男が女に對して、かくつれなくては、こがれじに、死ぬべしと、いひやりけるなり

あら露はけなばけななん消えずとも

玉にぬくべき人もあらじを

(語釋) これは、男は、いと切に戀あるを、女の情なきを擧げて、一つの興をせるなり○一首の意は、よしや、消えなばきえよ、消えずありとも、玉とぬきて、めづる人はあらじものとなり。露を男

にたとへたるなり

といへりければ、ねたしとおもひけれど、こゝろざしは、いやまざりけり

(語釋) ねたしとれもひければ、かくつれなき女なれば、男は嫉くおもへ、其の容貌の美麗なるに、深く迷へるなれば、志はいよく切になりまざるとなり

(百五)むかし、男、みこたちのせうえらしたまふ所にまうで、たつた川のほとりにて

(語釋) せうえうほ、逍遙の字音にて、遊びたのしむ義なること、既にいへり○こは、古今集に、二條後の東宮のみやす所と申しける時に、御屏風に、立田川にもみち流れたる圖かけを題にて、よめるとて、素性法師の「もみち葉のながれてとまるみななどには、紅ふかき浪やたつらん」といふ歌のつぎに、業平朝臣の歌とあるを、此の文に、端の詞をかへて、とりたるは、例の事なり

ちはやぶる神代もさかずたつた川

からくれなゐに水くゝるとは

(語釋) 立田川に、紅葉の流るゝは、紅にて水を絞り染めにしたりと見えて、其の珍らしさ、いふばかりなし。神代には、珍らしき事、さまざまあれども、其の神代にも、紅に水をくゝりぐめにしたることは、聞き及ばずとなり。紅の下を、水のくゝる事にとける説は、あやまりなること、更に論なし

○ちはやぶるは、神の枕詞なり

(百六)むかし、なまあてなる男のもどり、こたちありけり。づれを内記なりける。

藤原のとしゆきといふ人、よばひけり。

(語釋) なまあては、生上品の意なり。殊に、勝れて上品なりといふにはあらで、なまゝゝの上品なるをいふ。すべて、ナマとは、熟せざる義にて、生意氣、生書生などのナマと同じつゝこたちは、御達にて宮仕の女房にもいへど、こは、さる貴女をいふにはあらで、此の生あてなる人の、召しつかふ女をいふなり○敏行朝臣は、ある説に、貞觀元年に少内記に任せられしよし見えたり。此の書、時代をばわざと書きかへたれど、又、その人になき官をば、かゝぬ例なり。心して見るべし○よばひの事は、前にいへり

此の女、かほかたちはよけれど、いまだわかければにや、文もをさくしからず。詞もいひまらず。いはんや、歌はよまざりければ、

(語釋) をさくしは、立ち優りてはきくしたるをいふ。こは、をさくしからずなれば、いまだ年若くて、文もはきくとは書き得ぬよしなり。おもふに、此の女は、十五六ぐらゐのさまなり○詞もいひまらずは、いまだ世なれずして、艶書の詞のいひざまを知らぬよしなり

かのあるじなる人、あんをかきてやりけり。めでまどひにけり。さてをどこのよめる

(語釋) あんは、案にて、下書のことなり○めでまどひにけりは、案外に、文の詞のよろしきをめでたるなり○ある説に、此の女を、業平の朝臣の妹なりといへど、覺束なし。事のさま、妹ともおぼしけれど、さらば、兄人など書くべきに、あるじの男とあるは、妹とせぬかきざまなり。此のことは、古

今集に、業平朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかはしける、敏行とあるをれもふに、業平朝臣の母、伊登内親王に仕ふる女のやうに聞てゆつれぐのながめにまさる涙川

袖のみひちてあふよしもなし

(語釋) ながめは、物れもひながら見る意と、長雨とをかねたり○ひちては、ぬれてといふに同じ○一首の意は、連日つゝきて雨やまぬ比は、殊に、ものさびしく、いよく戀ひしきおもひのまされども、涙に袖のぬるゝばかりにて、あはるゝ様子もなしとなり

かへじ、れいの女にかはりて

(語釋) 例の主人が、女にかはりて、よめるなり

あさみこそ袖はひづらめなみだ川

身さへながるときかばたのまん

(語釋) あさみは、あささにの意なり○ひづは、濡るゝなり○一首のこゝろは、君が涙川のあさゝにこそ、袖はぬれぬ。さては、深く思ひ給ふとはたのみにしがたし。身もながるばかりどうけたまはらば、たのみにしまぬらせんとなり。このうたは、萬葉に、「廣瀬川袖つくばかり浅きをや、心ふかめて我が戀ふるらん」とあるを思ひて、よめるなるべし

といへりければ男、いといたうめでゝふみばこれいれて、もてありくぞいふなる。

(語釋) 男、歌のれもしるきをめせ、文箱に入れて、持ちありきて、したしき友たちなどには、見せなどしたりとなり

おなじ男、あひてのち、文れこせたり。

(語釋) あひてのち云々、前なるは、いまだ逢はぬうちの事、こゝなるは、逢ひて後の事なりと、こゝとわれるのみなり

まうでこんとするに、雨のふりぬべきになん、見わづらひ侍る。身さいはひあらば、此の雨はふらじといへりければ、れいの男、女にかはりて、よみてやらす

(語釋) まうでこんとするには、参らんとするにの義なり。これより、雨はふらじといふまでは、男の文の詞なり。今、参らんとするに、雨のあるを厭ひ煩ひぬ。此の身、もし、僥倖なる身ならば、かく折あしく、雨はふるまじと、極めて切なる情をあらはしたるなり○れいの男とは、彼のあるヒの男のことなり。此の邊の文、簡にして意ふかし

かすくにおもひおもはずとひがたみ

身をこる雨はふりずまされる

(語釋) かすくには、今の言に、深切にといふが如し○とひかたみは、問ひ難さにの意なり○身をこる雨とは、そなたが眞實、深く我をれもふか否かをためし見る雨なりとの意なり○一首のこゝろは、深切に、そなたがれもふか、おもはぬかは、問ふとも知りがたし。何時も、体よくおもふよしのたまへばなり。さるに、今、雨のふりまさるは、そなたの深切のほどを試験するに、甚、便宜な

思ひし。の意なれど、花につきていふなれば、かくいへるなり。○此の歌は、古今集、哀傷の部に入
て、詞書に「櫻をうゑてありけるに、や、咲きぬべき時に、かの植ゑたりける人、みかりければ、其の
花を見てよめる、紀茂行」とあり。こゝも、はしの詞に、少し花のことあらば、歌の意は、一段なるべ
し。

(百九)むかし男、みそかにかよふ女ありけり。それがもとより、こもひ夢になん
見えたまひつるといへりければ、男

(語釋) みそかには、密かになること、屢いへり。密かに通へる女の許より、手紙にて、今宵、うた
ゝねの夢に、君を見て、いと戀ひしなといひよこしたりとあり

おもひあまりいでにしたまのあるならん

夜ふかく見えばたまむすびせよ

(語釋) たまむすびといふ事は、當時の物語書にれほく見えたり。諺に、人だまを見て、「魂は見つ
ぬしはたれどもしらぬども、むすびずとむる下がへのつま」と三たび唱へて、衣の下がへのつまを
結ぶ事といへり。此の諺の歌は、あるきものにはあらざるべし。されど、魂むすびといふ事の、ある
くよりいへる事なるは、論なし。○一首の意は、しのび逢ふ中なれば、却りてれもひ切にして、魂のう
かれ出でにし事もあるならん。そなたのうたゝねの夢に見えつるは、すなはち、其のうかれたる魂
なるべし。猶、夜ふかく、魂の見えなば、魂むすびして、そこにいとめ給へとなり

(百十)むかし、男、やんごとなき女の夢に、なぐさめたりける女をなぐさめたり

にて、いひやりける

(語釋) やんごとなきは、貴きをいふ。貴女のもとにありける女に、しのびて通じけるが、なくなり
ければ、それを吊ふやうにて、主の貴女に、ほのかにおもひを漏らしたるなり

いにしへはありもやしけんいまだこる

また見ぬ人をこふるものとは

(語釋) この歌は、心おほかた明らかなり。いにしへは、ありもやしけん、うれは、いざ知らず。まだ
見もせぬ人を、戀ふるものとは、我が身には、今ぞ知りぬとなり。さてかくはかなきものれもひをす
る事かなといふ意を含めたり。又、表面の意は、いひやらんとするほどに、なくなりたる女を戀ふる
よしにて、裏面には、未、しらぬ主の貴女を慕ふこゝろをこめたるなり

(百十一)むかし男、つれなかりける人のもとに
こひしとはさらにもいはじ下紐の

とけんを入はそれとしらん

(語釋) 戀ひしと、殊更にいはじ、我が戀ふるしには、必、君が下紐解けん、其の度ごとに、我が
戀ふる事を知れかしとなり。古諺に、人にこひらるれば、下紐とくといひならへる事あれば、かくは
いへるなり。○この歌は、後撰集、戀に、女のもとにつかはしける、在原元方とあるなり。こゝも、例の
あらぬさまにかきかへたるなり
かへし

した紐のしるしとするものあらなくに

かゝるかではかけずあるべき

(語釋) しか戀ふるしるしとせよとのたまへど、我が下紐はとけじ、かくばかりいたづらなるいひよせ言は、いひかけ給はで有るべきものか、これは、そら言なりといふ心なり。ふるき諺をたのみて、いひやりしに、しるし見ぬすと答へられしは、おもしろきなり

(百十二)むかひ、男、ねんごろにいひちぎりける女の、ことざまになりければ

（語釋）　　ことさまになりければ、異様になりければにて、今まで懇親なりし女の、異男に契りて、心かはれよしなり。さては、うらめしく悲しくおもふべければ、かくいひて、歌のこゝろを深からしむる、例の巧なり

すまの蛭のしほやくけふり風をいたみ

おもはぬかたにたなびきにけり

(語釋) すまのあまの鹽焼く煙、風のはげしさに、彼方へは靡くまじと思ひしに、案外にも、彼方へなびきぬる事よとなり。我がおもふ女の方になびきつきたるをたとへたり○この歌は、古今集の戀にあり。萬葉に「つなの浦に鹽やく烟夕されば、行き過ぎかねて山にたなびく」又「しかのあまの鹽やく煙風をいたみ、たちはのぼらで山にたなびく」などあり

(百十三)むかし男やもめにてゐて

(語釋) やもめは、和名抄に、無妻曰鰥(夜無平)無夫曰寡(夜無女)とありて、さうして夫や妻とすや

メといふこと、眞に論なし。されど、此の比より、男女、通じて獨居せるものを、ヤホメといひきと見
 えたり。今の世にも、いふことなり。又、支那も、同じ事にて、孟子の註には、老而無妻曰鰥、老而無夫
 曰寡とあれど、爾雅には、凡無妻無夫通謂之寡とも見えたり
 ながゝらぬいのちのほどにわするゝは

ながゝらぬいのちのほどにわするゝは

いかにみじかきこゝろなるらん

(語釋) 逢ひたる女の念れしうち、男はなほ慕ひて、男女をも呼ばて、やもめにてありつゝ、恨みてよめるなり。一首のこゝろは、聞こえたるが如し

(百十四)むかし、仁和のみかど、せり河に行幸したまひける時、なま翁の、今はさ
る事にげなくおもひけれど、もどつきにける事なれば、大たかの鷹がひにて、さ
むらはせたまひける。

(語釋) 仁和のみかとは、光孝天皇を申せるなり。仁和は、其の御代の年號なり、芹河行幸のこと
は、仁和二年十二月十四日なること、三代實錄に見えたり。ろのをりの事なるべし○なま翁とは、
生翁ナマの義にて、いたく年老いたるにはあらぬをいふ。年老いては、鷹飼は似合しからずれもひける
なり○もどつきにけるとは、はじめより、鷹飼の方につきにけることなればといふ心なり○大鷹の
たかかひとは、大鷹飼、鷄飼オホタカ、ヒコタカ、ヒとてある、その大鷹の鷹飼なり。西宮記、十一の卷に見えたり○さて此
の行幸の時、行平、供奉にて、翁さび々々とよまれたる事、後撰集に入りて、うたがひなし。さるに、
此の物語にては、業平朝臣の供奉して、よめるが如くつくりなしたり。此の朝臣は、此の時、已に卒

せられて、七年ののちなるを、猶、かくも作りなせるは、此の文のつねなりと知るべし

すりかりぎぬのたもとに、鶴のかたをつくりて、かきつけける

(語釋) すりかりぎぬは、摺狩衣なり。西宮記十一の卷、王卿衣服の條に、大鷹々飼者着地摺獵衣とあるこれなり○つるのかたをつくりて云々、こは加茂祭に放免のものゝきものにけづり。花をぬひつけたるごとく、作りたる鶴のかたを、袂にぬひつけたるなるべし(加茂祭放免の圖は、伊藤講師の徒然草講義、第二十五號に、其の圖をのせたり参照すべし)○さて後撰集に、嵯峨の帝の例にて、芹川に行幸したまひける日、在原行平朝臣「さがの山みゆきたえにしせり河の、ちよの古道あとはありけり」又同日、たかゝひにて、狩衣のたもとに、鶴のかたをぬひて、書きつけゝる、同人「翁さび人などがめそ」云々とあり。これを以て、かけるなるべし

翁さび人などがめそかり衣

けふばかりとぞたつもなくなる

(語釋) 翁さびのさびは、すさびの意にて、手すさび、口すさびなどいふすさびに同じ。すさびは、もと進^スといふ意に、其の方に心の進むをいふ。こゝは、翁の心やりに、摺狩衣のたもとに、鶴のかたを縫ひなど、翁の狩場のなごりにおもふ心やりに、かくはれやかなるさましたりとなり。それを、人などがむるなかれとなり。さて下の句に、今日ばかりと、名残のをしさにといふを、ことわれるなり。それを、鶴にうつしていへるなり。鶴も、鷹にとらるれば、今日ばかりと思ひて、聲たてゝ鳴く、それと同じことなりといふなるべし

おほやけの御けしきあしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、わかゝらぬ人は、きゝおひけりどや

(語釋) おほやけは、天皇の御事なり○御けしきは、御氣色にて、御心に障りたるゆゑみけしきあしかりきとなり○おのがよはひを云々、記者の詞なり。帝も今年五十七にたはしければ、御身に聞き負ひ給ひて、御けしきあしかりつらんとなり。されど、わかゝらぬ人は云々といふを、たゝちに、天皇の御事に見たる説は。わるし、これは、なべての人を、記者がいへる詞なり。しかし、天皇の御けしきあしくおはしけるも、之を聞き負ひ給ひしゆゑなりと知らせたる文なり

(百十五)むかし、みちの國にて、男女すみけり。都へいなんといふ。此の女、いとかなしうて、うまのはなむけをだにせんとて、おきのね、みやこしまといふ所にて、さけのませてよめる

(語釋) みちの國は、陸奥の國をいふ。都の男、陸奥の國へゆきて、女と住みしが、再、都へいなんといふをりの事なり○そまのはなむけは、馬の鼻向にて、もと旅行する人の馬を、その方へ向けて、わかれをつくるよりうつりて、たゞ、饑別の意にいふ詞となりぬ○おきのねは、沖の井、みやこしまは、都島なるべけれど、此の名所、陸奥の國にあるべし。されど、その所は今知られず○又、一本に、この一ぐたりのはなしなし。落ちたるなるべし

おきのねて身をやくよりもかなしきは

みやこしまへのわかれなりけり

(語釋)

れきは、熾なり。熾は、和名抄に、和名、オキヒ、猛火也とあり○一首の心は、熾を身にすゑてやくは、あつく堪へがたきものなるが、それより、一段かなしく堪へがたきは、君は都へ、吾はこの島邊(陸奥の國)へのこる別なりけりとなり○この歌は、古今集の物の名に、沖の井、都島をかくして、小野小町がよめる歌なるを、かくはし書をつくりて、一條の物語としたるなり

とよめりけるにめで、とまりにけり

(語釋)

聞こえたるが如し

(百十六)むかし男、すゝろに、みちの國までまどひいきけり。京におもふ人にひやる

(語釋)

すゝろは、前にもいへるが如く、案外に、又、漫になど譯すべし。都の人の行くまじき、遠國へまどひ行きたる意なり

なみまより見ゆるこじまの濱ひさぎ

ひさしくなりぬ君にあひみで

(語釋)

此の歌は、萬葉の「浪間より見ゆる小島の濱久木、ひさしくなりぬ君にあはすして」とあるを、少しなほして、一條としたること、明らかなり○上の句は、久しといはんための序のみ。君に合はずして、久しくなりぬ。まことになつかしとなり○ひさ木は、濱邊に生ふる楸のたぐひをいふ。萬葉に、(吉野にて赤人)ぬば玉の夜のふけゆけば久木れある、清き河原に千鳥はなくなど見えた

何事もみなよくなほりにけりとなんいひやりける

(語釋)

古意にいはく、むかし放縱なりし事ども、今はよくなほりたりといへり。此の詞、たゞに見ては、此の文の意にかなはず云々。此の説よろしかるべし。今までは、好色なる心のすさみに、本の妻をば、大かたに思ひてありつるを、さる心なほりてより、今更になつかしく、おぼゆるよしの歌をよみてやり、又、昔、放縱なりしことの、皆、なほりたりといひやれるよしなり

(百十七)むかし、みかど、住吉に行幸したまひけり

(語釋)

本居宣長翁いはく、此の條、すべて詞足らず、他條の例に似ず、歌も誰が歌ともわきまへがたく、神の現形も、俄なり。他條の例にていはく、「むかし、男、帝の住吉に行幸したまひける御供に仕ふまつりてよめる、「我が見ても」云々」とよめりければ、大神云々などころあるべけれ云々と、此の説、まことにさる事なり。此の條は、詞をあまたおとせるものと見ゆたり

我が見ても久しくちりぬ住吉の

きしのひめ松いく代經ぬらん

(語釋)

おほかた聞こえたるが如く、住よしの岸のひめ松は、我が見來たりてよりも、年久しきものなるに、其のはじめ生ひろめし時より、今までは、幾代か經しならんとなり○此の歌は、古今集に、題しらず、よみ人しらずとあるを、はしの詞をつくりて、一條の物語とはしたるなり

おほん神、げきやうしたまひて、

(語釋) げきやうは、現形の字音なり。御神、形をあらはして、歌よみたまへりとなり。そのゆゑは我が見ても歌に感じ給ひきとやうに、かきなせるなり
むつまじと君はあらすやみづかきの

久しき世よりいはひそめてき

(語釋) みづかきは、久しの枕辭なり○君とは、帝を申すなり○いはひは、こゝは、守る意なり○一首のこゝろは、我むかしより朝廷を守りそめて、今も、なほ、君を守ることなれば、むつまじと、君は知り給はずやと、神のたまふこゝろなり

(百十八)むかし、男、ひさしくおともせで、わするゝこゝろもなし、まわりこんどいへりければ、女

(語釋) 久しくおともせで云々、久しく音信もせぬ人の、参り來んといふは、言の上のみ、体裁つくろひいふを知らせたる文なり

玉かづらはふ木あまたになりぬれば

たえぬことのほうれしげもなし

(語釋) 玉葛の、あまたの木にはひひろがりたるやうに、君は彼方此方へ、体よき言いはるゝ事なれば、音信のたえぬのみは、格別、うれしと思はずとなり

(百十九)むかし、女、あまたなる男のかたみとて、わきたるものゝまゝ見て

(語釋) あたは、前にいへりのかたみは、形見の意にて、昔、ありつる人の形のかはりにて、其の情を見るゆゑにいふ。遊仙窟に、念記の字をカタミと訓めり

かたみこそ今はあたなれこれなくば

わするゝ時もあらましものを

(語釋) 形見こそ、今は敵なれ。これなくば、まぎれて忘れらるゝこともあるべきにその意なり○これは、古今集に、題しらす、よみ人しらすとある歌なり

(百二十)むかし、男、女のまだ世經ずとおぼえたるが、人のもとに、まのびてものきこえてのち、ほどへて

(語釋) 此の處、および、次の歌の解、新釋の説よろし。其の文にいはく、男女の中を世といへば、まだ男にあはぬ女ならんとおもはるゝを、女のまだ世へす云々とはいへるなり。しかいへるは、わかき女に、ものいはんとすれども、つれなきに、これはまだ世へぬ女なれば、うひ／＼しくて、かゝるならんとおもひをれるよしなり。歌につれなき人といへるを、合はせ見るべし。さてさやうにおもひしは、目きゝたがひにて、ろの女、異人にしのびてあへるなり。其の後、ほどへて、あまたの男にやあひつらんとおもひにくみて、歌よみてやるなりと

あふみなるつくまのまつりとくせなん

つれなき人のなべのかず見ん

(語釋) つれなき君を、近江の國の、筑摩の神の産子にして、祭にかづきたまふ、なべの數見たらんには、さうあまたならんと思ふに、はやく見まほしければ、其のまつりとくせよかしといふ意なり。かくいふは、彼の神の祭には、女の一生のあひだ、あへる男の數ほど、なべをかづきてわたるといふ事のあればなりけりと、例の新釋にいへり○近江の筑摩は、御厨なれば、延喜式などに、おほく出たり。此の神は、文德實錄に、仁壽二年二月、授近江國筑摩神從五位下と見へたり

(百二十一)むかし、男、梅つぼより、雨にぬれて、人のまかりいつるを見て

(語釋) 梅つぼは、内裏の凝花舎のことなり。前庭に、梅を栽ゑたれば、梅壺ともいふなり。藤壺、桐壺などいふ、皆この類なり○まかりとは、尊き所より、賤き所へ行くをいふ。まゐるといふ語の反對なり。然るに今の世に、人の許へゆくを、罷り出づといふは、古言の意に叶はず
うぐひすの花をぬふてふかさもがな

ぬるめる人にきせてかへさん

(語釋) がなは、例の願望の意○ぬるめるは、濡るゝやうすといふ義なり○此の歌は、今古集に、「鶯の笠に縫ふてふ梅の花、をりてかさゝん老かくるや」とあるなどによりて、記者のよめるなるべし○一首のこゝろは、鶯の梅の花をぬふといふ笠もがな、其の笠を、ぬれてゆく人にきせて、家にかへさんといへるなり

かへし

鶯の花をぬふてふかさはいな

おもひをつけよほしてかへらん

(語釋) 雨にぬれて、梅つぼよりまかるを、鶯の縫ふてふ花笠きせて、かへさばやとのたまへと、これをばほしからず、たゞ、うなたの思ひを付けられよ、さらば、袖をほして立ちかへるべしとなり。おもひのひを、火にとりなしたるなり

(百二十二)むかし、男、ちぎれる事、あやまれる人に

(語釋) 契れる事を、隠れたる女にいひやるなり

山しろのおでの玉水手にむすび

たのみしかひもなき世なりけり

(語釋) この歌は、六帖にも見え、又、新古今集戀にもあり○むすびは、掬の字をあつ。すくひ汲むことなり。玉水を掬ひてたのみしと言ひかけたるにて、上の句は序なり。たのみしのたを隔てゝのみしに掛けたる序なり○玉水は、袋草子に、井出の玉水とて、めでたき水ありて、往來の人、手にむすびて、のむといへり。玉は、ほめていふ詞なり○一首の意は、おほかた聞てえたるが如く、約束せる事を深くたのみにしたりしかひもなき世にて、かく隠れられたりと、恨み歎きたるなり
といひやれど、いらへもせず

(語釋) かく恨みなげきて、いひやりしかと、女よりは、つひに、答もせざりきとなり。これは、女に

は、あるまじきにくきしわざなるを擧げて、次條の、まことある女のさまを、つよく聞かせん料なるべし

(百二十三)むかし、男ありけり。深草にすみける女を、やうくあきがたにやおもひけん。かゝる歌をよみけり

(語釋) あきがたにや云々は、厭方^{アキ}にや思ひけん。出で、去んとする歌よめりとなり○これは、古今集、雜部に、深草の里に住み侍りて、京へまうで來とて、そとなりける人に、よみておくりける、業平朝臣とありて、此の前後、友だちなどの贈答せる篇なれば、是もしたしき人におくりつらんを、此の文には、夫婦となりて、住みける女にむかひて、よめる事とつくりかへたり。されど、古今集にもかへしは、よみ人しらすとあれば、女にてもありけん。其のつぎに、男とちの贈答も、戀の如くよみたるによるに、たゞ、したしき女とは知られたり

年を経てすみこしやどを出でいなば

いとゞ深草野とやなりなん

(語釋) 年を経て、いたく草おかく住みなしたる郷を、我がすていなば、まことの野とやならんといひて、所の名の深草野を、巧に詞になしたるなり。歌のこゝろは明らかなり

女かへし

野をなすはついでに鳴き居らん

かりにだにやは君はこぞらん

(語釋) 君のおほせらるゝ如く、果して野とならんには、吾は鶉となりて、鳴き居らん。しかるに、君は狩にだに、來給はざるべしとの心なり○鶉は、あれたる野にさるものなれば、年を経て、住みにしやとの、いたくあれたるを知らせたるなり

とよめりけるにめで、ゆかんとおもふこゝろ、なくなりけり

(語釋) 前の條には、男のしたへども、女のまことなきをいひ、こゝには、男のあきがたになりて、出で、いなどするを、女のうらむるけしきもなく、たゞ、野となるまゝに鳴きをうつゝ、いとせめて、狩にこんよすがをだに待ち居らんとけふかぎりなき女のまことをめで、男のどゞまれる事をいへり。作りなしたるものといへど、これを讀むとき、あはれすゝまざるはなし。されば、此のこゝろを添へんとて、巧に、はしの詞をかへ、はたそれ、男女の中らひをいふ終なれば、いとまたはれたりし事ともの末に、しかしながら見る人、心をせよとて、記者の心せるにやあらん。見よく、次の二つの條に、故あるつらねざまなるを、古意にいはれたるは、卓見といふべし

(百二十四)むかし、男、いかなりける事をおもひけるをりにか、よめる

(語釋) いかなる折とあらはさずして、かくいへる、なか／＼に、こゝろ深しおもふこといはでぞたゞにやみぬべき

われとひとしき人しなれば

(語釋) たゞには、萬葉集に、默然の文字をよめるにて、聞てえたり○人し。し文字は、例の助辭なり○一首の心は、おほかた聞てえたるが如く、思ふことは、無限にあれど、默して止みぬべし。おのれと同じやうなる感慨をもちし人の、なき世なればといふ意なり。總論のところにもいへるが如く此の物語、すべて事實は、いろ／＼に書きひがめて、何人の作にて、何人の事實といふこともわからぬやうになしたれど、實は業平朝臣、藤原氏の專横なるを憤り、おのれの不遇を歎じたるあと、掩ふべからざるものがあるが如し。すなはち、此の歌の如きは、大に時勢を憤慨したること、見えたり。歌も姿情たかくして、業平朝臣の詠なるべしとおぼゆ。新勅撰集には、業平朝臣としてあげたり。なほ、この條は、總論の處と参照すべし

(百二十五)むかし、男、わづらいて、こゝちしぬべくおぼえければ

(語釋) こゝちは、心持の略なること、前にいへるが如し○古今集には、「やまひして、よわくなりにつける時よめる。業平朝臣とあり。いづれにても、ことわりは、違はずつひにゆく道とはかねてきゝしかど

きのふけふとはおもはざりしを

(語釋) この歌は、意も詞も、あきらかなり。歌は、かくてこそ、餘情も深きものなれ。しかるに、後世の如くたくみていはんとするは、なか／＼にわるし。業平朝臣は、元慶四年五月二十八日に、年、五十六にて、卒せられぬ。されば、これはそのほどの歌にやあらん

伊勢物語講義終

明治廿六年五月十日印刷同十五日發行
明治廿七年十月十日再版合本



編輯者

東京市小石川區江戸川町十一番地

深井鑑一郎

發行者

東京市神田區西福田町一番地

伊藤岩治郎

發兌元

東京市神田區今川橋通り

誠之堂書店

印刷者

東京市京橋區元數寄屋町四丁目一番地

杉原辨次郎

挿圖

標註
史記列傳讀本

全五冊

一冊正價
各金廿錢
郵稅四錢

本書は史記の中特に列傳のみを取りて各官私立學校及其他の教科書并に參考書に供せんか爲にしたるものなり本書は從來のものより異なり頗る教育上の原理を應用し學級の程度に應じて訓點等の斟酌を施し古人の註釋を加へ精密なる地圖を挿入したる等深切至らざる所なし且價格の廉なるも世人の尤も嗜讀する列傳のみを引離したるなどは讀者に便益を與ふること蓋し尠からざるべし乞ふ速に一本を購讀して其價值あるを知られよ

